

# 仙台平野の遺跡群XIX

－平成20年度発掘調査報告書－

南小泉遺跡第58～60次・鴻ノ巣遺跡第11次  
今泉遺跡第7次・沖野城跡第3次  
洞ノ口遺跡第13次・養種園遺跡第7次など

2009年3月

仙台市教育委員会

# 仙台平野の遺跡群XIX

—平成20年度発掘調査報告書—

南小泉遺跡第58～60次・鴻ノ巣遺跡第11次  
今泉遺跡第7次・沖野城跡第3次  
洞ノ口遺跡第13次・養種園遺跡第7次など

2009年3月

仙台市教育委員会

## 序 文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれる仙台の風景は、私たち市民の誇りであると同時に将来へ守るべき大切な財産であります。

この仙台市の素晴らしい自然・風景と同様に、私たち市民の誇りであり大切な財産の一つに、悠久の歴史に育まれ守ってきた文化遺産の存在が挙げられます。実は、仙台市内には現在約800ヵ所もの遺跡が確認されております。これらの埋蔵文化財は、これまでの大きな時の流れの中でその存在価値を高めるとともに、現在においては各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされています。当教育委員会としましては、皆様のご理解とご協力を賜りながら、これらの貴重な文化財を保存し、次世代へと継承いくことに日々努めております。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成20年度に発掘調査を実施した南小泉遺跡、鴻ノ巣遺跡、今泉遺跡、沖野城跡、洞ノ口遺跡、養種園遺跡の調査結果を収録しております。

先人達の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大変な仕事であると思います。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成21年3月

仙台市教育委員会  
教育長 荒井 崇

## 例　　言

- 本書は、国庫補助事業による個人専用住宅他補助対象事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
- 本書は、仙台市教育委員会が実施した個人住宅建設に伴う南小泉遺跡第58・59・60次、鴻ノ巣遺跡第11次、今泉遺跡第7次、沖野城跡第3次、洞ノ口遺跡第13次、義種園遺跡第7次の各発掘調査報告書の合本である。
- 本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議のもとに主査光朗がとりまとめ、次のように分担して行った。

主　事　鈴木　隆：南小泉遺跡第58次、今泉遺跡第7次、沖野城跡第3次

主　事　加藤　隆則：南小泉遺跡第59・60次、義種園第7次

主　事　森田　義史：洞ノ口遺跡第13次

主　事　大久保弥生：南小泉遺跡第58次

文化財教諭　佐藤　正弥：南小泉遺跡第59次

文化財教諭　熊谷　敏哉：鴻ノ巣第11次

- 遺物尖削やトレース等の整理作業は、主に仙台市向田文化財整理収蔵室の作業員が行った。

- 本書に掲載した陶器・磁器に関する産地及び年代の所見は、文化財課仙台城史跡調査室の佐藤洋主査によるものである。

- 本書にかかる遺物・写真・実測図面等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

- 本書で使用した上色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠した。

- 断面図・平面図の標高値は、海拔高度を示している。

- 遺物図版の縮尺は、任意とする。

- 遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

SI：竪穴住居跡 SD：溝跡 SK：上坑

SE：井戸跡 P：ピット SX：性格不明遺構

- 遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

A：純土器 B：弥生土器 C：土師器（非ロクロ） D：土師器（ロクロ） E：須恵器

F：丸瓦 G：半瓦 I：陶器 J：磁器 K：石器・石製品

L：木製品・杭材 N：金属製品 P：土製品

- 竪穴住居跡の網かけは、被熱範囲を示している。

- 土師器実測図における網かけは、黒色処理されていることを示している。

- 遺物觀察表のカッコ内の法量のうち、器高は残存高を、また口径及び底径は復元値を示している。

- 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田1980）は、「十和田a（To-a）」を示し、降下年代は現在、西暦915年初夏とされている。

庄子貞雄・山田一郎1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城－昭和54年度発掘調査概報－』宮城県多賀城跡調査研究所

# 目 次

序文

例言

目次

## I はじめに

1 調査体制	1
2 調査計画	1
3 調査実績	1

## II 南小泉遺跡第58次発掘調査報告書

1 調査要項	2
2 調査に至る経過と調査方法	2
3 遺跡の位置と環境	3
4 基本層序	4
5 発見遺構と出土遺物	4
6 まとめ	6
7 寄贈された須恵器	9

## III 南小泉遺跡第59次発掘調査報告書

1 調査要項	10
2 調査に至る経過と調査方法	10
3 遺跡の位置と環境	10
4 基本層序	10
5 発見遺構と出土遺物	12
6 まとめ	21

## IV 南小泉遺跡第60次発掘調査報告書

1 調査要項	32
2 調査に至る経過と調査方法	32
3 遺跡の位置と環境	32
4 基本層序	32
5 発見遺構と出土遺物	32
6 まとめ	35

## V 鴻ノ巣遺跡第11次発掘調査報告書

1 調査要項	38
2 調査に至る経過と調査方法	38
3 遺跡の位置と環境	38

4 基本層序	39
5 発見遺構と出土遺物	40
6 まとめ	40
<b>VI 今泉遺跡第7次発掘調査報告書</b>	
1 調査要項	43
2 調査に至る経過と調査方法	43
3 遺跡の位置と環境	43
4 基本層序	43
5 発見遺構と出土遺物	44
6 まとめ	45
<b>VII 沖野城跡第3次発掘調査報告書</b>	
1 調査要項	49
2 調査に至る経過と調査方法	49
3 遺跡の位置と環境	50
4 基本層序	50
5 発見遺構と出土遺物	51
6 まとめ	53
<b>VIII 洞ノ口遺跡第13次発掘調査報告書</b>	
1 調査要項	56
2 調査に至る経過と調査方法	56
3 遺跡の位置と環境	57
4 基本層序	58
5 発見遺構と出土遺物	59
6 まとめ	63
<b>IX 養種園遺跡第7次発掘調査報告書</b>	
1 調査要項	73
2 調査に至る経過と調査方法	73
3 遺跡の位置と環境	74
4 基本層序	75
5 発見遺構と出土遺物	75
6 まとめ	77
<b>X 郡山遺跡</b>	80
<b>XI 砂押古墳</b>	81

# I はじめに

## 1 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 文化財課 課長 田中則和

整備活用係 主幹兼係長 古岡恭平、主査 長島栄一、主事 宮田晋、主事 森田賢治

調査係 係長 佐藤甲二、主査 主演光朗、主事 鈴木隆、主事 加藤隆則、主事 森田義史

文化財教諭 佐藤正弥、文化財教諭 熊谷敏哉

調査担当職員 第2表参照

## 2 調査計画

主に個人専用住宅の建設に伴う発掘調査費用の補助を目的とし、個人専用住宅他補助対象事業費として、総経費8,073千円、国庫補助金額3,976千円の予算で計画した。発掘調査の実施については、以下の実施計画を立案した。

調査対象地	調査予定期点数 30地点	調査予定期間 平成20年4月～平成21年1月	調査区域 個人住宅建物
仙台市若林区			

第1表 調査計画

## 3 調査実績

今年度の調査実績は、第2表に示したとおりである。調査原因是、全て個人専用住宅の建築である。なお、第2表中で調査次数がついている遺跡については、郡山遺跡を除いて、本書にその成果を掲載している。

NO.	遺跡名	対象面積	調査面積	調査次数	監修官	監査官
1	南小泉遺跡	57.29m <sup>2</sup>	18m <sup>2</sup>	4月21日	HOD.3.308	加藤、伊藤(△)
2	野野井跡	81.37m <sup>2</sup>	23.58m <sup>2</sup>	4月21日	HOD.2.288	森田(△)、藤谷
3	尾崎町120番地	70m <sup>2</sup>	16m <sup>2</sup>	5月7日	HOD.184-22	鈴木、熊谷
4	南小泉遺跡	124.44m <sup>2</sup>	48m <sup>2</sup>	5月12日～5月16日	HOD.184-4	鈴木、鈴谷
5	南ノ島遺跡	77m <sup>2</sup>	13m <sup>2</sup>	5月19日、5月21日	HOD.184-11	鈴木、鈴谷
6	南小泉遺跡	105.3m <sup>2</sup>	10m <sup>2</sup>	5月26日	HOD.184-18	鈴木、鈴谷
7	今泉遺跡	20m <sup>2</sup>	15m <sup>2</sup>	6月21日、6月24日	HOD.184-35	鈴木
8	明豊教育園	84.83m <sup>2</sup>	36m <sup>2</sup>	7月7日	HOD.184-43	鈴木、熊谷
9	六反田遺跡	106.1m <sup>2</sup>	23.5m <sup>2</sup>	7月15日	HOD.184-38	加藤、無谷
10	安東裏遺跡	117.0m <sup>2</sup>	24m <sup>2</sup>	7月23日～7月25日	HOD.184-39	森山(△)、藤谷
11	南小泉遺跡	73.26m <sup>2</sup>	95m <sup>2</sup>	7月26日～8月6日	HOD.184-45	加藤、伊藤(△)
12	郡山遺跡	105m <sup>2</sup>	13m <sup>2</sup>	7月22日	HOD.184-11	鈴木、藤谷、草川
13	美濃町開拓地	70.5m <sup>2</sup>	15m <sup>2</sup>	7月31日	HOD.184-48	森山(△)
14	沖野城跡	66.56m <sup>2</sup>	20m <sup>2</sup>	8月4日～8月7日	HOD.184-100	鈴木
15	宮ヶ瀬遺跡	65.4m <sup>2</sup>	16.5m <sup>2</sup>	8月20日	HOD.184-42	加藤、佐藤(△)
16	合併七丁目丘新築地	67.5m <sup>2</sup>	19.5m <sup>2</sup>	8月26日～8月27日	HOD.184-50	吉田(△)、藤谷
17	東昌寺跡新築出土地	72.04m <sup>2</sup>	28m <sup>2</sup>	8月8日	HOD.184-38	鈴木、佐藤(△)
18	古戸遺跡	61.7m <sup>2</sup>	12m <sup>2</sup>	9月11日	HOD.184-41	森山(△)、藤谷
19	南小泉遺跡	48.02m <sup>2</sup>	10m <sup>2</sup>	9月24日～9月26日	HOD.184-70	加藤、佐藤(△)
20	仲戸山遺跡	75.79m <sup>2</sup>	27.5m <sup>2</sup>	9月24日	HOD.184-30	森山(△)、藤谷
21	西小泉遺跡	85.89m <sup>2</sup>	30m <sup>2</sup>	9月29日～10月1日	HOD.184-29	加藤、佐藤(△)
22	南ノ口遺跡	226.62m <sup>2</sup>	94m <sup>2</sup>	9月29日～10月31日	HOD.184-45	森山(△)、藤谷
23	中戸山遺跡	65m <sup>2</sup>	10m <sup>2</sup>	10月6日～10月9日	HOD.34-30	鈴木、加藤
24	向ノ原遺跡	69.58m <sup>2</sup>	15m <sup>2</sup>	10月24日	HOD.184-30	鈴木
25	大戸山内塙跡	91.63m <sup>2</sup>	31m <sup>2</sup>	11月4日～11月6日	HOD.184-35	森山(△)、藤谷
26	今泉赤跡	108.33m <sup>2</sup>	24.6m <sup>2</sup>	11月11日～11月13日	HOD.184-46	森田(△)、藤谷
27	甚塙田遺跡	55.81m <sup>2</sup>	21.8m <sup>2</sup>	11月17日～11月20日	HOD.184-32	加藤、熊谷
28	郡山遺跡	80.11m <sup>2</sup>	1.5m <sup>2</sup>	11月26日	HOD.184-213	加藤
29	宮川遺跡	59.62m <sup>2</sup>	15m <sup>2</sup>	11月27日	HOD.184-226	鈴木、東川
30	山内冷泉遺跡	102.95m <sup>2</sup>	32m <sup>2</sup>	12月16日	HOD.184-218	米川、矢木(△)
31	南小泉遺跡	62.48m <sup>2</sup>	15m <sup>2</sup>	12月22日～12月26日	HOD.184-228	米川、佐藤(△)
32	南小泉遺跡	185.95m <sup>2</sup>	72m <sup>2</sup>	1月6日	HOD.184-22	小原、佐藤(△)
33	南小泉遺跡	44.16m <sup>2</sup>	6.75m <sup>2</sup>	1月19日	HOD.184-221	小原、佐藤(△)
34	南小泉遺跡	116.55m <sup>2</sup>	25m <sup>2</sup>	1月26日～1月27日	HOD.184-23	小原、佐藤(△)

第2表 調査実績

## II 南小泉遺跡第58次発掘調査報告書

### 1 調査要項

遺 跡 名 南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）  
 調 査 地 点 仙台市若林区南小泉二丁目105-29  
 調 査 期 間 平成20年5月12日～5月16日  
 調査対象面積 154.44m<sup>2</sup>  
 調査面積 48m<sup>2</sup> (1,2トレンチ各24m<sup>2</sup>)  
 調査原因 個人住宅建設工事  
 調査主体 仙台市教育委員会  
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係  
 担当職員 主事 鈴木 隆 文化財教諭 熊谷 敏哉

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年4月8日付けで地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教生文第184-4号）に基づき実施した。確認調査は平成20年5月12日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。建築範囲に東西8m×南北3mの1トレンチ、東西3m×南北8mの2トレンチを設定し、重機により盛土お



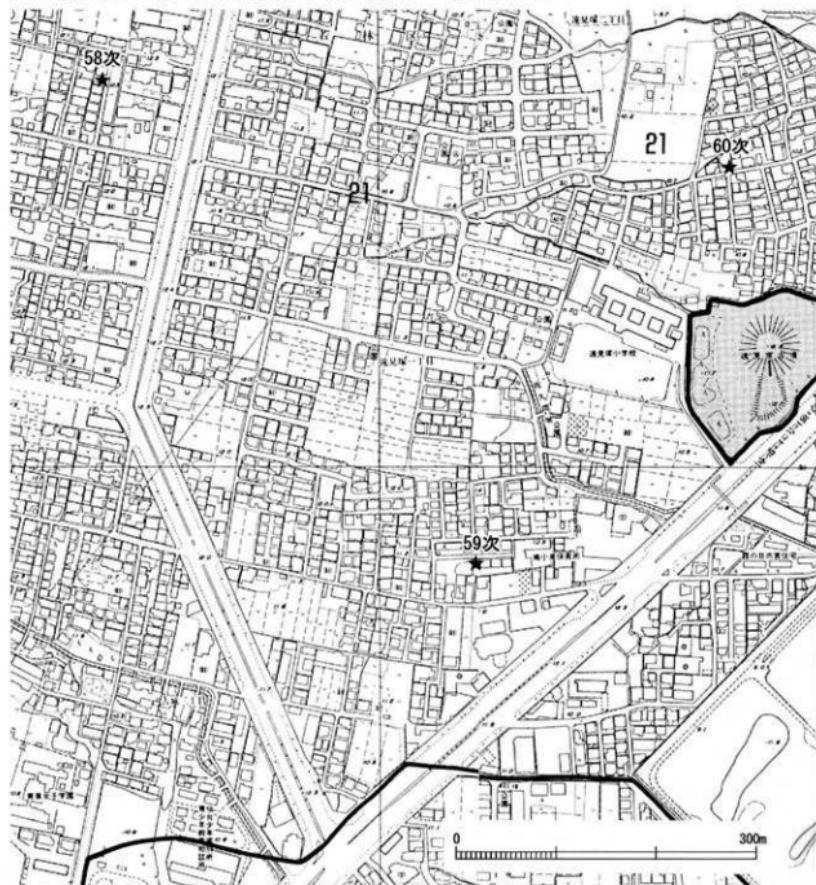
番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	南小泉遺跡	墓葬、壁敷	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	9	砂押1遺跡	散在地	自然堤防	古墳、奈良、平安
2	遠見塚六編	能力後円錐	自然堤防	古墳	10	砂押2遺跡	散在地	自然堤防	古墳、奈良、平安
3	若林城跡	円頂、窓溝、城郭	自然堤防	古墳、平安、中世、近世	11	神籠石跡	官衙開墾	自然堤防	奈良、平安
4	畠舎廻廊跡	馬鹿、屋敷、住居、住跡	自然堤防	縄文、古墳、平安、中世、近世	12	中横所遺跡	散在地	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安
5	森野町的遺跡	集落	自然堤防	古代、中世、近世	13	河野野跡	城跡	自然堤防	中世
6	法螺定水槽	平成	自然堤防	古墳	14	山田東6番地跡	桑田	通背地	奈良、平安
7	新堀古墳	円墳	自然堤防	古墳	15	中佐東遺跡	包含地	自然堤防	平安
8	猪塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	16	中佐東南遺跡	聚落、墓地	自然堤防、後晉時期	勢多、古墳、平安、中世、近世

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

より1層を掘削した。1・2トレンチ共にⅢ層上面で溝跡、土坑、ピット等を検出した。検出状況を写真により記録し、掘削後写真・図面により記録した。

### 3 遺跡の位置と環境

本書所収の南小泉遺跡の調査は第58~60次で、各調査地点は第2図に示したとおりである。各地点の詳細はそれぞれの報告に譲り、以下では南小泉遺跡の位置と環境について概要を述べる。



第2図 調査地点の位置

仙台市は西部と東部で地形が大きく二分され、西部は奥羽山脈から派生する丘陵ないし段丘地形となっている。東部は、北から七北田川、名取一広瀬川、阿武隈川の3河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がり、河川の流域には扇状地、自然堤防、後背湿地、旧河道からなる複雑な地形を形成している。

南小泉遺跡は仙台市の東部に位置し、七北田川と名取一広瀬川に挟まれた沖積平野の自然堤防上に立地している。遺跡の規模は、東西約2km、南北約1kmの範囲に広がり、市内でも最大規模の遺跡である。遺跡内には遠見塚古墳を含んでおり、西側では、南部で若林城跡と、また北部で養種園遺跡や法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳などの古墳群と接している。標高は西側で約13m、東側で約7.5mの西高東低である。

遺跡は、これまでに57次の調査が実施されており、縄文時代～近世の複合遺跡として理解されている。各時代における過去の調査成果については、仙台市文化財報告書第306集「南小泉遺跡他」を参照されたい。

#### 4 基本層序

基本層は4層に分かれる。盛土は1トレンチで28～70cm、第2トレンチでは20～40cmの厚さがある。I層は現代の耕作上である。II層はその上面で遺構が検出されており基盤層である。IV層はIII層と同様の砂質シルト層である。

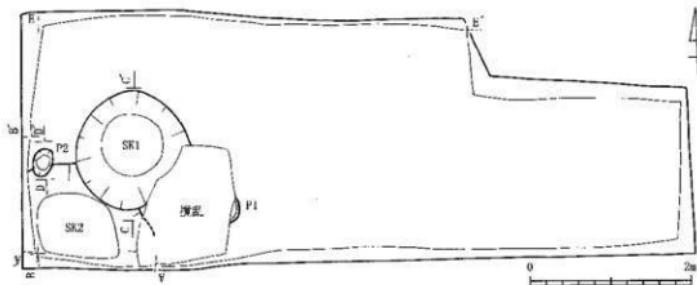
#### 5 発見遺構と出土遺物

##### ① 1トレンチ

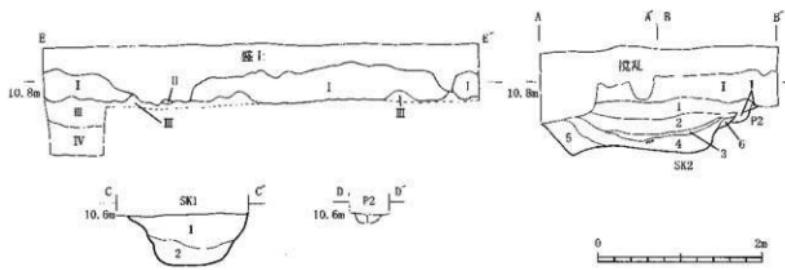
建物範囲の北側に東西8m、南北3mの調査区を設定した。II層上面で土坑2基、ピット2基を検出した。遺構は全て西側に集中している。



第3図 調査区配置図



第4図 1トレンチ遺構配置図



品種	オカ	オカ	備考
1 T 1 層	10Y34H	輪縁色。	軽土質シルト。炭化物鉄子をやや多量に含む。鐵介殻を少許含む。
1 T 1 層	10Y34M	輪縁色。	軽土質シルト。且つ土をまだら状に多量含む。
1 T 1 層	10Y34N	輪縁色。	砂質シルト。基盤部。
1 T 1 層	10Y34N	輪縁色。	砂質シルト。
2 T 1 層	10Y34J	輪縁色。	軽土質シルト。炭化物鉄子をやや多量に含む。鐵化鉄を少量含む。
2 T 1 層	10Y34J	輪縁色。	軽土質シルト。且つ土をまだら状に多量含む。
2 T 1 層	10Y34K	輪縁色。	砂質シルト。基盤部。

第5図 1トレーンチ北壁、西・南壁、SK1、P2断面図

### 1) 土坑

SK 1 土坑 SK 2 と重複しており、本造構が新しい。平面形は円形である。規模は、上端での径が140cm、下端での径が98cm、深さは70cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に分かれる。遺物は堆積土1層中から非口クロ土師器片5点、須恵器片2点(第8図1)、平瓦片2点(第8図3)、堆積土2層中から平瓦片1点が出土した。SK 2 土坑 調査区南西角で部分的に検出した。SK 1 土坑と重複しており、本造構が古い。平面形は不明である。規模は東西150cm以上、南北120cm以上、深さ70cmである。堆積土は6層から成る。遺物は堆積土2~4層中から非口クロ土師器片1点、ロクロ土師器片1点、須恵器片1点(第8図2)、瓦片1点が出土した。

### 2) ピット

2基検出した。P 1は擾乱に切られており詳細は不明である。P 2はSK 2土坑より新しい造構である。平面形は楕円形で、長径約30cmである。遺物は出土していない。

### ② 2トレーンチ

建物範囲の南側に東西3m、南北8mの調査区を設定した。Ⅲ層上面で溝跡2条、ピット13基を検出した。

#### 1) 溝跡

S D 1 溝跡 トレーンチの北側で検出した。東西に延び、調査区域外に延びている。規模は、上端幅100cm、下端幅50cm、深さ55cmである。堆積土は1層である。遺物は、堆積土中から非口クロ土師器片22点が出土した。

S D 2 溝跡 トレーンチの中央やや南寄りで検出した。東西に延び調査区域外に延びている。規模は、上端幅90cm、下端幅60cm、深さ25cmである。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

## 2) ピット

13基検出した。なお、13基のうち5基のピットは、SD I溝跡完掘後にその底面で検出したものである。ピットは調査区中央及び北側で多く検出された。平面形は円形、楕円形、方形のものがある。規模は、長軸で25~90cmのばらつきがあるが、20~40cmのものが多数を占める。深さは、Ⅲ層上面から検出されたもので10~40cmである。SD I溝跡の底面から検出されたものは、本来Ⅲ層上面を掘り込み面としていた遺構であれば、少なくとも50cm以上の深さがあったものと推定される。

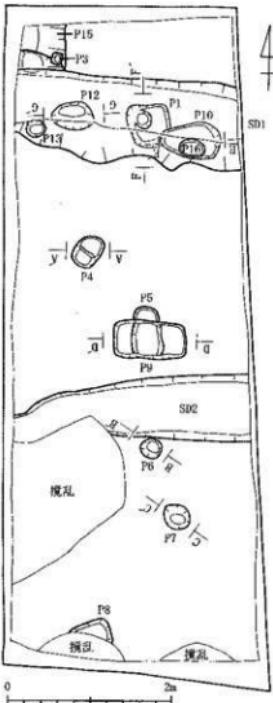
これらのピットについて、平面形、規模の点で特にまとまった特徴は見られず、建物跡として組むものも確認できない。ただし、SD I溝跡の底面で検出されたピット1については、平面形が隅丸方形を呈し柱痕跡が確認されたことから、柱穴と考えられる。規模は、径50cm、深さ50cm以上である。柱痕跡は掘り方の北東角寄りにあり、直徑は約20cmである。この遺構については、他に類似するものが無く建物跡となるか否かは不明である。遺物は、P 9、4、7の堆積土中から非クロコロ土師器の小片が出土している。

## 6 まとめ

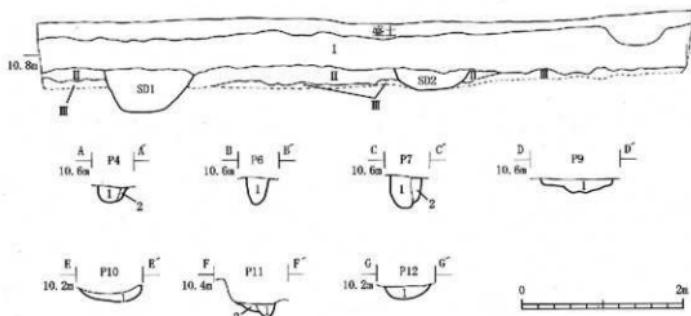
今回の調査により、1トレンチで上坑2基、ピット2基、2トレンチで溝跡2条、ピット13基を検出した。遺構の年代については、いずれの遺構も堆積土中より小片の遺物が出土しているに過ぎないため、その形成年代を知る事は困難である。

まず1トレンチの2基の土坑については、どちらも平底の小片を含むことから古代以降に埋没したものと推定される。なお、SK 2土坑から出土した波状沈線をもつ須恵器甕の口縁部破片は、7世紀頃のものと考えられる。2トレンチの遺構から出土した遺物は、全て非クロコロ土師器の小片である。しかし出土量も少ないとから、遺構の形成年代を示す可能性は低く、後世の混入によるものと考えられる。

遺構の年代を知る手がかりはいずれも断片的で、その詳細を示すことは出来ないが、古墳時代以降で概ね古代を中心とする遺構群であると考えられる。

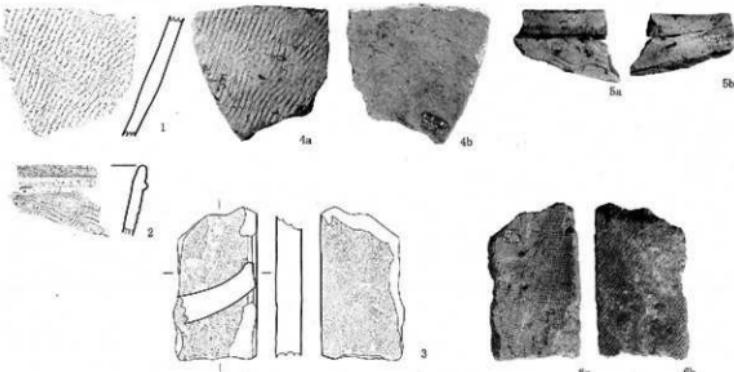


第6図 2トレンチ遺構配置図



層位	主色	土性	層
SK-1	灰褐色	粘土質シルト	Ⅰ
2	灰褐色	粘土質シルト	
SK2-1	灰褐色	粘土質シルト	Ⅱ
2	灰褐色	粘土質シルト	
3	灰褐色	粘土質シルト	Ⅲ
4	灰褐色	粘土質シルト	
5	灰褐色	粘土質シルト	
6	灰褐色	粘土質シルト	
SD1-1	灰褐色	粘土質シルト	SD1
SD2-1	灰褐色	粘土質シルト	SD2
P1-1	灰褐色	粘土質シルト	P1
P4-1	灰褐色	粘土質シルト	P4
2	灰褐色	粘土質シルト	
P6-1	灰褐色	粘土質シルト	P6
2	灰褐色	粘土質シルト	
P7-1	灰褐色	粘土質シルト	P7
2	灰褐色	粘土質シルト	
P9-1	灰褐色	粘土質シルト	P9
2	灰褐色	粘土質シルト	
P10-1	灰褐色	粘土質シルト	P10
2	灰褐色	粘土質シルト	
P11-1	灰褐色	粘土質シルト	P11
2	灰褐色	粘土質シルト	
P12-1	灰褐色	粘土質シルト	P12
2	灰褐色	粘土質シルト	

第7図 2トレーン東壁・溝跡・ピット断面図



周寺 番号	変種 番号	出土地点	分類		法量 (cm <sup>3</sup> )	特徴、備考 (測定等)	写真 回数
			遺構名	説明			
1	E-2	SK1	2面	前心部	直	—	—
2	E-3	SK2	2~4面	前心部	直	—	—
3	G-1	SK1	2面	直	平直	—	—

第8図 遺物実測図・写真



1 1トレンチ完掘状況全景（西から）



2 1トレンチ北壁断面状況（南から）



3 1トレンチSK1・2土坑完掘状況（西から）



4 1トレンチSK2土坑断面状況（北東から）



5 2トレンチ完掘状況全景（北から）



6 2トレンチ東壁断面状況（北西から）



7 2トレンチP 1・10・16完掘状況



8 2トレンチSD 1溝跡断面状況（西から）

図版1 調査区全景、基本層序、検出遺構

## 7 寄贈された須恵器（横瓶）

### 1) 寄贈の経緯

本資料は、南小泉第58次調査実施時に、調査地の隣接地に住む方より仙台市に対し寄贈を受けたものである。寄贈者によれば、40~50年前に現宅地の近隣において耕作中に発見し、現在まで保管していたとの事である。なお、寄贈者より、仙台市教育委員会教育長あて寄贈する旨の文書を提出していただいた。

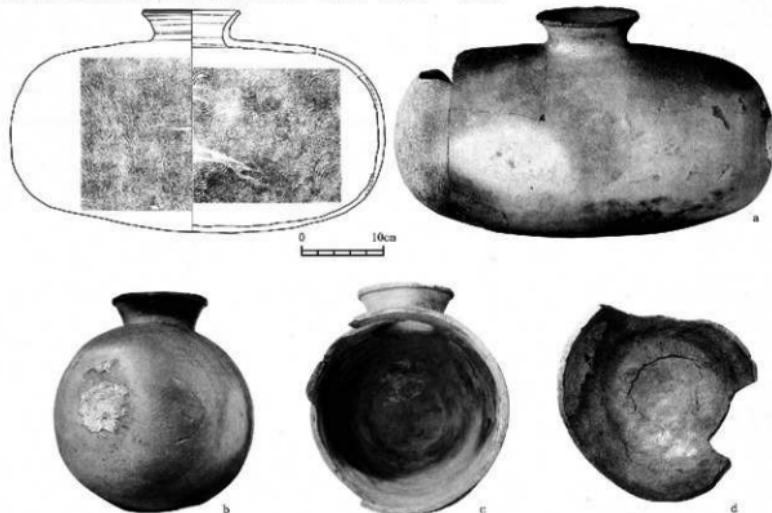
### 2) 横瓶について

口径11.0cm、高さ30.0cm、胴部横幅の最大径は50.6cmである。口縁部は、体部との接合部からなだらかに外傾し、頸部はわずかに上部へつまみ上げられている。頸部の装飾はない。胴部は、肩が大きく張る隅丸の長方形に近い形を呈する。外面には平行タタキが全面に施されており、その内面には、同心円状の当て具痕が見られる。胴部の右側面は、粘土板によって閉塞されている（第9図d）。左側面の外面には、弧を描くように、縫に器面の剥がれが見られ（第9図b）、また内面には、側面と胴部の間に器壁の盛り上がりが観察できることから（第9図c）、左側面も粘土板によって閉塞されている可能性が考えられる。

現在のところ、宮城県内において横瓶の出土が報告されているのは、大崎市混内山横穴墓群、利府町菅谷道安寺横穴群が挙げられるが、例はわずかである。採集品のため、その出自等は不明と言わざるを得ないが、完形に近く、製作痕跡もよく観察できることから、製作方法を復元できる資料として貴重であると思われる。

#### 【参考文献】

春日真実2001『横瓶の製作方法』『つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究第9号 北陸古代土器研究会  
東北古代土器研究会2008『東北古代土器集成－須恵器・窯跡編一（陸奥）』



団中 番号	地點 番号	出土地點 遺構名・位置	分類	測量 (cm・g)	特徴・備考 (四邊等)	
					種別	測定・記
I	E-1	古墳跡	横瓶	36.0 11.0 50.5	外縁：平行切欠 内面：アテ痕有(同心円)	

第9図 横瓶実測図・写真

### III 南小泉第59次発掘調査報告書

#### 1 調査要項

遺跡名 南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）  
調査地点 仙台市若林区連見塚1丁目35-1の一部  
調査期間 平成20年7月22日～8月6日  
調査対象面積 73.28m<sup>2</sup>  
調査面積 約55m<sup>2</sup>  
調査原因 個人住宅建設工事  
調査主体 仙台市教育委員会  
調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係  
担当職員 主事 加藤 隆則 文化財教諭 佐藤 正弥

#### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年4月8日付で地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教生文第184-85号）に基づき実施した。確認調査は、平成20年7月22日に着手した。建築範囲中央に初め東西3m×南北8.5mの調査区を設定し、重機により盛土およびI～V層を除去した。VI層上面で人力により造構を精査したところ、同面で造構を検出したため、引き続き本調査を実施した。調査区南部で豊穴住居跡が東西両側に延びていたため、申請者および施工業者との協議の上、調査区を西側は2m（東西）×4m（南北）拡張し、東側は建築範囲まで拡張した。最終的な調査面積は約55m<sup>2</sup>である。拡張後、S I 2豊穴住居跡の続きをS I 3・4豊穴住居跡および小溝状造構群や土坑等を検出し、すべての造構を写真および図面により記録した。重機により調査区を埋め戻し、調査を終了した。

#### 3 遺跡の位置と環境

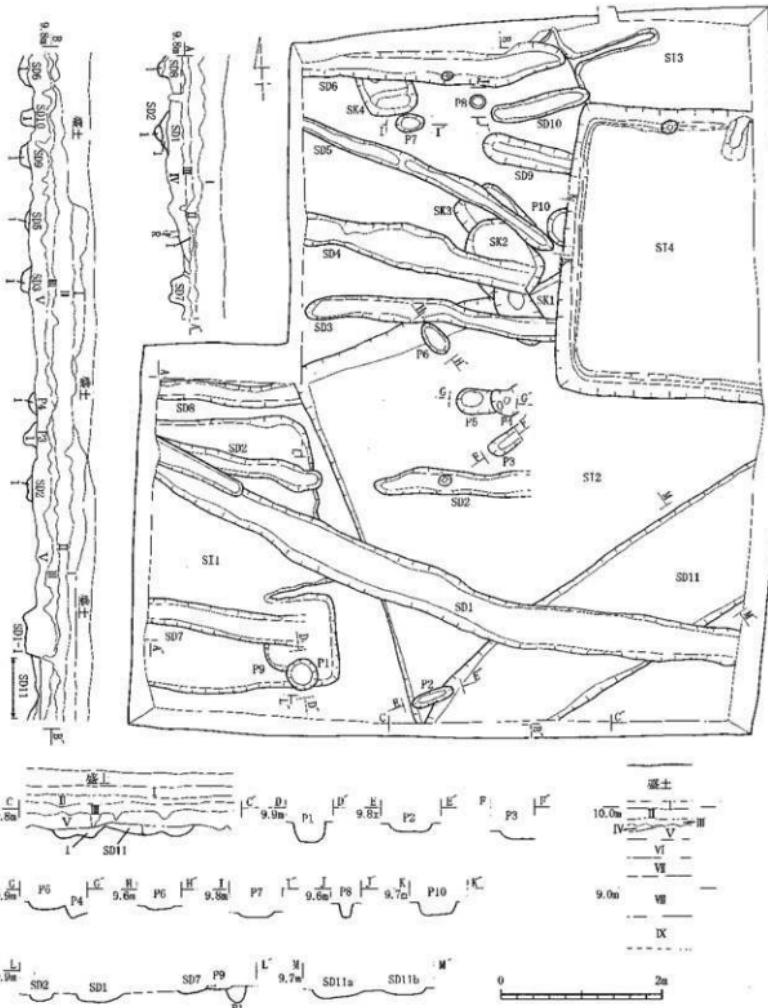
遺跡の位置と環境については、前項「II 南小泉第58次発掘調査報告書」を参照されたい。本調査地点は遺跡範囲の中央南寄りに位置し、連見塚古墳の西南西350mの地点にある。

#### 4 基本層序

基本土層は盛土下に9層を確認した。IV層は調査区北西側にのみ分布し、古墳時代～古代の造構はVI層上面で検出される。VI層以下は調査区南側を重機により掘削した。上層はI～VII層までが砂質シルトで、VIII層が中粒砂、IX層は鉄分を多量に含む黄褐色粘土層である。

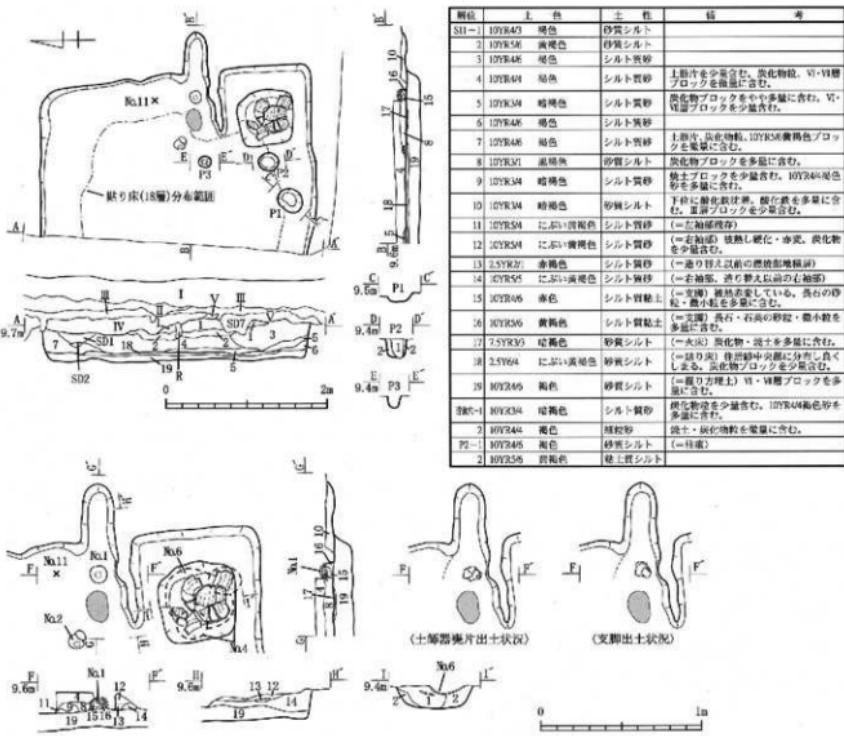


第10図 調査区配置図



種別	七 色	十 色	補 助	考	部位	土 色	土 性	需 要	式
I	BYK946	薄青色	砂質シルト	-	V6	BYK946 薄青色	砂質シルト	V6よりモカ明るい。	
II	BYK950	中青色	砂質シルト	-	V6	BYK950 中青色	中砂質		
III	BYK952	深青色	シルト風	園芸植物用	V6	BYK952 深青色	粘土	園芸植物を栽培するに含む。薄く多量に液化処理	
IV	BYK949	近い薄黄色	砂質シルト	園芸植物用	V6	BYK949 近い薄黄色	粘土	园艺植物を栽培するに含む。	
V	BYK944	暗褐色	砂質シルト	粗粒土用 小耕作低灌漑の種類上またはその混合土	V6H	BYK944 暗褐色	砂質シルト	12%の高風化土ブロックを少混合。	
VI	BYK945	褐色	砂質シルト	土壤改良用 V7墨ロックがとこどろきに	V6H	BYK945 褐色	砂質シルト	11%のブロックを少混合。	

第11図 遺構平・断面図



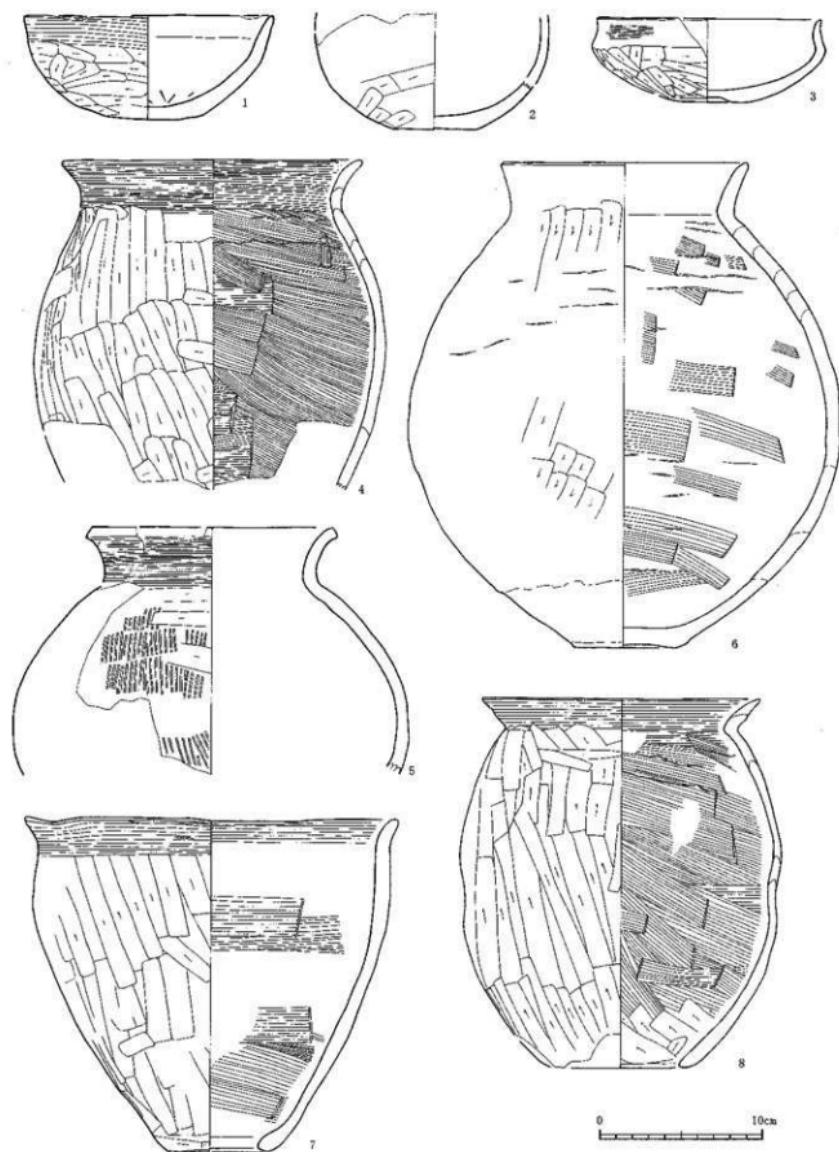
第12図 SI1竪穴住居跡平・断面図

## 5 発見遺構と出土遺物

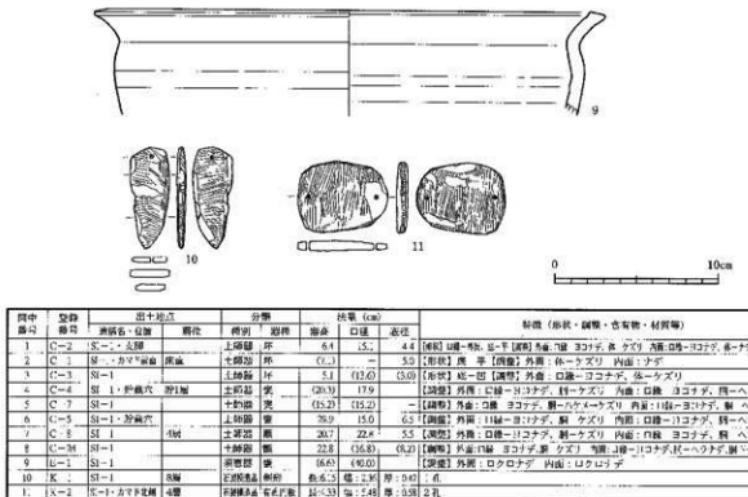
VI層上面で竪穴住居跡4軒、土坑4基、溝跡2条、小溝状遺構群、ピット10基を検出した。以下、遺構ごとに記述を進めるが、11条検出した溝跡のうち、SD 2～10溝跡については規模や方向性等から小溝状遺構群と捉えた。

### 1) 竪穴住居跡

S I 1 竪穴住居跡 椰査区南西に位置し、西側は調査区域外に延びている。平面形は隅丸方形を基調としたもので、方向は東辺でN-8°-Wである。SD 1溝跡、小溝状遺構群(SD 2・7溝跡)、P 1・9と重複し、いずれの遺構よりも古い。確認面から床面までは35～40cmで、壁は検出した三辺とも80°前後の急角度で立ち上がる。堆積土は10層確認した。8～10層はカマド内堆積土である。床面はほぼ平坦で貼り床(18層)が住居跡中央に分布し、カマド前面でやや硬化している。また、周辺は掘り方理土上面を床面としている。カマドは東壁に設けられる。右袖は壁から88cm、高さ15cmが残存し、造り替えが見られる。廃棄時(造り替え後)の袖構築土は12～14層で、造り替え以前の袖構築土は14層、燃焼部堆積土は13層である。支脚は黄褐色粘土を盛り上げて柱状にしており、上部は被熟赤変している。支脚上で10cm程度の土師器壺片5枚が重なって出土した。最下の破片は支脚に埋め込まれており、支脚の一部であろう。壺破片には土師器壺(No.1)が伏せられているが、これが支脚の一部か、廃棄時のものかは不明である。煙道部は燃



第13図 SI1堅穴住居跡出土遺物（1）



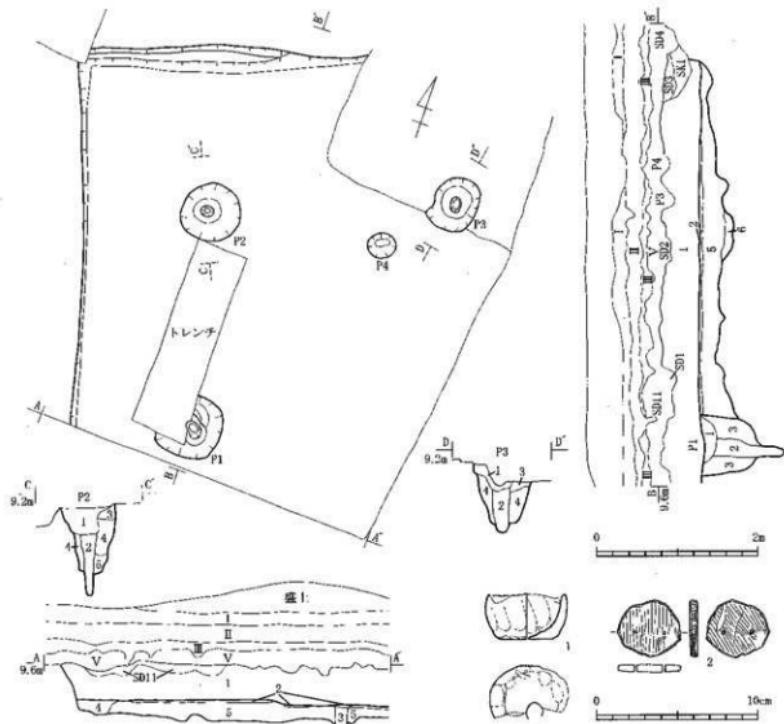
第14図 S11豎穴住居跡出土遺物（2）

焼部と段差を持たず、壁外へ50cm 延びている。カマドの全長は128cmである。

カマド以外の施設として、貯蔵穴およびピット3基を検出した。貯蔵穴はカマド右側に位置し、平面形は方形、規模は東西67cm×南北66cm、深さ19cmである。堆積上は2層で、1層上面で土師器2個体（No.4・6）が出土したほか、2層中より黒曜石の剥片1点が出土している。ピット3基の平面形および規模は、P1が長軸33cm×短軸26cmの楕円形で深さ6cm、P2は長軸25cm×短軸22cmの円形で深さ21cm、P3は長軸16cm×短軸14cmの円形で深さ15cmである。P2では直径14cmの柱痕を確認している。

カマドや貯蔵穴以外の出土遺物は、床面から土師器坏（No.2）1点、床面からやや浮いた位置で石製模造品2点が出土した。堆積上からは、土師器坏片約25点、甕約400点、壺片約30点が出土した。総量は平箱2箱である。図示した遺物は11点である。第13図1・2は平底の土師器坏で、1は口縁部と体部にわざかに稜のある土器である。3は口縁部と体部に稜があり、口縁部が外反する上部器坏で底部外面は浅く窪んでいる。5は体部外面の調整にハケ口後へラケズリが施される。9は須恵器鉢で頸部がくびれ、胴部上半でやや膨らむ器形である。10・11は石製模造品で10は剣形、11是有孔円板である。

S11豎穴住居跡 調査区南側に位置する。東側および南側は調査区域外に延びているため、平面形および規模は不明であるが、壁や柱穴の位置から、一辺600cm以上の方形と推定される。方位は西壁がN-18°-Wである。S11豎穴住居跡、SK1土坑、SD1-11溝跡、小溝状構造、ピットと重複し、いずれの遺構よりも古い。堆積土は1層で、壁際流入土等は確認されない。壁は北壁と西壁を検出した。北壁は西側で段がつきテラス状になり、西壁は60°前後と比較的緩やかに立ち上がる。壁の高さは最も残りの良い西壁で52cmである。床面は住居跡南東がやや低くなるほかはおおむね平坦である。住居跡中央はしまりの強いいぶい黄褐色砂質シルト土を2~3cm敷いて貼り床とし、周辺部は掘方埋土上面を床面としている。カマドは検出されず、柱穴3基（P1~3）、ピット1基（P4）を検出した。柱穴はいずれも柱材の抜き取りが見られる。堆積上は5層を確認し、1層が抜き取り穴、2層が柱痕、3~5層が掘り方埋土である。いずれの柱穴も掘り方底面には、荷重で15~30cmほど沈んだ柱の圧痕が確認



層位	土色	土性	圖
302-1	1073444 黄色	砂質シルト 炭化物質を少量含む。	
2	1073453 にぶい黄褐色	砂質シルト (一貼り土)	
3	1073451 にぶい黄褐色	砂質シルト (=ビック) 構造を多面に含む。IV層ブロックを多面に含む。炭化物質を微量に含む。	
4	1073444 黄色	砂質シルト (=通り方透土) IV層を含微量に含む。	
5	1073441 姫褐色	砂質シルト (=崩落方透土) 炭化物質ブロックを少量含む。IV層ブロックを少量含む。	
E2-70~75cm			
1	1073344 姫褐色	砂質シルト (柱跡を取り除く) 炭化物質を少量含む。	
2	1073253 姫褐色	砂質シルト (柱跡)	
3	1073446 黄色	砂質シルト	
4	1073237 姫褐色	砂質シルト 炭化物質を少量含む。	
5	1073444 黄色	砂質シルト	

層位 番号	標高 m	出土地点 遺構名・位置	分類	寸法(cm)			特徴(形状・測定・含有物・材質等)	専用 区分
				直径	高さ	幅		
1	C-17	SS1 上層	七脚器	直徑 2.7	4.7	3.3	【例】外側:コピナゲ 底面:コピナゲ 内面:コピナゲ	9-12
2	X-4	SS2 底層	六脚器	直徑 1.41	高さ 3.70	幅: 0.61	2 例	9-11

第15図 SI 2 穴住居跡

される。柱穴の規模および平面形は、P 1 が長軸88cm × 短軸77cmの方形で深さ68cm、P 2 は長軸75cm × 短軸68cmの円形で深さ87cm、P 3 は長軸68× 短軸55cmの梢円形で深さ78cmである。それぞれの柱痕の規模(直径)は P 1 = 14cm、P 2 = 10cm、P 3 = 16cmである。柱穴間の距離は心々間で P 1 - P 2 が268cm、P 2 - P 3 が307cmである。P 4 は長軸36cm × 短軸32cmの梢円形で、深さ23cmである。柱痕は見られない。

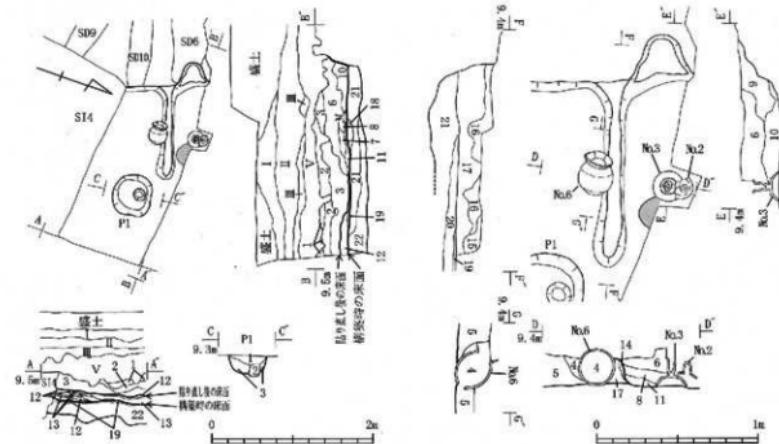
遺物は、調査区南壁の床面直上で石製模造品1点(No.2)が出土した。その他の床面遺棄遺物や、一括廃棄遺物は見られない。堆積土中からは土師器壊片15点、高壊片6点、甕片約70点、壺片約50点、瓶片1点のほか、土師器

細片が平箱1箱出土した。第15図1は堆積土上部で出土した手捏ね土器である。整形は内外面ともに指頭で押さえなでられる。底部には焼成前の穿孔があり、器厚は穿孔部分にむかいで薄くなる。

S1-3 積穴住居跡 調査区北東に位置し、北側および東側は調査区域外に延びている。また南側はS1-4 積穴住居跡によって削平され、検出したのはカマドを含む住居跡の一部である。このほか小溝状造構と重複し、本造構の方が古い。方位は西壁でN-26°-Wである。堆積土は1~11層で確認面から最大で35cmが残っている。壁は東壁が70°前後で立ち上がる。床面は、構築段階と貼り直し段階の2面が確認される。構築段階の床面は19層上面、貼り直し段階の床面は12層上面である。南北断面(A-A')付近では、床貼り直しの際、二種の構築土(12層と13層)を交互に丁寧に積んでいる。構築段階の床面は全体的に平らであるが、貼り直し後の床面は、カマド前面のみが10cmほど窪んでいる。

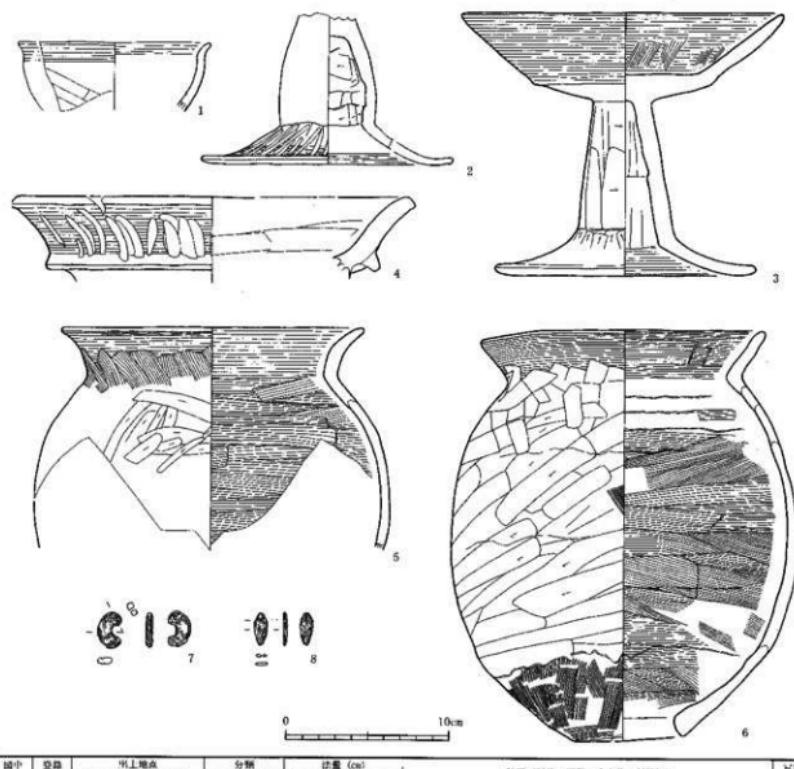
カマドは西壁に設けられ、主軸はN-70°-Wである。袖部は左袖を検出し、右袖は調査区域外である。構築土は褐色砂質シルト土で、天井部は崩落している(8~10層)が、左袖は西壁から112cm残存している。煙道部は燃焼部から西壁を段差として接続している。後世の小溝状造構には壊されているが、大きく外側に延びないものと思われる。支脚には土師器高坏2個体(No.2・3)を用いている。No.3は倒立させ、またNo.2は壊部を欠いた高坏脚部を正立させ、並置している。No.3は燃焼部底面直上に置かれているが、No.2はNo.3の壊部に乗っている。支脚の位置は西壁から60~70cm離れている。

カマド以外の施設として、柱穴1基(P1)を検出した。平面形は隅丸方形で、規模は長軸51cm×短軸48cm、深さ22cmで、底面には直径16cmの柱痕跡が残る。カマド付近のその他の遺物では、左袖外側に土師器瓶(No.6)が口



解説	上 色	土 性	考	裏位	土 色	土 性	考
S1-3-1 10YR5/0 灰褐色	砂質シルト			14 10YR4/0 黄褐色	砂質シルト	(=左袖部地)	
2 10YR3/2 黑褐色	砂質シルト	炭化物ブロックをや或多量に含む。		15 10YR4/0 黄褐色	シルト質 シルト質 シルト質	(=左袖)砂質シルト(10YR3/0)ブロックをや 或多量に含む。執土(ロック)を少量含む。 (=左袖) 燃灰し 混化灰灰。	
3 10YR4/0 にかい黄褐色	砂質シルト	炭化物ブロックを少量含む。		16 10YR4/0 にかい黄褐色	砂質シルト	(=左袖) 燃灰し 混化灰灰。	
4 10YR4/0 黑褐色	砂質砂			17 10YR4/0 黄褐色	砂質シルト	(=左袖) 燃灰し 混化灰灰。	
5 10YR4/0 にかい黄褐色	砂質シルト			18 10YR3/3 黄褐色	粘土質	(=煙道部・火床)	
6 10YR5/1 にかい黄褐色	砂質シルト	(=煙道部天井側壁) 埋土ブロックを下 方に多量に含む。埋化執土を少量含む。		19 10YR4/0 にかい黄褐色	砂質シルト	(=構築部の脇り壁)	
7 10YR6/0 黑褐色	砂質シルト	(=煙道部天井側壁) 埋土ブロックを多 量に含む。		20 10YR4/0 黄褐色	シルト質砂	(=煙道部地)	
8 10YR6/0 黑褐色	シルト質粘土	(=煙道部天井側壁) 埋土ブロックを多 量に含む。		21 10YR4/0 棕褐色	シルト質砂	(=煙道部天井側壁) 埋土ブロックを多量に含む。 (=煙道部天井側壁) 粘土(10YR6/0)ブロックを多量に含む。	
9 10YR4/0 灰褐色	砂質シルト			22 10YR4/0 棕褐色	粘土質	(=煙道部天井側壁) 粘土(10YR6/0)ブロックを多量に含む。	
10 10YR3/2 黑褐色	砂質シルト	埋土ブロックを上位に多量に含む。	P1-1 10YR3/0 黄褐色		砂質シルト	(=煙道部天井側壁) 砂質ブロックを少量含む。炭化 物ブロックをや或多量に含む。	
11 10YR3/2 正則褐色	シルト質粘土	埋土ブロックを多量に含む。	10YR4/0 にかい黄褐色		砂質シルト	(=煙道部天井側壁) 砂質ブロックを少量含む。炭化 物ブロックをや或多量に含む。	
12 10YR4/0 にかい黄褐色	砂質シルト	(=煙道部天井側壁より下部方塊土)	10YR4/2 黄褐色		砂質シルト	(=煙道部天井側壁) 砂質ブロックを上部に多量に含む。	
13 10YR4/0 黑褐色	砂質シルト	(=煙道部天井側壁より下部方塊土)					

第16図 SI-3 積穴住居跡平・断面図



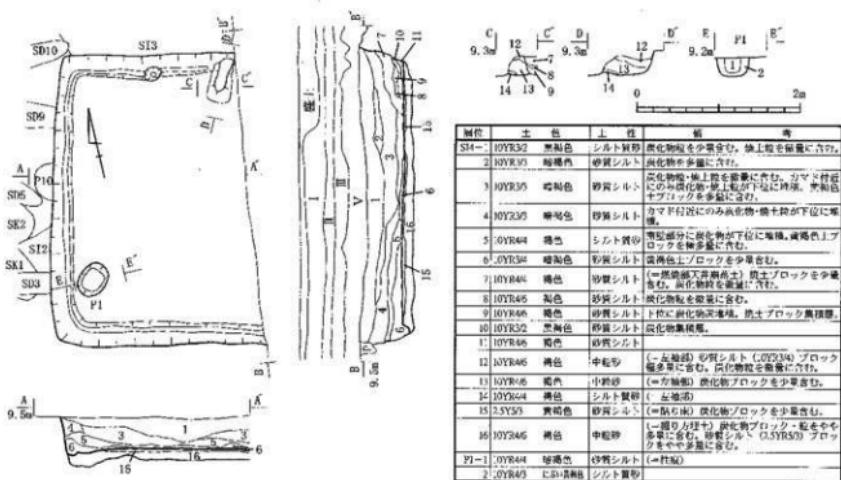
出土 番号	器種 番号	出上場所 通説名・位置	分類 形種	寸法(cm)			特徴(形状・構造・占有面・材質等)	写真 番号
				底径	口径	高さ		
1	C-34	SI-7	土師器 环	(4.7)	(0.13)	—	【調査】外縁: 口縁一リナデ、体一ケズリ、内縁: 11線ヨコナギ、腹一ヘラナゲ	10-1
2	C-0	SI-3 支脚	土師器 瓢杯	(9.3)	—	15.3	【調査】外縁: 腹 ヨコナギ一ガキ、内縁: ヘラナゲ一カクナゲ	10-2
3	C-9	SI-1 支脚	土師器 盆	16.2	19.5	15.8	【調査】外縁: ボーリング一ガキ、腰 ヤリヨモギテラ、内縁: ヨコナギ一カクナゲ	10-3
4	C-13	SI-9	土師器 瓢	(5.1)	(0.38)	—	【形状】右底口縁「吹き」外縁 ヨコナギ一ガキ、内縁: 口縁一ヨコナギ、腹一ヘラナゲ	10-4
5	C-12	SI-3	土師器 瓢	(3.7)	14.2	—	【形状】右底口縁「吹き」外縁 ヨコナギ一ガキ、内縁: 口縁一ヨコナギ、腹一ヘラナゲ	10-5
6	C-11	SI-9	土師器 瓢	26.3	7.4	6.5	【形状】外縁: U字一ヨコナギ一ヘラナゲ、腰一カクナゲ、内縁: 口縁一ヨコナギ、腹一ヘラナゲ	10-6
7	K-5	SI-3	石製模造品	高さ 2.2	幅 0.4	—	—	10-7
8	K-6	SI-1	石製模造品	高さ 1.95	幅 0.25	厚さ 0.08	—	10-8

第17図 SI3堅穴住居跡出土遺物

縁部を西壁側に傾け、左袖構築土にくいこむような形で出土した。

遺物は、カマド近辺で出土した遺物のほかは、堆積土巾から、土師器坏片約20点、須恵器坏片3点、瓦片約60点が出土した。図示した遺物は8点である。第17図2の脚裾部は横ナデ後放射状に磨かれる。4は有段口縁土師器皿で口縁部の調整は横ナデ後、指頭ほどの幅で縦方向に磨かれる。6の七脚器皿は粘土紐輪積み痕と接合痕が明瞭に残り、口縁部から底部までを、胴下部から底部、胴下部、胴上部、胴上部から口縁部の4単位に分けて接合している。7・8は石製模造品で、7が勾円、8が劍形でともに非常に小型である。堆積土上部で出土している。

S 1 4 堅穴住居跡 調査区中央東寄りに位置し、東側は調査区域外に延びている。S 1 2・3堅穴住居跡、小溝状遺構(S D3・9溝跡)、P 10と重複し、いずれの遺構よりも新しい。平面形は方形を基調としたもので、規模は南北355cm、



第18図 SI 4 穴住居跡平・断面図

確認面から床面までの深さは55cmである。西壁の方位はN-7°-Eで、壁は検出した三辺で85°前後と比較的の急角度で立ち上がる。床面はおおむね平坦で、中央部には貼り床が認められ、周辺部では掘り方埋土上面を床面としている。カマドは北壁に設けられ、調査区内で左袖のみ検出した。左袖は北壁から56cm、高さ24cm残存しており、褐色の中粒砂を用いて構築している。

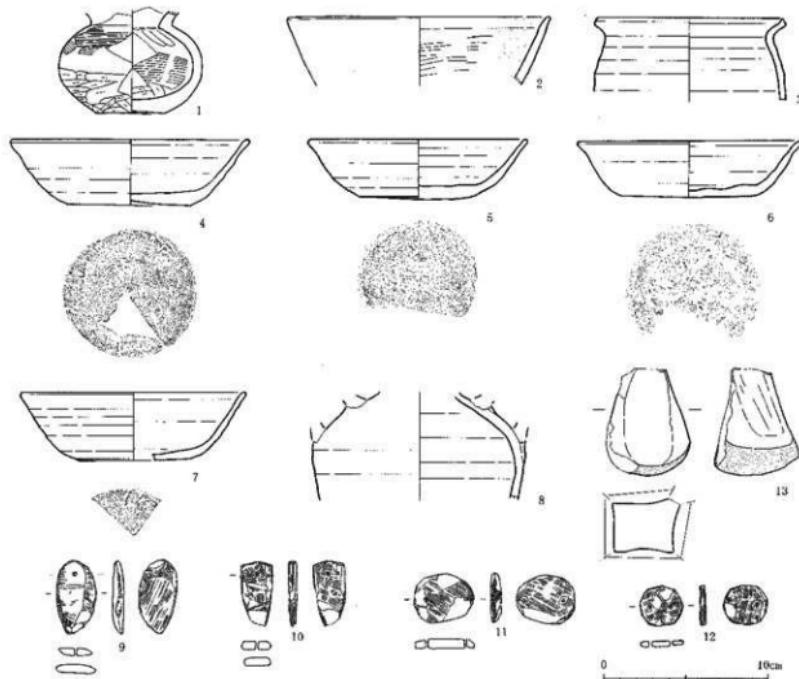
カマド以外の施設として、周溝、ピット1基(P1)を検出した。周溝は住居跡検出範囲で、カマド部分を除いて幅10~15cm、深さ8~12cmで巡っている。P1は住居跡南西の床面で検出した。平面形は南北方向にやや長い楕円形で、長軸44cm×短軸33cm、深さ23cmである。直径17cmの柱痕が確認される。

遺物は、堆積土上層(1・2層)で土師器片が平箱1箱、須恵器片10点、壺片5点、ロクロ土師器片が1点、石製模造品4点(鉢形2・有孔円盤2)、鐵製品1点、中層(3・4層)で須恵器片6点、壺片3点、土師器片平箱1箱、南壁際6層中より碗形洋が出土した。床面出土遺物はほとんどない。図示した遺物は13点である。第21図2はロクロ土師器環で、口縁部内面にはわずかに縫があり、ミガキ後黒色処理されている。3はロクロ上師器環で、頭部がくびれ口縁に向かって外反し、端部は受け口状になる。4~7は須恵器环でいずれも回転ヘラ切り無網格である。8は須恵器壺類であろうか。最大径が胴部中央にあり、肩部に把手がつく。胴上部で上向いた器壁は非常に薄くなっている。

## 2) 溝跡

S D 1 溝跡 調査区南側に位置し、東西は調査区域外に延びる。S I 1・2 穴住居跡、SD 2 溝跡と重複し、いずれの造構よりも新しい。調査区中央付近で方位をやや変え、西側の方位はN-66°-W、東側はN-82°-Wである。断面形は台形で、底面は凹凸が著しい。規模は検出長766cm、溝幅40~60cm、深さ12~17cmである。遺物は上師器小片が少量、中世陶器壺の破片1点が出土した。

S D 11 溝跡 調査区南側に位置し、東側および南側は調査区域外に延びる。S I 2 穴住居跡、SD 1 溝跡、P 2 と重複し、SD 1 溝跡、P 2 よりも古くS I 2 穴住居跡、SD 2 溝跡よりも新しい。堆積土は单層でV層が入り



番号	形質 番号	川土地点 番号	分類	大きさ (cm)	特徴 (次に調査・含有物・破損等)			等級 回数
					種別	器種	日式 英式	
1	C-16	SI-4	土器部	直径: 4.2 高さ: 6.2	〔調査〕外側: ログナード・内側: ログナード・底: ユニゾン・頭下: ハラダ			10-9
2	D 2	SI-4	2層	直径: 4.2 高さ: 5.9	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ログナード			10-10
3	D-1	SI-4	3層	直径: 2.2 高さ: 2.2	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ログナード			10-11
4	E 3	SI-4	2層	直径: 4.1 高さ: 14.3	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			10-12
5	E-6	SI-4	2層	直径: 4.2 高さ: 13.6	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			10-13
6	J-2	SI-4	3層	直径: 3.7 高さ: 12.0	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-1
7	E 4	SI-4	2層	直径: 4.2 高さ: 12.8	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-2
8	H-3	SI-4	1層	直径: 6.2 高さ: 12.8	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-3
9	X 2	SI-4	6層	直径: 12.45 高さ: 2.28 厚: 0.97 1.18	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-5
10	X-10	SI-4	5層	直径: 4.0 高さ: 1.95 厚: 0.5 1.18	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-6
11	K-B	SI-4	石器部	有孔石器 径: 2.9 厚: 3.54 高: 2.5	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-8
12	K-9	SI-1	石器部	有孔石器 径: 2.5 厚: 3.5 高: 2.5	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-7
13	K-14	SI-4	4層	石器部 破石 長: 5.5 幅: 6.6 厚: 1.1 重: 294g	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-4
K 2	SI-4	1層	石器部	鉄器 重: 260g	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-19
N-1	SI-4	1層	軽型瓦	長: 7.7 幅: 0.7 高: 1.78	〔調査〕外側: ログナード (破損) 内側: ハラダ			11-20

第19図 SI4豊穴住居跡出土遺物

込む。方位はN-57°-Eで、検出長は520cm、溝幅は100~106cmである。断面形は、中央部が馬の背状に高く両側が低く掘り込まれる形状で、確認面からの深さは中央部で8cm、両側で20cmである。

### 3) 土坑

SK 1土坑 調査区中央に位置する。SI 2豊穴住居跡、SD 3・4溝跡、SK 2土坑と重複し、SD 3・4溝跡よりも古く、SI 2豊穴住居跡、SK 2土坑よりも新しい。平面形は横円形で、規模は長軸93cm×短軸44cm、確認

面からの深さ32cmである。底面の平坦部はほとんどない。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形はすり鉢状である。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

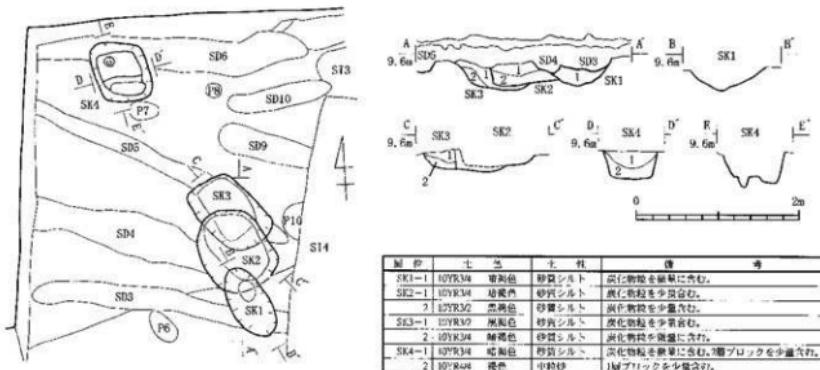
S K 2 土坑 調査区中央北寄りに位置する。S I 2 穴穴住居跡、SD 4・5溝跡、SK 1・3土坑と重複し、SD 4・5溝跡、SK 1十坑よりも古く、S I 2 穴穴住居跡、SK 3 土坑よりも新しい。平面形は梢円形で、規模は長軸106cm×短軸83cm、確認面からの深さ18cmである。底面はおむね平坦で、壁の立ち上がりは急である。堆積土は2層で、遺物は南小泉式の高环脚部片2点を含む土師器片約60点である。

S K 3 土坑 調査区中央北寄りに位置する。SD 5溝跡、SK 2 土坑と重複し、いずれの遺構よりも古い。平面形は長方形で、規模は長軸100cm×短軸66cm、確認面からの深さ36cmである。底面は南側がやや低く、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層で、遺物は土師器片15点である。

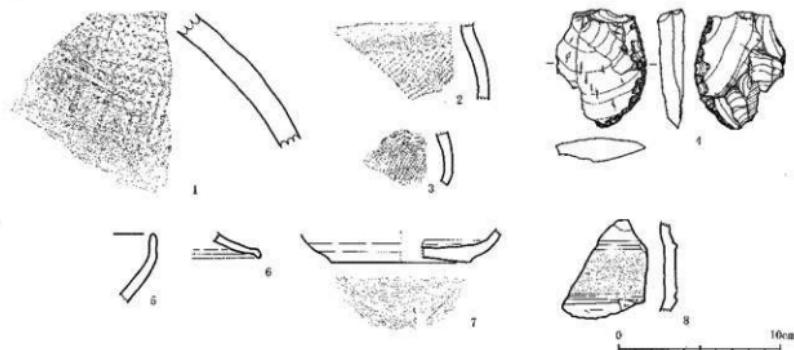
S K 4 土坑 調査区北側に位置する。SD 6溝跡と重複し同溝跡に切られている。平面形は方形で、規模は長軸74cm×短軸65cm、底面は南側が深く確認面からの深さ40cm、北側は34cmである。底面北寄りで直径12cm、深さ10cmのピットを確認した。柱根跡の可能性がある。堆積土は2層で、1層から流紋岩製のスクレイバーが出土した。弥生土器片2点も出土しているが、土師器片数点を作うことから、スクレイバーや弥生土器片は混入であろう。

#### 4) 小溝状遺構群

調査区西半のVI層上面で東西方向に延びる溝跡を9条検出した。他遺構との新旧関係はS I 1～3 穴穴住居跡、SK 1～4十坑よりも新しく、S I 4 穴穴住居跡よりも古い。小溝どうしの重複はない。断面形は台形で、底面は凹凸が著しい。堆積土はいずれも单層で、基本層V層によく似た暗褐色土砂質シルト土である。それぞれの方位および規模(検出長×溝幅×深さ)は以下のとおりである。SD 2溝跡=N-81°W、450×22～30×12cm、SD 3溝跡=N-81°W、310×22～30×14cm、SD 4溝跡=N-74°W、270×32～54×12cm、SD 5溝跡=N-63°W、345×18～25×6cm、SD 6溝跡=N-84°W、325×30～50×16cm、SD 7溝跡=N-80°W、190×30～35×19cm、SD 8溝跡=N-86°W、170×20～28×15cm、SD 9溝跡=N-72°W、110×25～35×14cm、SD 10溝跡=N-80°E、124×25～28×17cmである。遺物はSD 7溝跡で土師器小片5点、SD 8溝跡で土師器小片3点、SD 9溝跡で土師器表片2点が出土したが、図示し得る資料はない。



第20図 土坑平・断面図



目次 番号	実物 番号	出土地点		分類	寸法 (cm)			特徴 (形状・調査・き有物・材質等)	参考 図版
		遺跡名・位置	件数		幅	高さ	厚さ		
1	I-1	SD1	1	石器	直線	-	-	【調査】外縁: タタキ 底面: コビナデ 内面: ユビナデ	11-8
2	S-1-1	SK4	1	石器	直線	-	-	【調査】口縁部	11-10
3	S-2-2	SK4	1	石器	直線	-	-	【文様】直線文	11-11
4	S-15	SK4	1	石器	直線	5.4	0.2	【調査】口縁部	11-12
5	C-2-2	井	1	土器器蓋	直線	5.0	0.2	【調査】外縁: 【調査】外縁: 口縁一部にナゲ、全体にケズリ 内面: ナゲ	11-13
6	E-9	井	1	土器器蓋	直線	-	-	【調査】外縁: ロクロナゲ	11-14
7	H-5	井	1	土器器蓋	直線	-	-	【調査】外縁: ロクロナゲ 底面: 回転糸切り 内面: ロクロナゲ	11-15
8	E-10	井	1	土器器蓋	直線	5.2	0.2	【調査】外縁: ロクロナゲークリズリ 底面: ロクロナゲ 【文様】3条の波状紋理内に直線による波状文	11-16
P-1			1	土器器蓋	直線	-	-	【調査】内面: リダ	11-17

第21図 溝跡・土坑・遺構外出土遺物

## 5) ピット

調査区全域で10基検出した。いずれも柱痕跡は確認できず掘立柱建物跡を構成するものはない。P 1とP 9は重複し、P 1の方が新しい。ともにS I 1堅穴住居跡よりも新しく、P 9はSD 7溝跡よりも古い。P 2はSD 11溝跡よりも新しい。P 3～6はS I 2堅穴住居跡よりも新しい。P 10はS I 1堅穴住居跡よりも古い。またこのほか、P 4・5は、SD 8溝跡の一部である可能性もある。

## 6) 遺構外出土遺物

第21図5～8に示した。5は口縁部が直立するタイプのいわゆる関東系土師器である。6は須恵器蓋で口縁端部に返りを持っている。7は須恵器杯で、底部は回転糸切りである。8はコップ型土器であろうか。上位の凸線と下位の沈線区画内に柳齒状工具による波状文が描かれる。沈線以下は手持ちヘラケズリである。

## 6まとめ

- ①検出遺構は堅穴住居跡4軒、土坑4基、溝跡2条、小溝状遺構9条、ピット10基である。
- ②S I 1・3堅穴住居跡は、遺構に伴う上器が出土しており、時期は古墳時代中期南小泉式期である。また、S I 2堅穴住居跡は、住居跡に伴う遺物は石製模造品のみであるが、重複関係よりS I 1堅穴住居跡以前である。時期は同じく古墳時代中期南小泉式期であろう。
- ③S I 4堅穴住居跡は、堆積土層より底部回転ヘラ切りの須恵器杯、ロクロ上師器杯、壺が出土している。土器群の特徴から、住居跡の時期は平安時代前半頃と思われる。
- ④今調査地点の遺構群の変遷は【古墳時代中期】S I 2堅穴住居跡→S I 1・3堅穴住居跡【古墳時代中期以降、古代まで】SK 1～4土坑・小溝状遺構群⇒【古代】S I 4堅穴住居跡⇒【中世以降】SD 1溝跡となる。



1 拡張前検出状況（南から）



2 完掘状況全景（南から）



3 拡張部検出状況（北から）



4 完掘状況全景（北から）



5 拡張部検出状況（南から）



6 完掘状況全景（南から）



7 SI 1 竪穴住居跡完掘状況（西から）



8 SI 1 竪穴住居跡南北断面（西壁）

図版2 遺構検出・完掘状況、SI 1 竪穴住居跡



1 カマド・貯蔵穴（西から）



2 カマド断面（東から）



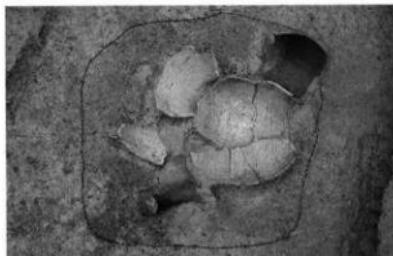
3 支脚(土器器壊片)出土状況（西から）



4 支脚断ち割り状況（北東から）



5 カマド断ち割り状況（北西から）



6 貯蔵穴遺物出土状況（西から）



7 掘り方（西から）



8 石製模造品(No.10)出土状況（西から）

図版3 SI1堅穴住居跡



1 完掘状況（南から）



2 東西断面（A-A'）



3 南北断面（下層調査地点）



4 P1断面（西から）



5 P1完掘状況（西から）

図版4 SI2竪穴住居跡



1 P2 断面（西から）



2 P2 完掘状況（西から）



3 P3 断面（西から）



4 P3 完掘状況（西から）



5 完掘状況（東から）



6 カマド（東から）

図版5 SI2・3 穴住居跡



1 東西断面 (B-B')



2 南北断面 (A-A')



3 カマド遺物出土状況 (南から)



4 支脚 (No. 2・3) 出土状況 (南東から)



5 カマド主軸断面 (E-E')



6 カマド横断面 (D-D')



7 カマド袖切開 (F-F')



8 P1断面 (C-C')

図版 6 SI3竪穴住居跡



1 完掘状況（南から）



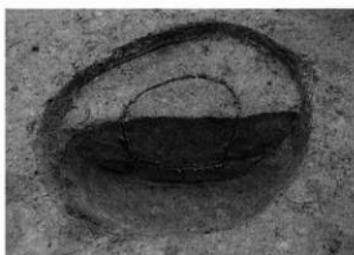
2 南北断面（B-B'）



3 東西断面（A-A'）



4 カマド完掘状況（南から）

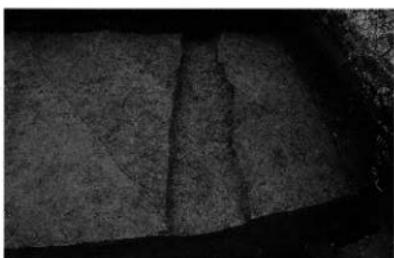


5 P1断面（北から）

図版7 SI4竪穴住居跡



1 溝跡完掘状況（南から）



2 SD 1 溝跡完掘状況（西から）



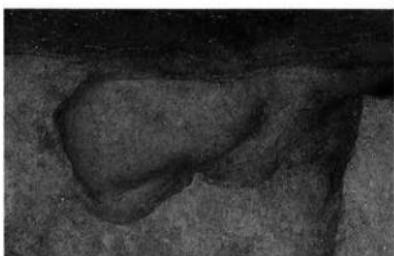
3 小溝状遺構群検出状況（北から）



4 SD 1 溝跡完掘状況（西から）



5 SD 6・9・10溝跡完掘状況（西から）



6 SK 3 土坑完掘状況（西から）

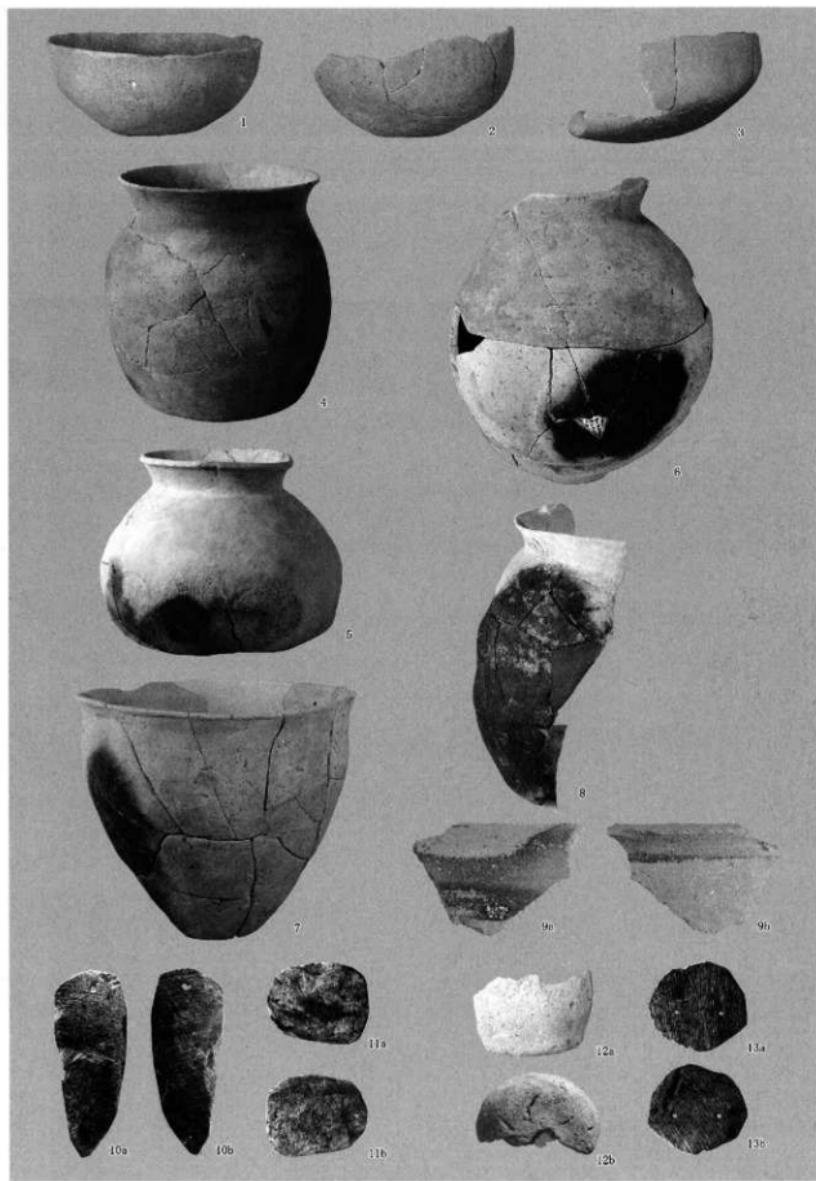


7 SK 4 土坑完掘状況（南から）

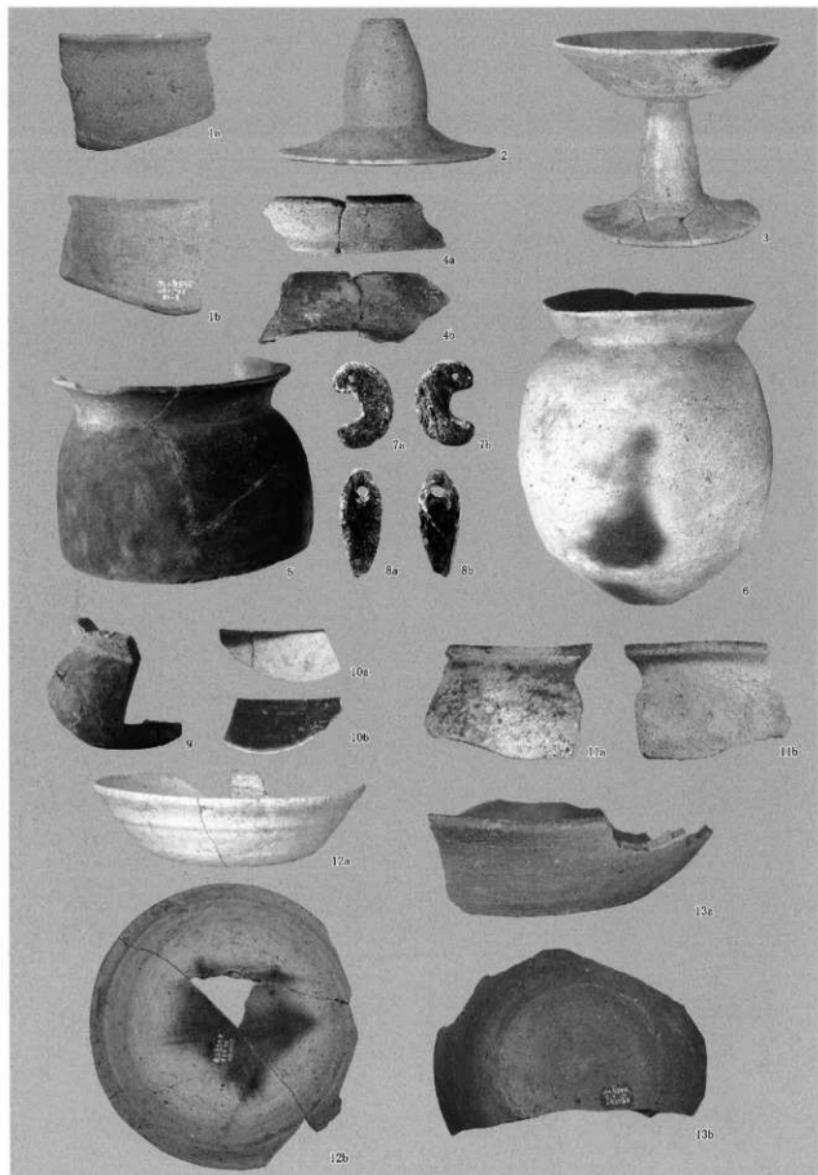


8 SK 4 土坑遺物出土状況（北西から）

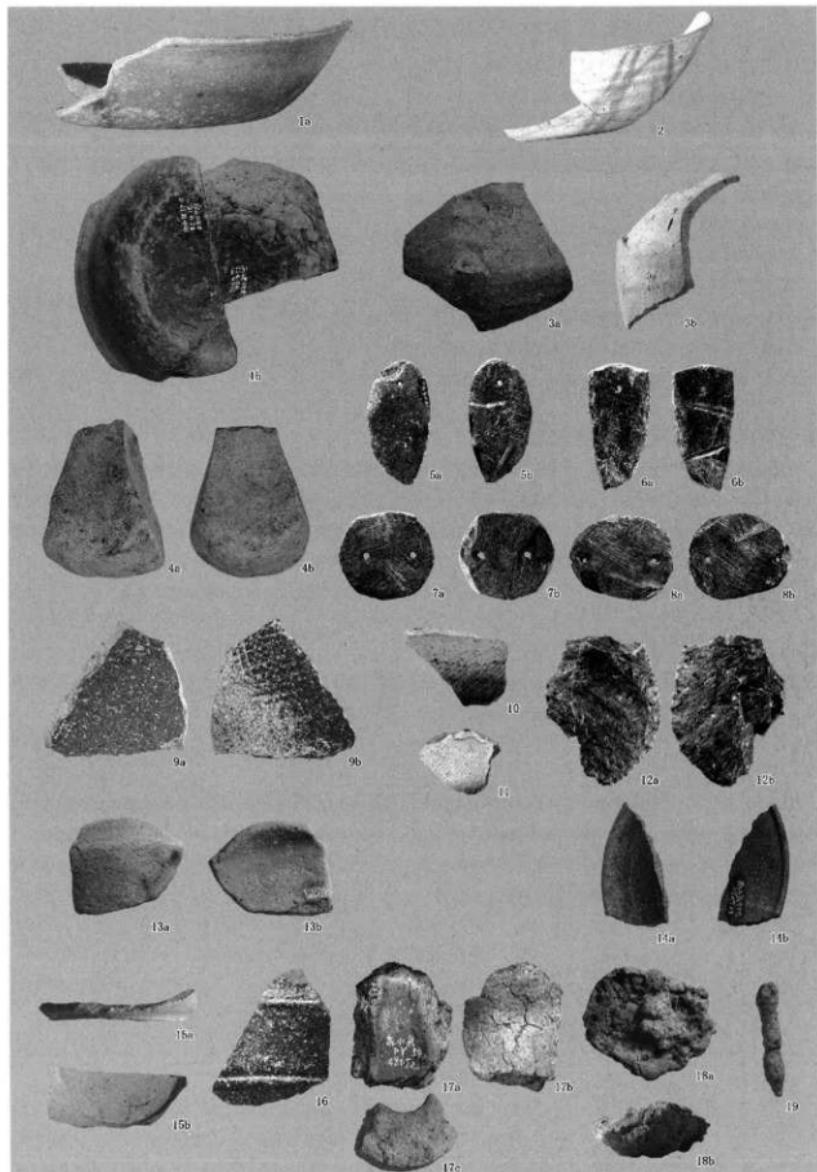
図版 8 溝跡、小溝状遺構、土坑



図版9 SI 1・2竪穴住居跡出土遺物



图版10 Si 3 · 4 壁穴住居跡出土遺物



図版11 SI 4 積穴住居跡・溝跡・土坑・遺構出土遺物

## IV 南小泉第60次発掘調査報告書

### 1 調査要項

遺跡名 南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）  
調査地点 仙台市若林区遠見塚2丁目292-2  
調査期間 平成20年9月24日～9月26日  
調査対象面積 48.02m<sup>2</sup>  
調査面積 約12m<sup>2</sup>  
調査原因 個人住宅建設工事  
調査主体 仙台市教育委員会  
調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係  
担当職員 主事 加藤 隆則 文化財教諭 佐藤 正弥

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年9月10日付で、地権者より木造平屋建て個人住宅の建築工事に係る発掘届（H20教文184-170）が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成20年9月24日～9月26日に実施した。建物建築予定地に東西5m×南北2.5mの調査区を設定して確認調査を行なったところ、Ⅲ層上面で遺構を検出したため引き続き本調査を実施した。遺構を掘削、記録後、南西隅の搅乱部分で下層の堆積状況を確認したところ遺物が発見されたため、調査区全面の下層調査を実施した。

### 3 遺跡の位置と環境

遺跡の位置と環境については「II 南小泉第58次発掘調査報告書」を参照されたい。今回の調査地点は遺跡範囲の北東側に位置し、遠見塚古墳の北方150mの地点である。

### 4 基本層序

基本層は盛土下に5層を確認した。I・II層が砂質シルトでⅢ層にぶい黄褐色シルト質砂が遺構確認面である。Ⅲ層以下の調査区全域にSX1性格不明遺構の堆積土（1～13層）があり、その下層にIV・V層がある。IV層は鉄分を多量に含む黄褐色粘土層で、SX1性格不明遺構およびSD3溝跡が掘り込まれている。V層は灰黄褐色粗粒砂層で、調査区西壁中央を一部深掘りして確認した。

### 5 発見遺構と出土遺物



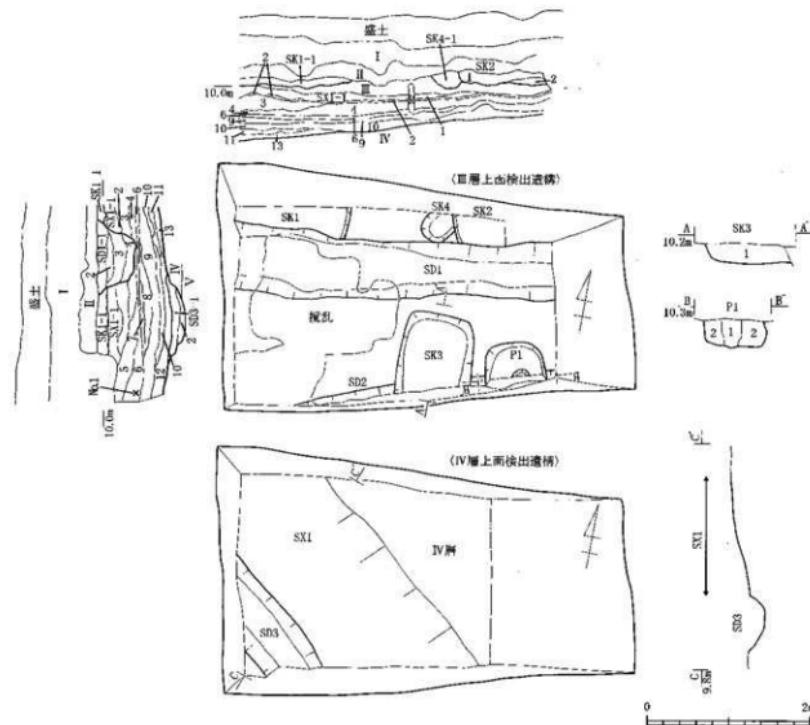
第22図 調査区配置図

Ⅲ層上面で溝跡2条、土坑4基、ピット1基を検出し、IV層上面で溝跡1条、性格不明遺構を検出した。

#### ①Ⅲ層上面検出遺構

##### 1) 溝跡

SD3溝跡 調査区北側に位置し、東西は調査区外に延びる。SK1・2・4土坑と重複し、いずれの遺構よりも新しい。規模は検出長で390cm、幅60～100cm、深さ40～50cmで、方位はN-83°-Wである。断面形は台形で、



基番	土色	土性	層名	基番	土色	土性	層名
I	10YR3/4 墓地色	砂質シルト	現代堆積物を含む膠質土。	SK1-1	10YR4/2 に似る黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を含む多量に含む。
B	10YR3/4 墓地色	砂質シルト	近縁地帯、下部軟弱。	2	10YR4/6 黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を少量化。
III	10YR4/4 に似る黄褐色	シルト質砂	(→遺構検出層) 酸化鉄を多量に含み、下部が灰化。	3	10YR4/4 に似る黄褐色	砂質シルト	10YR4/4 に似る黄褐色を多量に含む。
IV	10YR5/6 底地色	粘土	(一般地、SK1の遺構検出層) 西側に傾斜。	4	10YR4/4 黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を少量化。
V	10YR5/2 底地色	粘土	酸化鉄を多量に含む。	5	10YR4/1 黄褐色	シルト質砂	酸化鉄、鐵をやや多量に含む。
地盤	土色	上層	下層	6	10YR4/2 黄褐色	シルト質砂	うるう泥炭。
SD1	10YR7/6 に似る黄褐色	シルト質砂		7	10YR4/3 細粒砂	無上部シルト	酸化鉄をやや多量に含む。無上部も同様。
2	10YR4/4 砂地色	砂質シルト		8	10YR4/3 黄褐色	毛土シルト	酸化鉄をやや多量。灰化物を少量化。
3	10YR3/4 砂地色	砂質シルト		9	10YR4/4 黄褐色	細粒砂	酸化鉄を少量化。灰化物を多量に含む。
4	10YR5/4 に似る黄褐色	シルト質砂		10	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量。灰化物を多量に含む。
SD2-1	10YR4/5 に似る黄褐色	シルト質砂		11	10YR3/6 黄褐色	毛土シルト	酸化鉄を少量化。
SK1-1	10YR4/4 墓地色	砂質シルト	10YR4/4シルト質砂/ロックを多量に含む。	12	10YR3/2 黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を少量化。
SK2-1	10YR3/6 墓地色	砂質シルト	酸化鉄ブロックを少量。中間部を多量に含む。	13	10YR4/2 細粒砂	シルト質砂	酸化鉄を多量に含む。
SK3-1	10YR3/7 墓地色	粘土シルト	1層に10YR4/4黄色土を多量に含む。	SD3-1	10YR3/4 墓地色	モ質シルト	酸化鉄をやや多量。酸化物/ロックを多量に含む。
P1-1	10YR3/3 沖縄色	砂質シルト	(一柱底)	2	10YR4/2 砂地色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。IV層を多量に含む。
2	10YR4/3 に似る黄褐色	砂質シルト					

第23図 遺構平・断面図

底面レベルは西側が深く東側が浅い。堆積上は4層確認した。遺物は、古墳時代前期の台付壺脚部を含む十師器片数点のほか、江戸時代後期の土瓶の小片1点が出土した。

S D 2 溝跡 調査区南側に位置し、東西および南側は調査区域外に延びる。北側立ち上がりのみの検出のため、掘り込み面や溝幅、深さ等は不明である。SK3上坑、P1と重複した遺構よりも古い。方位はS-84°Wで、出土遺物はなく時期は不明である。

## 2) 土坑

S K 1 土坑 調査区北西端に位置し、北側および西側は調査区外に延びている。S D 1 溝跡よりも古く、南側は同溝跡や擾乱に接されており、平面形および規模は不明である。擾乱の影響で平面範囲は捉えられなかったが、十層断面より南北は180cm以上、東西は140cm以上の規模になると思われる。底面はおおむね平坦で、確認面からの深さは15cmである。堆積土は単層の暗褐色砂質シルトである。遺物は上師器小片が十数点出土しているが、時期は不明である。

S K 2 土坑 調査区北東端に位置し、北側および東側は調査区外に延びている。S D 1 溝跡、S K 4 土坑と重複し、南側は同溝跡に切られ、西側はS K 4 土坑を切っている。堆積土は単層の褐色砂質シルトである。検出部の規模は長軸60cm×短軸40cm、確認面からの深さ5~15cmである。遺物は上師器小片が出土している。

S K 3 土坑 調査区南壁際中央に位置し、南側は擾乱に接されている。S D 2 溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は長方形と考えられ、検出部の規模は長軸100cm×短軸90cm、深さ30cmである。底面はおおむね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は上師器小片が少量出土したほか、鉄滓が微量出土している。

S K 4 土坑 調査区北壁際東寄りに位置する。S D 1 溝跡、S K 2 土坑と重複し、いずれの遺構よりも古い。平面形は隅丸方形と考えられる。検出部の規模は長軸40cm×短軸30cm、確認面からの深さ20cmである。遺物は南小泉式期の土師器高脚脚部片を含む土師器片10点である。

## 3) ピット

P 1 調査区南東に位置し、南側は一部擾乱に接され調査区外に延びている。S D 2 溝跡と重複し、同溝跡より新しい。平面形は隅丸方形と考えられる。底面はおおむね平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。検出部の規模は長軸75cm×短軸50cm、深さ35cmである。堆積土は1層が柱痕である。遺物は上師器小片が2点出土したが、図示しなかった。

### ②IV層上面検出遺構

#### 1) 溝跡

S D 3 溝跡 調査区南西侧に位置し、南北は調査区外に延びる。規模は検出長で170cm、溝幅は上端部で80~90cm、底面で35~40cm、深さは15~20cmである。掘り込み面はIV層上面で、断面形は台形、堆積土は2層確認した。遺物は、堆積土中より弥生土器片5点のほか、ハケメ調整のある上師器片が20点出土した。このうち図示したのは弥生土器3点（第24図4・8・11）である。

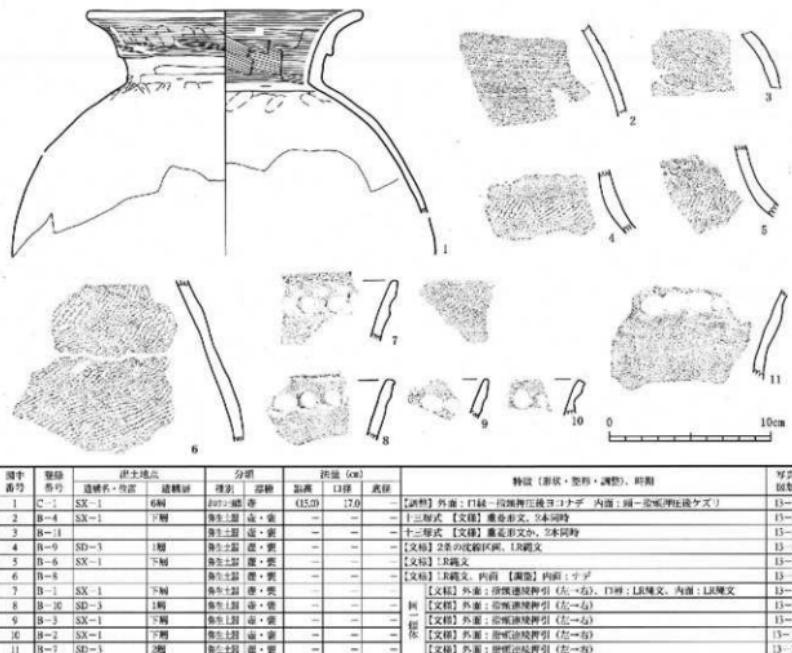
#### 2) 性格不明遺構

S X 1 性格不明遺構 IV層上面がS D 3 溝跡に向かって傾斜し、ここに堆積した層の分布方向が同溝跡に一致している。Ⅲ層からIV層の間に堆積した13層をS X 1性格不明遺構の堆積土と捉えた。堆積土は上部がシルト質砂、下部が粘土質シルトを基調とし、間に細粒砂を挟んでいる。

出土遺物は土師器片約90点、弥生土器片約20点が出土した。堆積層上部（1~6層）では古墳時代前~中期の土師器片が約60点出土したほか、調査区西壁際の6層で有段口縁土師器壺（第24図No.1）、7層で土師器壺・泰底部片2点が出土した。堆積層下部では、8・9層で弥生土器片2点のほか、12層で弥生土器片1点、10~13層で中期後半十三塙式~後期前半天王山式期の破片約10点が出土するが、各層で古墳時代の土師器片が混入している。このうち、図示したのは土師器壺1点、弥生土器5点の計6点である。

### ③出土遺物

第24図に示した遺物は11点である。1は有段口縁土師器壺で胴部上半までの破片である。2~11はS D 3 溝跡および



第24図 出土遺物

S X 1 性格不明造構で出土した弥生土器片で、2・3は中期後半十三塚式期の壺・甕、7～11は口縁部付近に連続押引文を施す天王山式の甕で、同一個体と思われる。7は口縁端部および内面にLR繩文が施される。

## 6まとめ

調査の結果、Ⅲ層上面で溝跡2条、土坑4基、柱痕跡のあるピット1基、IV層上面で溝跡1条、性格不明造構を検出した。S X 1 性格不明造構は、上層（1～6層）で古墳時代前期から中期の土師器片が出土し、中層で古墳時代前期の土師器片が出土する。また下層では土師器片を伴いながら弥生土器片が出土する。一方、SD 3 溝跡でも、古墳時代前期の土師器片を微量伴いながら弥生土器の破片がやまとまって出土しており、S X 1 性格不明造構からSD 3 溝跡の出土物は連続している。同一個体と思われる弥生土器片が両造構から出土していることも、この連続の一證を示すものと思われる。調査区が狭く断定は避けねばならないが、SD 3 溝跡とS X 1 性格不明造構は、以上の出土物の連続に加え、堆積層の連続や走行方向の一致から本来一連の造構である可能性がある。造構の時期は、下層で古墳時代前期の土師器片を伴い、上層では古墳時代中期までの土器しか含まないことから、古墳時代前期頃まで遡り、中期頃までに堆積していったと考えられる。またⅢ層上面検出造構は古墳時代中期以降のものであろう。



1 亂層上面遺構完掘状況（東から）



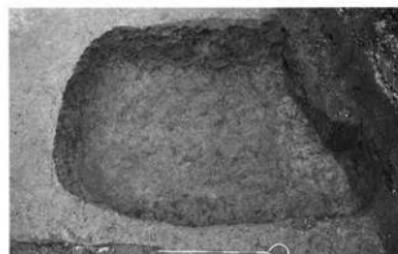
2 SD1溝跡完掘状況（東から）



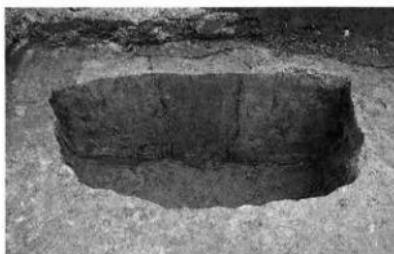
3 SK1 土坑完掘状況（南から）



4 SK2・4 土坑完掘状況（南から）

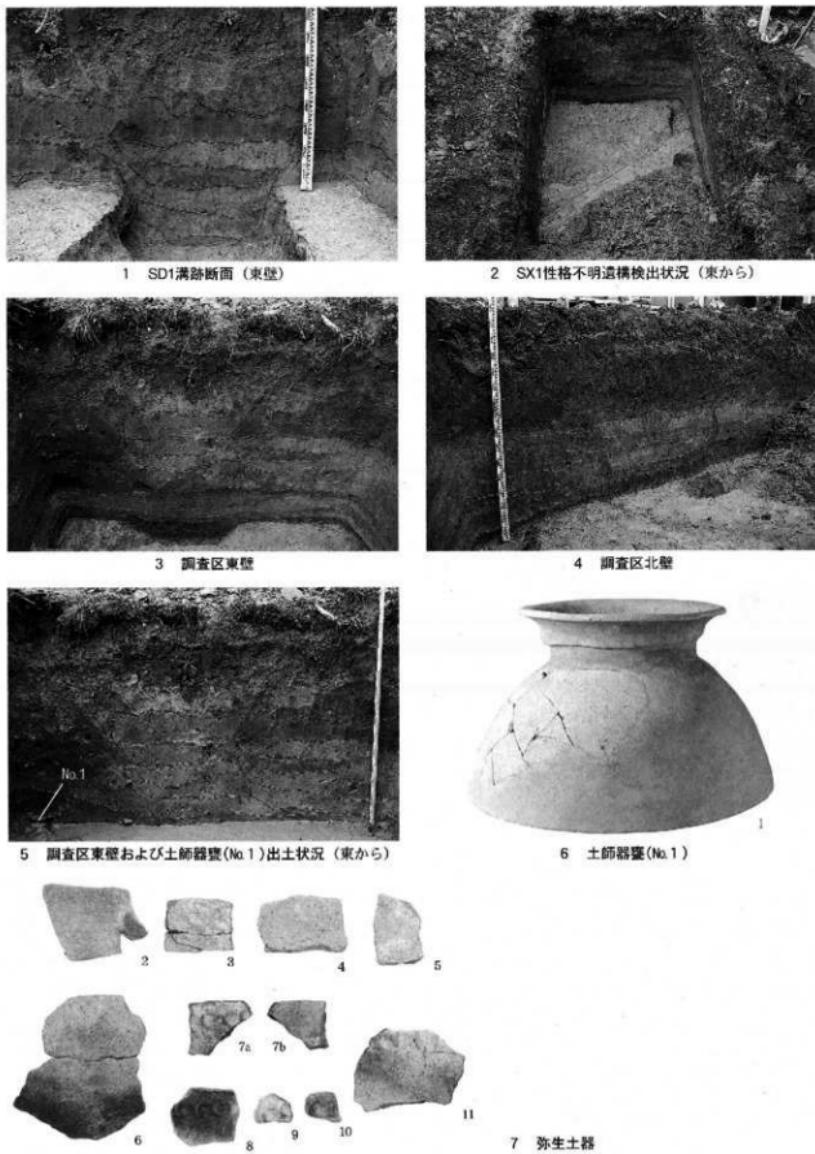


5 SK3 土坑完掘状況（西から）



6 P1断面（北から）

図版12 溝跡、土坑、ピット



図版13 遺構・調査区断面、出土遺物

## V 鴻ノ巣遺跡第11次調査報告書

### 1 調査要項

遺 跡 名	鴻ノ巣遺跡（宮城県遺跡番号01034）
調 査 地 点	仙台市宮城野区岩切字三所北124-5
調 査 期 間	平成20年5月19日～5月23日
調査対象面積	72m <sup>2</sup>
調 査 面 積	15m <sup>2</sup>
調 査 原 因	個人住宅建設
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主事 鈴木 隆 文化財教諭 熊谷 敏哉

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年4月11日付けで地権者より提出された発掘届（II20教生文第184-11号）に基づき実施した。確認調査は平成20年5月19日に着手した。

調査区は東西5m×南北3mに設定した。重機により盛土・I a層・I b層を掘削した。II層上面で人力により遺構検出作業を実施した。隨時写真記録を行い、平面図・断面図を作成し、調査を終了した。

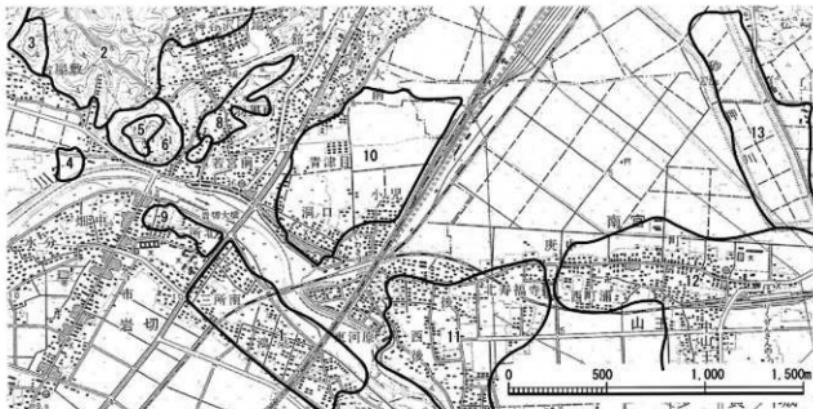
### 3 遺跡の位置と環境

泉ヶ岳を源流とし、西から東へ丘陵地帯を開析して流れる七北田川は、土砂の堆積と氾濫を繰り返しながら、両岸に自然堤防を形成した。鴻ノ巣遺跡は市の中心部の北東約7km、この七北田川右岸の自然堤防上に位置する。今回の調査地点における標高は約8.2mである。

遺跡周辺の歴史的環境を見ると、本遺跡の対岸の自然堤防上に古墳時代中期の新田遺跡（多賀城市）がある。ここでは埴輪片も採集されており、付近に高塚古墳があった可能性が強い。さらに西側の丘陵地帯には燕沢善光寺などの横穴古墳群が見られる。

古代に入ると、東北地方にも律令体制がしきれ、陸奥国の国府である多賀城が本遺跡の東約3kmの丘陵上におかれたため、周辺の自然堤防や北西の丘陵地帯には、燕沢跡をはじめ、奈良・平安時代の遺跡が多数存在する。

中世の遺跡では、北西の丘陵に国指定史跡である岩切城がある。これは源頼朝によって、多賀城（陸奥国）留守職に補任された伊沢（留守）家景の構えた館で、代々留守氏の拠点となっていた。麓に留守氏の菩提寺である東光寺があり、その境内には中世の磨崖仏や板碑が多数残されている。また、留守文書には鎌倉時代の後半、領内に冠屋市場、河原宿五日市場、在宅などの記載が見られるが、当時七北田川は冠川と呼ばれていたことから、鎌倉時代には七北田川流域では集落が発達しており、すでに商業活動が営まれていたものと思われる。市の所在地は明確ではないが、付近の洞ノ口遺跡などでは溝で区画された大規模な屋敷跡が見つかっており、中世における繁栄の様子が明らかになりつつある。



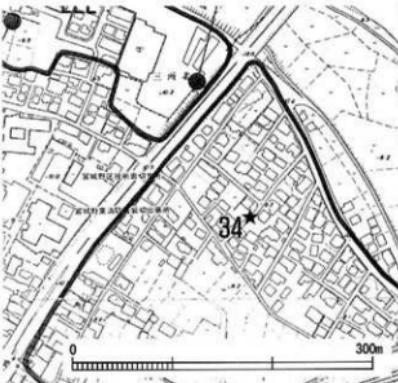
番号	種 源 名	種 別	立 地	時 代	番号	道 緯 名	種 別	立 地	時 代
1	酒 / 黒道蔵	黒落、蟹葉、水田	自然現生	野生、古墳、奈良、平安、中世	8	田園道路	穀糧、宗教遺跡	丘陵	中世、近世
2	岩 / 城塁	垣根	砂質	中世	9	今宮鹿路	先祖、包含地	自然灌漑	平安、中世
3	台原駿馬六郎群	櫻花	丘陵斜面	古墳	10	四ノ口道路	集落、道路、里弄、水田	自然灌漑	古墳、奈良、平安、中世、近世
4	沂州府道	麻布地	自然現生	平安	11	山田鹿路	集落	自然受壓	古墳、古代、中世
5	東光寺守御器	板垣等	丘陵斜面	中世	12	山上鹿路	集落	自然灌漑	野生、古墳、古代
6	東光寺守道	垣根、石積石、寺 院、堆積、廻廊	丘陵斜面	中世	13	吉田橋道路	雪齒圓錐軌	自然保護地	開文～中世
7	新井前頭	垣根	丘陵斜面	開文、弘治、平安、中世、江戸					

第25図 遺跡の位置と周辺の遺跡

これまでの本跡調査結果として、古墳時代の溝跡や竪穴住居跡、周溝墓や水田跡が検出されている。古墳時代後期から奈良時代にかけては、遺物は出土しているが遺構は検出されていない。平安時代は、竪穴住居の可能性のある遺構や溝跡、土坑などが検出されているものの、集落の実態はよく分かっていない。中世になると掘立柱建物跡や井戸跡・溝跡などが広範囲で検出され、各遺構は有機的に関係して屋敷ないし集落を形成していることが分かってきている。

4 基本層序

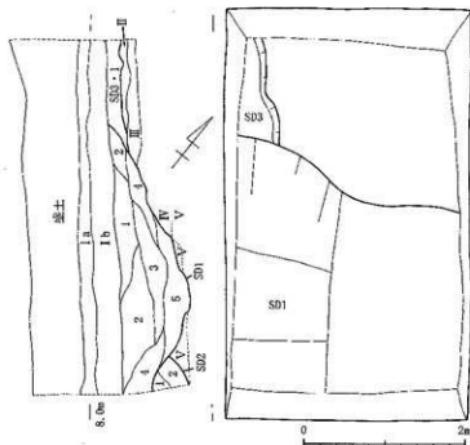
調査地点は60~90cm 程の厚さで盛土がなされ、基本層は 6 層に分かれる。



第26図 調査地点の位置



第27図 調査区配置図



## 5 発見遺構と出土遺物

II層上面で溝跡2条(SD1・3)、掘り込み面不明の溝跡1条(SD2)を検出した。

### 1) 溝跡

SD1溝跡 調査区南部で検出した。南西から北東方向に延びる溝跡である。規模は、上端幅300cm以上、深さ85cm以上である。堆積土5層中より非ロクロ土師器片7点、瓦片1点、常滑産中世陶器片2点(第29図2・3)が出土した。

SD3溝跡 調査区西端で部分的に検出した。SD1溝跡に切られる。SD1溝跡に直交する形で延びるものと推定されるが、全体の規模は不明である。

SD2溝跡 SD1溝跡に切られており、断面でのみ確認したため、掘り込み面は不明である。その規模は不明である。

## 6まとめ

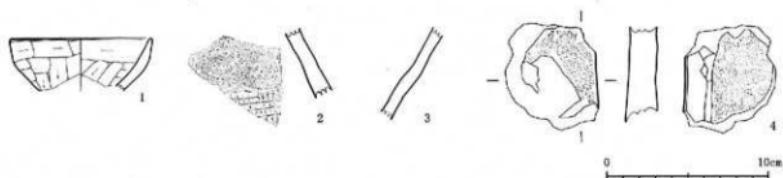
II層上面で溝跡2条、SD1溝跡に切られ、掘り込み面不明の溝跡1条を検出した。遺物は、SD1溝跡の堆積土5層中より非ロクロ土師器片7点、瓦片1点、中世陶器片2点が出土した。中世陶器のうち1点(第29図3)は12~13世紀のものと考えられる事から、溝跡の年代は、概ね12~13世紀頃、若しくはそれ以降と考えられる。

基木番	土色	土性	備考
I a	2.5YR4/5 黄灰褐色	砂質シルト	
I b	10YR3/5 暗褐色	砂質シルト	
II	10YR4/4 黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。
III	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	十勝原生土をやや多量に含む。
IV	10YR5/4 にがり・黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。
V	10YR4/4 黑褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む。
層 分	土 色	土 性	備 考
SD1-1	10YR3/5 砂褐色	砂質シルト	Ⅱ層土をブロック状に多量に含む。
2	10YR3/5 單褐色	砂質シルト	Ⅱ層土を塊状に少量含む。
3	10YR4/2 沈黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土をブロック状に多量に含む。
4	10YR4/2 沈黒褐色	砂質シルト	酸化鉄をやや多量に含む。
5	10YR4/1 單褐色	シルト質粘土	
SD2-1	10YR4/2 沈黒褐色	砂質シルト	Ⅱ層土をブロック状に多量に含む。
2	10YR4/1 黑褐色	シルト質粘土	
SD3-1	10YR3/2 黄褐色	粘土質シルト	Ⅱ層土を板状に少量含む。

第28図 遺構平・断面図

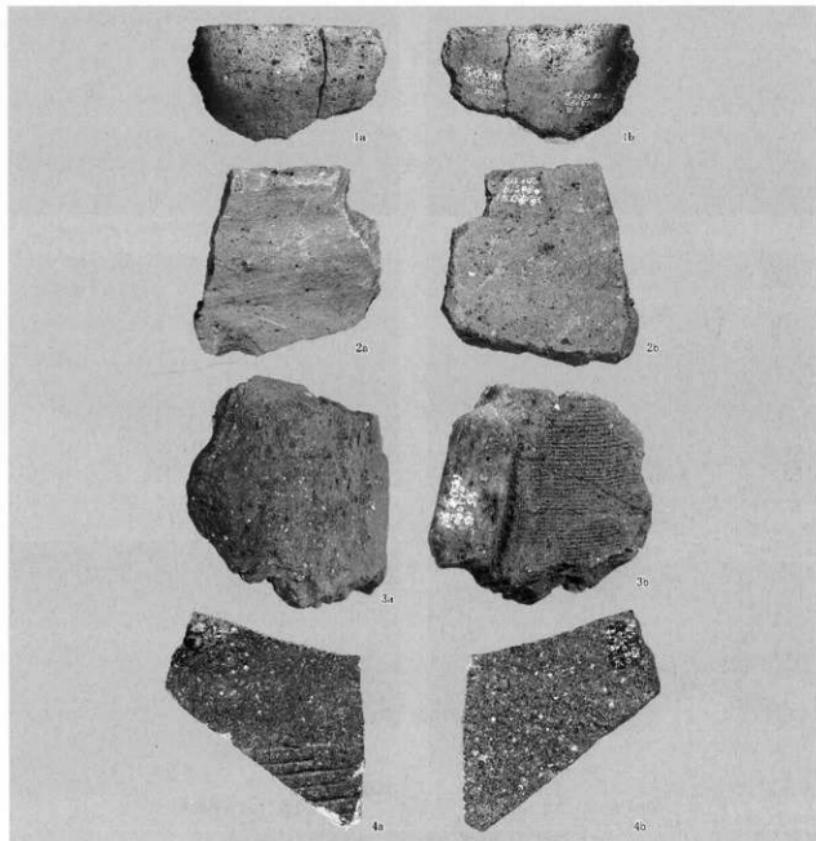
### (参考文献)

- 結城慎一・渡辺雄二 1989「仙台市岩切 鴻ノ巣遺跡」仙台市文化財調査報告書第123集  
工藤哲司 2004「鴻ノ巣遺跡 第7次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第280集



図印 番号	器種 番号	出土地點	遺物名	分類	法號 (cm・g)	特徴・備考 (底面・縁部・文様・特殊・その他)	写真 回数	
1	C-1	茎木層	遺物名	土器部	底面・外 (3.3) 8.8	外面ヘルカヌリ	14-1	
2	I-1	SDI	5層	陶器	底面	合羽 中出張型 利郷口 (持子底)	14-4	
3	I-2	SDI	5層	陶器	縁部	電鋸サ 中出張型 12~13cm	14-2	
4	I-3	SDI	5層	瓦	九瓦	-	外面 開閉口 内面 寸目	14-3

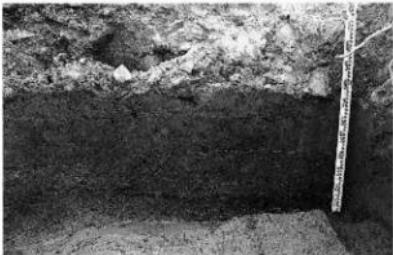
第29図 出土遺物



図版14 出土遺物



1 調査区全景（北西から）



2 基本層（北東から）



3 遺構検出状況（北西から）



4 SD 1溝跡検出状況（南西から）



5 SD 1溝跡掘削状況（北東から）



6 SD 1溝跡断面状況（北東から）



7 SD 1溝跡断面状況（北から）



8 SD 1・2溝跡断面状況（北から）

図版15 調査区全景・SD 1溝跡検出・断面

## VI 今泉遺跡第7次発掘調査報告書

### 1 調査要項

遺跡名	今泉遺跡（宮城県遺跡番号01235）
調査地点	仙台市若林区今泉二丁目85-10
調査期間	平成20年6月2日、6月4日
調査対象面積	70m <sup>2</sup>
調査面積	15m <sup>2</sup>
調査原因	個人住宅建設工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	土事 鈴木 隆

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年5月1日付けで地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教牛文第184-35号）に基づき実施した。確認調査は平成20年6月2日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。建築範囲に東西5m×南北3mの調査区を設定し、重機により盛土・I・II層を削除した。II層を除去した時点で人力により遺構検出作業を実施したが、明確な基盤層が確認できなかっただため、引き続き重機により、現地表面下1.5mまで削除を行った。その後、調査区は全てSD1溝跡の範囲内に収まることが確認された。堆積土が統一され、遺構の底面は未確認であったが、安全を考慮しそれ以上の掘削は行わず調査を終了した。

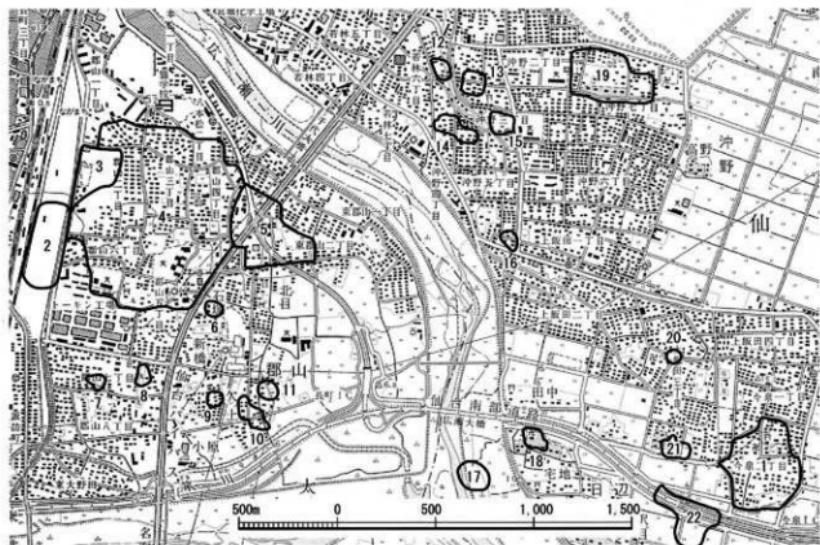
### 3 遺跡の位置と環境

本遺跡は、JR仙台駅の南東約6.5kmに位置し、標高2～3mの自然堤防に立地している。文献等から、須田玄蕃が居た中世城館として古くから知られていたが、昭和54年（第1次調査）、昭和56年（第2次調査）、平成5年（第3次調査）、平成6年（第4次調査）の調査で、繩文時代後期から近世にかけての複合遺跡である事が明らかになった（篠原ほか1980、佐藤1983、渡部1994、渡部1995）。

中世今泉城としての城館の全体構造は不明確であるが、第1・2次調査で南辺外堀の一部が確認され、その内部からは、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などの遺構が多数検出された。屋敷は12世紀代に成立し、南北朝時代に城館として改変・整備され、17世紀前半頃まで使用されていたものと推定されている（佐藤1983）。

### 4 基本層序

基本層はI、II層のみ確認した。II層より下の層は全てSD1溝跡の堆積土と判断した。よってSD1溝跡は、基本層II層上面から掘り込まれたものと考えられる。しかし、今回の調査範囲でIII層は検出していない。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	今戸遺跡	集落、城郭、呉古代地	自然堤防	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	12	砂押I遺跡	散在地	自然堤防	古墳、奈良、平安
2	長町家来道跡	道路	自然堤防	弥生、古墳、奈良朝	13	神種遺跡	官領開墾	自然堤防	奈良、平安
3	西台洋渡跡	盆地地、裏桝墓	自然堤防	縄文、弥生、古墳	14	砂押II遺跡	散在地	自然堤防	古墳、奈良、平安
4	郡山遺跡	宮殿、寺院、伝呉古道	自然堤防	縄文後-飛鳥、弥生中、古墳末、奈良初	15	中種田遺跡	散在地	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安
5	北日輪城	城壁、瓦窯、水田	自然堤防	縄文後、弥生、古墳、奈良、中世、近世	16	同尻越遺跡	散在地	自然堤防	古墳、奈良、平安
6	失矣遺跡	西南堆	自然堤防	古墳、奈良、平安	17	白辺遺跡	散在地	河川敷	古墳
7	の邊遺跡	改布堆	自然堤防	奈良、平安	18	日辺遺跡	城郭	自然堤防	中世
8	鏡ノ浦遺跡	西面堆	自然堤防	古墳、奈良、平安	19	印野城跡	城郭	自然堤防	中世
9	久ノ上I遺跡	水田	堆積地	古墳、奈良、平安、中世	20	上・下細波跡	散在地	自然堤防	古墳、奈良、平安
10	久ノ上II遺跡	散在地	自然堤防	古墳、奈良、平安	21	高田III遺跡	散在地	自然堤防、後奈良	奈良、平安
11	久ノ上III遺跡	散在地	自然堤防	古墳、奈良、平安	22	高田IV遺跡	散在地	自然堤防、後奈良	縄文、弥生、古墳、平安、中世、古墳

第30図 遺跡の位置と周辺の遺跡

## 5 発見遺構と出土遺物

### 1) 溝跡

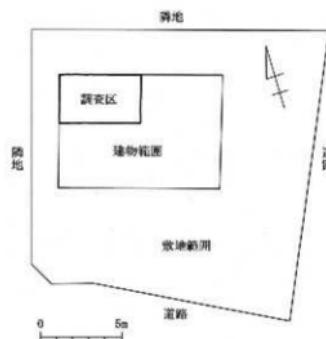
S D 1 溝跡 堆積土の傾斜から、溝跡は南北方向に延びるものと推定される。規模は、上幅5m以上、深さ70cm以上である。堆積土は15層確認した。遺物は、堆積土中より17世紀代を中心とする陶磁器が出土した。

### 2) 出土遺物

遺物は、陶磁器17点が出土した。この内II層出土が6点で、他11点はS D 1 溝跡の堆積土1~13層から出土した。以下、S D 1 溝跡出土陶磁器について概要を述べる。磁器は4点全てが17世紀中~後半の肥前産染付皿である。陶器は、第3図1の大堀相馬産皿を除いて全てが17世紀代のものである。美濃産、唐津産の皿が1点ずつあり、他3点は全て岸産の擂鉢である。全体の傾向を指摘するには資料点数が少ないが、特に18世紀以降一般的に多く組成される碗が全く見られない点に特徴がある。



第31図 調査地点の位置



第32図 調査区配置図

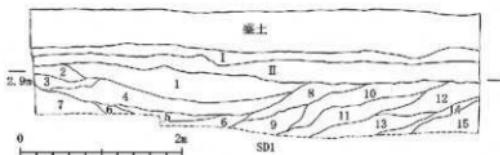
## 6まとめ

今回の調査地点は、昭和54年に実施された第1次調査の西約10mに位置する。南北方向に延びる溝跡(SD1)を1条検出した。SD1溝跡の上幅は5mを超える。その規模から推定すると、第1次調査の2・16号溝跡、第2次調査の11・21・29号溝跡との関連性が考えられる。これらの溝跡は、第2次調査における時期区分ではII・III期に属し13世紀後半から15世紀後半頃まで存続したものと推定されている。SD1溝跡は、堆積土上部～中部より17世紀代の陶磁器が10点まとまって出土しており、17世紀後半にはある程度埋没していたものと推定される。

今回の調査では安全上の理由により溝跡の底面を確認出来なかつたため、SD1溝跡の成立年代は不明であるが、その規模からII・III期頃に成立した可能性が高いと考えられる。遺跡全体で、II・III期に成立した大規模な溝跡が近世に入り一様に埋没したのか、地点によって埋没時期に差があるのか、といった具体的な遺構の変遷やその背景については、今後の課題としたい。

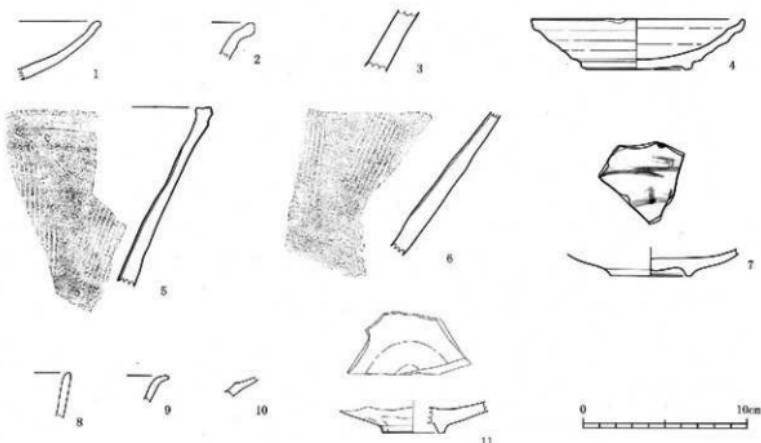
### ＜参考文献＞

- 篠原信彦ほか 1980『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第24集
- 佐藤洋 1983『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第58集
- 渡部弘美 1994『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第185集
- 渡部弘美 1995『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第201集



記号	土色	土種	調査	
			上	下
I	10YR3/2	褐色	粘質シルト	現代耕作土。
II	10Y3/2	褐色	シルト質粘土	耕作土。近代耕作土を含む。
層位	上	角	土種	
S2-1	10Y3/2	褐色	粘質シルト	地質シルト
2	10Y3/2	褐灰色	シルト質粘土	地質シルト
3	10Y3/2	黑褐色	粘質シルト	炭化物を少許含む。
4	10YR4/2	灰褐色	シルト質粘土	
5	10YR4/2	黑褐色	シルト質粘土	
6	10YR4/2	灰褐色	シルト質粘土	
7	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	熱分を少量含む。
8	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	
9	10YR4/2	黑褐色	粘質シルト	自然木を多量に含む。
10	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	砂質シルト (10Y3/4) を含む。塊状を少許含む。
11	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	砂質シルト (10Y3/4) を含む。塊状を少許含む。
12	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	砂質シルト (10Y3/4) を含む。塊状を少許含む。
13	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	熱分を多量に含む。
14	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	炭化物をやや多量に含む。
15	10YR4/2	灰褐色	シルト質粘土	熱分を少許含む。

第33図 北壁断面図



探査番号	露頭番号	出土地点		分類	法線 (cm・cm)	付帯・備考 (生植・転落・文様・切削・その他)	参考図版	
		基本編	遺構名					
1	I-1	SD1	1号	陶器	直	-	大輪折沿 白釉鉢 燐松 朱絞	17-1
2	I-2	SD1	1号	陶器	直	-	廣口鉢 刷毛目火入	17-2
3	I-3	SD1	1号	陶器	圓形	-	-	17-3
4	I-5	SD1	11号	陶器	直	3.2 (2.8)	6.0 黄酒 開物 口火入 菊花紋	17-6
5	I-6	SD1	1号	陶器	直	-	-	17-5
6	I-5	SD1	5号	陶器	直	-	厚底 17-	17-1
7	J-4	SD1	1号	陶器	(1.3)	-	(5.0) 鋼前 塵付 出水文 口火入	17-12
8	J-1	目標		陶器	直	-	-	17-7
9	J-2	SD1	9号	陶器	直	-	-	17-8
10	J-3	SD1	9号	陶器	直	-	-	17-9
11	J-5	SD1	9号	陶器	直	(1.4)	(3.6) 鋼前 見込み窓 日輪模様 (火入)	17-14

第34図 出土遺物



1 SD1溝跡検出状況（西から）



2 調査終了状況（南西から）



3 北壁断面状況（南から）

図版16 検出遺構



图版17 出土遗物

## VII 沖野城跡第3次調査報告書

### 1 調査要項

遺跡名 沖野城跡（宮城県遺跡番号01234）  
 調査地点 仙台市若林区沖野七丁目40-70  
 調査期間 平成20年8月4日～7日  
 調査面積 66.58m<sup>2</sup>  
 調査面積 20m<sup>2</sup>  
 調査原因 個人住宅建設  
 調査主体 仙台市教育委員会  
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係  
 担当職員 主事 鈴木 隆 主事 森田 義史 文化財教諭 佐藤 正弥

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年6月25日付けで地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教生文第184-100号）に基づき実施した。確認調査は平成20年8月4日に着手し、遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。調査区は東西5m×南北4mに設定した。重機により盛土・I・II層を掘削した。III層上面で人力により遺



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	沖野城跡	城跡	自然地帯	中世	9	墓塚古墳	円墳	自然地帯	古墳
2	南小泉遺跡	生落、塹敷	自然地帯	奈良、古墳、奈良、平安、中世、近世	10	砂押・塗壁	敷布地	自然地帯	古墳、奈良、平安
3	瀧見塙古墳	方墳	自然地帯	古墳	11	砂押・埴輪	敷布地	自然地帯	古墳、奈良、平安
4	若林城跡	門構、塹壕、城郭	自然地帯	六朝、平安、中世、近世	12	神靈道跡	官街兩側	自然地帯	奈良、平安
5	葛野城跡	窓扉、塹壕、後方施設	自然地帯	奈良、古墳、奈良、平安	13	半袖西遊足	敷布地	自然地帯	律令、古墳、奈良、平安
6	春日院城跡	塙跡	自然地帯	古代、中世、近世	14	宮台式道路	未確認	波状溝地	奈良、平安
7	伏田城跡	円墳	自然地帯	古墳	15	中在家道跡	台地	自然地帯	平安
8	荒塙古墳	円墳	自然地帯	古墳	16	中在家曲輪跡	集落、高地	自然地帯、後背地	佐世、古墳、平安、中世、近世

第35図 遺跡の位置と周辺の遺跡

構検出作業を実施した。随時写真記録を行い、平面図・断面図を作成した。東壁際で一部深堀りを行った、調査を終了した。

### 3 遺跡の位置と環境

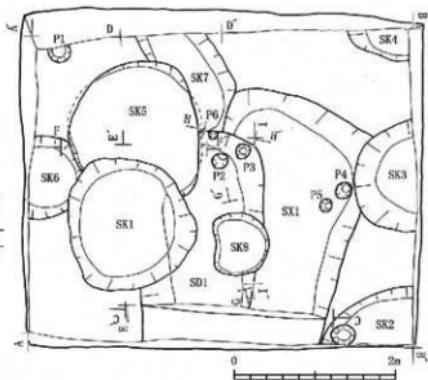
沖野城跡は、JR仙台駅の南東約4.5kmに位置する。西方約3kmを流れる名取川の支流広瀬川の後背湿地に立地する。周辺には縄文時代以降の遺跡が分布しており、南小泉遺跡、養種園遺跡、若林城跡では中近世の遺構・遺物も検出されている。明治時代の地籍図や昭和になってからの『六郷村沖野館屋敷割図』などから復元された地割で主郭を中心としてその周りを曲輪と堀・土塁が取り囲む平城であったことが推測されている。『仙台城古城書上』等によると栗野氏の居城で100間四方の規模をもっていたとされている。



第36図 調査地点の位置図



第37図 調査区配置図



第38図 遺構配図

本遺跡は、これまで個人住宅建設や宅地造成に伴って小規模な調査が行われてきた。昭和60年度の第1次調査、平成4年度の第2次調査では、城館の北西部分にあたる館西地区で二重の堀跡が検出されている。調査された区画自体が一つの曲輪で、少なくとも北と東側に二重の堀があったと推定される。

### 4 基本層序

約1mの盛土直下で、I～V層の基本層を確認した。いずれも粘質シルトまたは粘土の軟質土である。また、V層にはラミナ状の堆積がみられ、水性堆積層と考えられる。

## 5 発見遺構と出土遺物

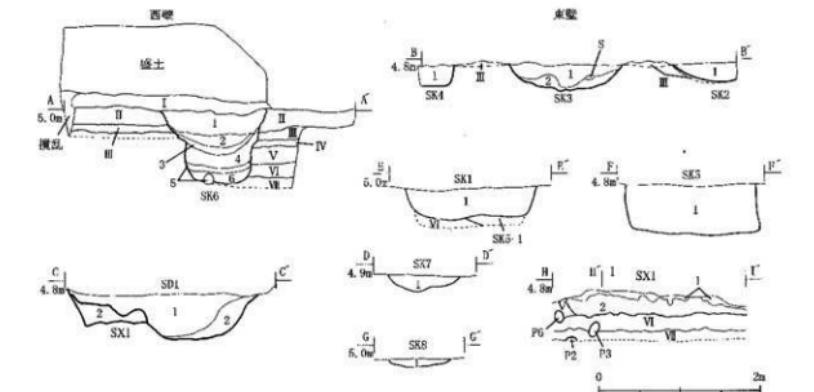
Ⅲ層上面で、溝跡1条、土坑8基、性格不明遺構1基、ピット1基を検出した。

### 1) 漢跡

S D 1溝跡 調査区中央で立ち上がるが、南側へ延びている事から、南北方向に延びる溝跡と判断した。規模は、上幅140~150cm、深さ60cmである。断面形は楕円形を呈する。堆積土は2層に分かれ、黒色の粘土を主体とする。完掘後、約15~20cmのピットを3基検出した(P 2, 3, 6)。遺物は出土していない。

## 2) 土坑

SK 1土坑 調査区西側で検出した。SD1溝跡、SK 5・6土坑と重複し、本造構が最も新しい。確認面はⅢ層上面であるが、本造構に切られるSK 6上坑の掘り込み面が、西壁の觀察によりⅡ層上面であることから、本造構についてもⅡ層上面から掘り込まれたものと考えられる。平面形は円形である。規模は東西160cm、南北161cm、深さ36cmである。断面形は楕形を呈する。堆積土は1層である。遺物は、17世紀後半の肥前産染付皿（第40図10）、18世



品番	土 色		性 格	備 考	
	上	下			
I	107R20	黒褐色	耐酸シルト	炭化物や多量に含む。	
II	107R20	黒色	耐酸シルト	炭化物や多量に含む。上層土を約1~3cmのブロック状に少量含む。	
III	107R20	にごい黒褐色	耐酸シルト	繊維状。	
IV	107R20	褐灰色	耐酸シルト	砂分を含む。	
V	2.5YR2/4	にごい黒褐色	粘土	粘土上。	粘土上に(10YR2/3)との互層。
VI	10YR2/3	黒色	粘土		
VII	2.5YR2/4	黄褐色	粘土		
第 位	土 色	土 性		備 考	
SJL-1	10YR2/3	黒色	粘土		
2	10YR2/3	黒色	粘土	柱層土を約1~3cmのブロック状に含む。	
SJK-1	10YR2/3	黒色	シルト質粘土	Ⅲ・V層十色を約1~3cmのブロック状に多量に含む。	
SJK-2	10YR2/3	黒色	耐酸シルト	Ⅲ層上を約2~5cmのブロック状に少量含む。	
SJK-3	10YR2/3	黒色	耐酸シルト	Ⅲ層上を約1~3cmの状状に少量含む。	
2	10YR2/3	黒色	耐酸シルト	Ⅲ層土をまだら状に多量に含む。	
SJK-4	10YR2/3	黒色	耐酸シルト	Ⅲ層土を約2~3cmのコロッキ状に少量含む。	
SJK-5	10YR2/3	黒色	シルト質粘土	Ⅲ・IV・V層土を約2~3cmのブロック状に多量に含む。	
SJK-6	10YR2/3	黒色	耐酸シルト		
2	10YR2/3	黒色	粘土	Ⅲ層土を約2~5cmの状状に微量含む。	
3	10YR2/3	黒色	粘土	炭化物を多量に含む。	
4	10YR2/3	黒色	粘土	植物碎屑体を多量に含む。	
5	10YR2/3	褐灰色	シルト質粉		
6	10YR2/3	黒色		Ⅳ層土を約2~3cmの状状に微量含む。	
SJK-7	10YR2/3	黒色	シルト質粘土	Ⅲ層土を約2~3cmの状状に微量含む。	
SJK-8	10YR2/3	黒色	シルト質粘土	Ⅲ層土を約2~5cmのブロック状に多量に含む。	
SJK-9	10YR2/3	黒色	粘土	Ⅳ層土を約2~3cmのブロック状に多量に含む。	
2	10YR2/3	褐灰色	粘土	Ⅴ層土を約2~3cmの状状に微量に含む。	

第39図 西壁・東壁・遺構断面図

紀の大堀相馬産碗が堆積土中から出土した。

S K 2 土坑 調査区南東角部で部分的に検出した。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は不明である。規模は東西115cm以上、南北75cm以上、深さ25cmである。西寄りに径30cm、深さ12cmのピット状の掘り込みが認められた。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

S K 3 土坑 調査区東端で部分的に検出した。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は不明である。規模は東西76cm以上、南北130cm以上、深さ32cmである。堆積土は2層である。遺物は瓦質土器が1点出土した(第40図3)。

S K 4 土坑 調査区北東角部で部分的に検出した。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は不明である。規模は東西74cm以上、南北40cm以上、深さ25cmである。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

S K 5 土坑 調査区西側で検出した。SK 1・6・7 土坑、SD 1 溝跡と重複する。SK 1 土坑より古く、SK 6・7 土坑、SD 1 溝跡より新しい。確認面はⅢ層上面だが、SK 1 土坑と同様に SK 6 土坑との切り合い関係から、掘り込み面はⅡ層上面と考えられる。平面形は円形である。規模は東西161cm、南北172cm、深さ32cmである。堆積土は1層である。遺物は4点の陶器が出土した。18世紀後半の肥前産染付碗、18世紀の大堀相馬産碗、16世紀の瀬戸灰釉皿(第40図4)が堆積土中から出土した。

S K 6 土坑 調査区西端で部分的に検出した。SK 1・5 土坑と重複する。本遺構が最も古い。掘り込み面はⅢ層上面である。平面形は円形と推定される。規模は東西60cm以上、南北113cm、深さ85cmである。堆積土は6層である。遺物は、堆積土1層中から18世紀の大堀相馬産皿が出土した(第40図5)。

S K 7 土坑 調査区北側で部分的に検出した。SK 5 土坑、SD 1 溝跡、S X 1 性格不明遺構と重複する。本遺構が最



第40図 出土遺物

図中 番号	遺物 番号	出土地点		分類		位置 (cm・g)		特徴・復原 (原形・物語・文様・時代・その他)	写真 番号
		底本圖	遺物名	遺跡層	種別	形態	動向・長・口径・幅・底径・高		
1	I-1	I層		陶器	片	—	—	小堀相馬? 瓦質 18c	19-1
2	I-2	I層		陶器	片	—	—	片? 新和 17c後	19-2
3	I-6	SK3	I層	瓦質土器	片?	—	—	近世 黒引?	19-6
4	I-6	SK5	I層	陶器	片	—	—	瀬戸灰釉 底無 16c後	19-3
5	I-5	SK6	I層	陶器	片	2.5 (6.0)	3.8 大堀相馬? 瓦質 口刷無 留込み能文款 18c	19-4	
6	II-2	I層		陶器	片	4.7 (6.0)	3.4 肥前 桜村 瓦花文 留込み五井能文款 18c後	19-8	
7	II-3	I層		陶器	片	—	—	肥前 桜村 くらわんか手文 18c	19-9
8	II-4	I層		陶器	片	—	—	印田 齋光 16c後	19-10
9	II-1	I層		陶器	片	(1.8)	7.3 肥前 齋光 桜村 文文 英文 18c前	19-7	
10	II-5	SK1	I層	陶器	片	(1.0)	4.0 肥前 桜村 章文 留込み斜口口刷無 17c後	19-11	

も古い。掘り込み面はⅢ層上面である。北側へ延びており、溝跡の可能性も考えられるが、底面が皿状に窪んでいることから土坑と判断した。平面形は長楕円形と推定される。規模は東西約75cm、南北140cm以上、深さ20cmである。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

S K 8 土坑 調査区中央で検出した。検出面はⅢ層上面である。平面形は円形である。規模は東西65cm、南北77cm、深さ10cmである。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

### 3) 性格不明遺構

S X 1 性格不明遺構 調査区中央で部分的に検出した。S K 1・3・7・8 土坑、S D 1 溝跡と重複する。S K 7 土坑を除き本遺構が古い。南側へ延びており溝跡となる可能性もあるが、後述の堆積土の状況から、性格不明遺構とした。検出面はⅢ層上面である。平面形は隅丸の長方形になるものと推定される。規模は東西約200cm、南北300cm以上、深さ約30cmである。完掘後、底面から径15~20cmのビットを2基検出した(P 4・5)。これらのビットがS X 1 性格不明遺構に伴うか否かは不明である。堆積土は2層である。1・2層共、下面には凹凸が認められ、下層上の巻き上げが顕著である。耕作土である可能性も考えられるが、詳細は不明である。遺物は出土していない。

### 4) 出土遺物

遺物は全て陶磁器で、18点出土した。このうち遺構から出土したものは8点で、他は全て基本層Ⅰ層から出土している。1層からは、16世紀後半代の中国産青花皿(第40図8)や17世紀後半代とみられる岸産?鉄釉鉢(第40図2)、19世紀前半代肥前産青磁染付皿(第40図9)などが出土している。遺物が出土した遺構は、調査区西側で検出された4基の土坑である。この内S K 5 土坑からは、16世紀後半代の瀬戸美濃灰釉皿(第39図4)が出土している。しかし、18世紀代の大堀相馬産陶の小片も出土していることから、近世の土坑と考えられる。また、S K 6 土坑からも18世紀代の大堀相馬産灰釉折縁皿(第40図5)が出土している。

遺物全体としては、18~19世紀前半代の遺物が主体を占め、16世紀代の遺物については、近世遺構形成時に混入したものと考えられる。

## 6まとめ

今回の調査では、一帯に残る「中館」の地名から、中世沖野城の主郭に関わる遺構の存在が期待されたが、確実に中世と断定できる遺構は確認されなかった。遺物については、S K 5 土坑より16世紀後半の瀬戸美濃灰釉皿が1点出土している。S D 1 溝跡については、遺物の出土がなく年代の詳細は不明である。遺構の切り合い関係から、土坑群より古い遺構であるが、中世まで遡るか否かは不明である。比較的規模が大きい円形の土坑群については、川土遺物から18世紀以降に掘り込まれたものと考えられる。小型の土坑についても近世以降のものと考えられる。S X 1 性格不明遺構については、堆積土にみられる下面の凹凸と下層土の著しい巻き上げから、耕作に関わる遺構の可能性が考えられる。しかし部分的な検出であり、遺物の出土も無いことから、その性格については今後の検討課題としたい。

### <参考文献>

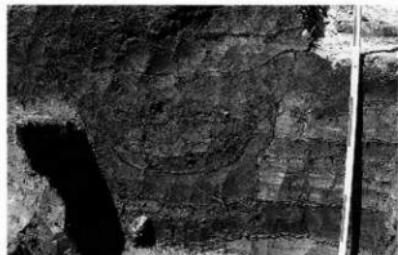
- 佐藤申二・渡辺誠 1986「II調査報告 沖野城跡」『年報7』仙台市文化財調査報告書第94集
- 柳原敏昭 2006「沖野城」『仙台市史 特別編7 城館』
- 結城慎一 1992「III本調査報告2) 沖野城跡」『年報14』仙台市文化財調査報告書第176集



1 III層上面遺構検出状況（西から）



2 完掘状況（北西から）



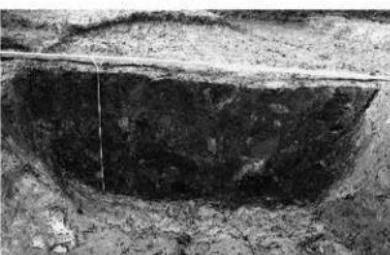
3 基本層・SK6土坑断面状況（東から）



4 SD1溝跡充掘状況（南から）



5 SK1・5・6土坑完掘状況（南から）



6 SK5土坑半截状況（南から）

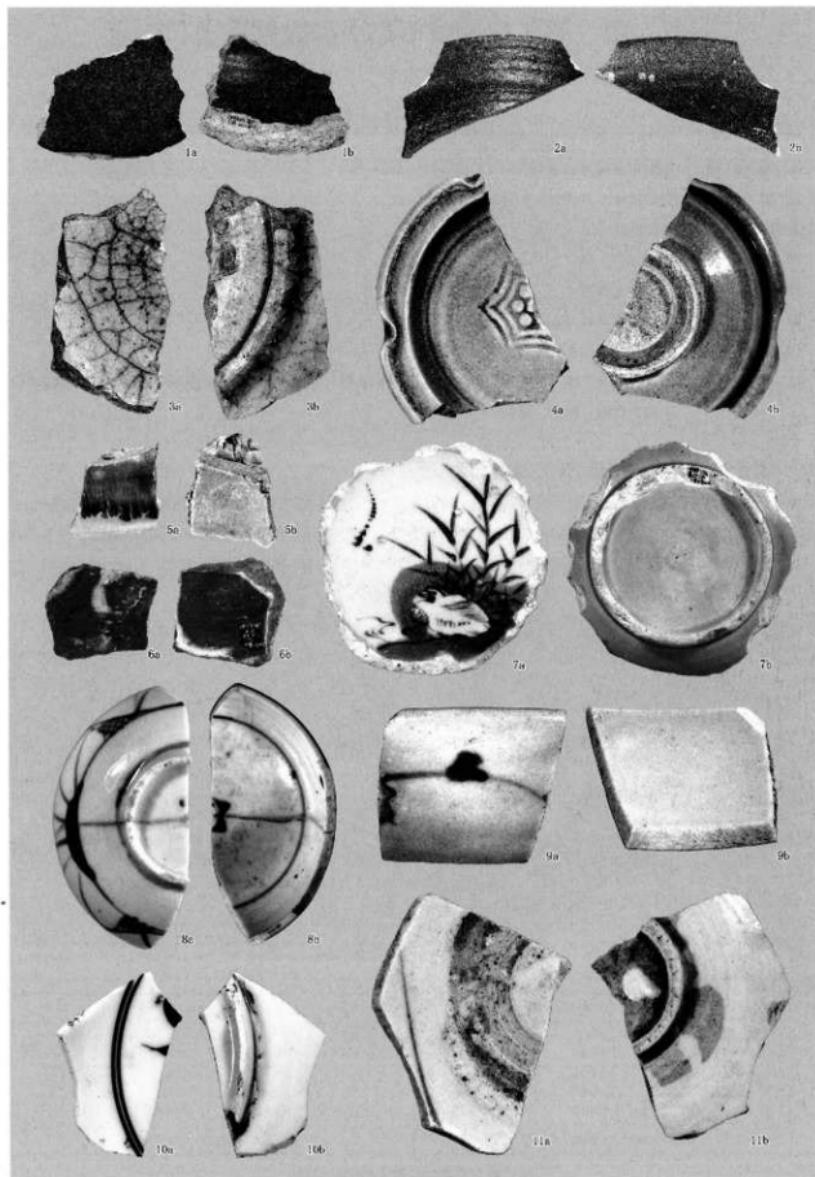


7 SX1性格不明遺構完掘状況（南西から）



8 SX1性格不明遺構断面状況（南西から）

図版18 調査区全景、基本層序、検出遺構



図版19 出土遺物

## VIII 洞ノ口遺跡第13次調査報告書

### 1 調査要項

遺跡名 洞ノ口遺跡（宮城県遺跡番号01372）  
 調査地点 仙台市宮城野区岩切字洞ノ口100-1、188-6  
 調査期間 平成20年9月29日～10月31日  
 調査対象面積 226.48m<sup>2</sup>  
 調査面積 86m<sup>2</sup>  
 調査原因 個人住宅建設  
 調査主体 仙台市教育委員会  
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係  
 担当職員 主事 鈴木 隆 主事 加藤 隆則 主事 森田 義史 文化財教諭 佐藤 正弥  
 文化財教諭 熊谷 敏哉

### 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年9月4日付けで地権者より提出された、個人住宅建設に係る発掘届（H20教生文第184-165号）に基づき実施した。確認調査は平成20年9月29日に着手した。建築予定部分に1トレンチ（東西3m×南北



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	集落、城館、居宅、水田	自然堤防	古墳、奈良、平安、中世、近世	8	羽黒山遺跡	城跡、宗教遺跡	丘陵	中世、近世
2	岩切城跡	城跡	丘陵	中世	9	今市遺跡	先秦、古墳時代	自然堤防	平安、中世
3	右切壁塁穴居跡	壁穴墓	丘陵斜面	古墳	10	湖ノ原遺跡	集落、墓地、水田	自然堤防	古墳、奈良、平安、中世
4	新宿御遺跡	城郭跡	自然堤防	平安	11	東山遺跡	集落	自然堤防	古墳、古代、中世
5	東光寺空跡	城跡	丘陵斜面	中世	12	山土遺跡	集落	自然堤防	平安、古墳、古代
6	東光寺遺跡	洞窟、石碑位、寺跡、集落、居宅	丘陵斜面	中世	13	市川町遺跡	官衙関連施設	自然堤防	绳文～中世
7	若宮前遺跡	洞窟、信傳遺跡	丘陵斜面	古墳、古墳、平安、中世、近世					

第41図 遺跡の位置と周辺の遺跡

10m、その後東西4m×南北8m程拡張)と2トレンチ(東西3m×南北8m)の調査区を設定して調査を行ったところ、多数の土坑や井戸跡を検出したため引き続き本調査を実施した。

1トレンチでは重機により盛土および1層を掘削した。II・III・V層上面で人力により遺構検出作業を実施し、写真・図面によって記録した。

2トレンチでは1トレンチでの知見を参考にIII層上面で遺構検出作業を行い、写真・図面によって記録した。

### 3 遺跡の位置と環境

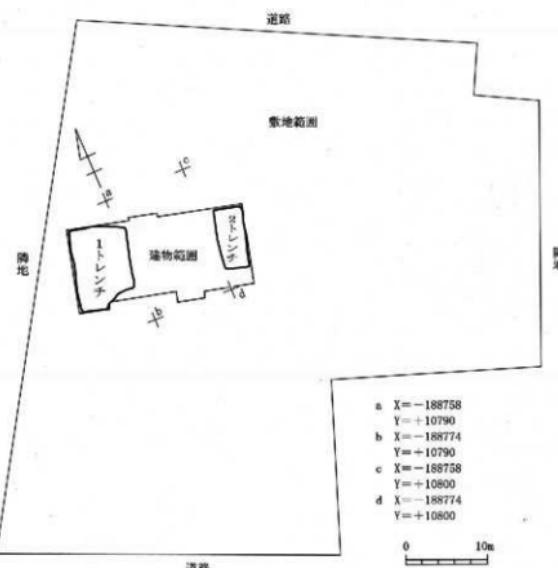
洞ノ口遺跡は仙台市東北部の利府町・多賀城市と接する地区でJR岩切駅と県道仙台松島線(利府街道)の間にあたり七北田川北岸の自然堤防とその北側の後背湿地に立地する。

本遺跡周辺には、弥生時代以降の遺跡が数多く分布しており、その大部分は七北田川両岸の丘陵面と自然堤防上に集中している。奈良時代には東方約3kmに陸奥国府として多賀城が築かれ、その南側に位置する高崎遺跡・市川橋遺跡・山王遺跡などでは平安時代の方格地割に基づく建物群が検出されている。多賀城衰退後は新田遺跡に溝で区画された屋敷跡があったことが明らかにされた。12世紀に遡る遺構と15世紀段階の大規模な屋敷群の少なくとも二時期あったとされ、後者は留守氏との関連が示唆されている。

一方、本遺跡の西側には東光寺遺跡から羽黒前遺跡にかけて13世紀後半から14世紀後半頃の板碑群が集中してみられ、宗教的空間が展開していたことがわかる。また岩切城を中心に東光寺城跡や化粧坂城跡・若宮前遺跡など軍事的性格を有する遺跡の拡がりも確認されるとともに、七北田川対岸の今市遺跡・鴻ノ巣遺跡でも屋敷跡が調査され、市場や河川交通とのかかわりが指摘されている。



第42図 調査地点の位置

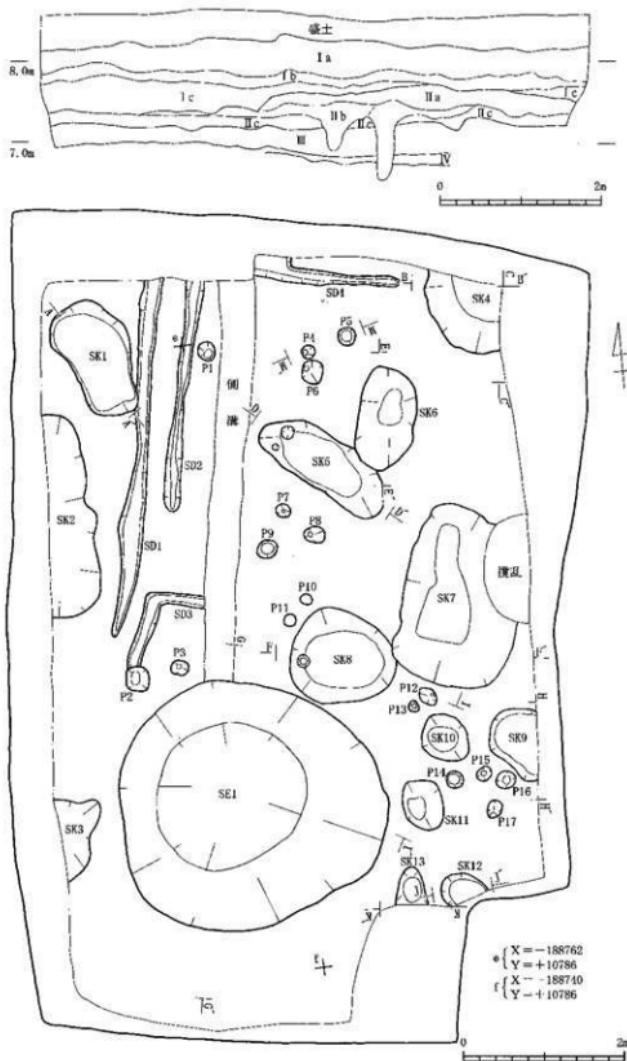


第43図 調査区配置図

本遺跡は、地表顯在遺構から戦国期の城館であることが知られていたが、土地区画整理事業に先立つ平成4年から13年の調査で、鎌倉～南北朝期の屋敷地、古代の居住域、古墳時代の水田跡など重層的な遺跡であることが明らかにされた。中世の屋敷・館跡は6期に区分され、15世紀末の年代が想定されている。IVa 3期には大規模な塁と上屋を伴うことが明らかになった。東西300m、南北170m以上の広がりを持ち、溝や横列で区画された内部に整然と配備された建物群のほか、かわらけの集中施設上坊や塔婆とこけら経が大量に出土した宗教的空間など各段階で特徴的な様相を呈している。城館廃絶後は大部分が水田域となっているが、一部墓地となった区画もある。

#### 4 基本層序

調査地点の盛土は全体を通じて30～40cm程で、基本層は大別10層、細別18層に分けた。II層は調査区全体にわたって波打ったように堆積し、遺物や炭化物を多量に含むことから河川流水に伴う自然堆積層と判断した(I)。III層は1・2トレンチを通じてほぼ均質に堆積し、厚さは20～30cmほどである。1トレンチ北側は自然地形が落ち込み、V～VII層が堆積している。そのうちV層は灰白色



第44図 1トレンチIII層上面平面図・北側断面図

火山灰で、調査区北東に部分的に分布している。IX層は調査区全体に分布し、下層にX層の分布を確認した。

## 5 発見遺構と出土遺物

基本層Ⅲ層上面で井戸跡1基、溝跡3条、上坑3基、ピット3基が検出された。さらに西側にトレンチを拡張した結果、上坑10基、溝跡1条、ピット14基が検出された。上層確認のトレンチを掘り下げたところ調査区北側に向かって地形が低くなり、V～X層が確認できた。VII層上面で溝跡1条が確認された。

2トレンチではⅢ層上面で十坑が3基検出された。

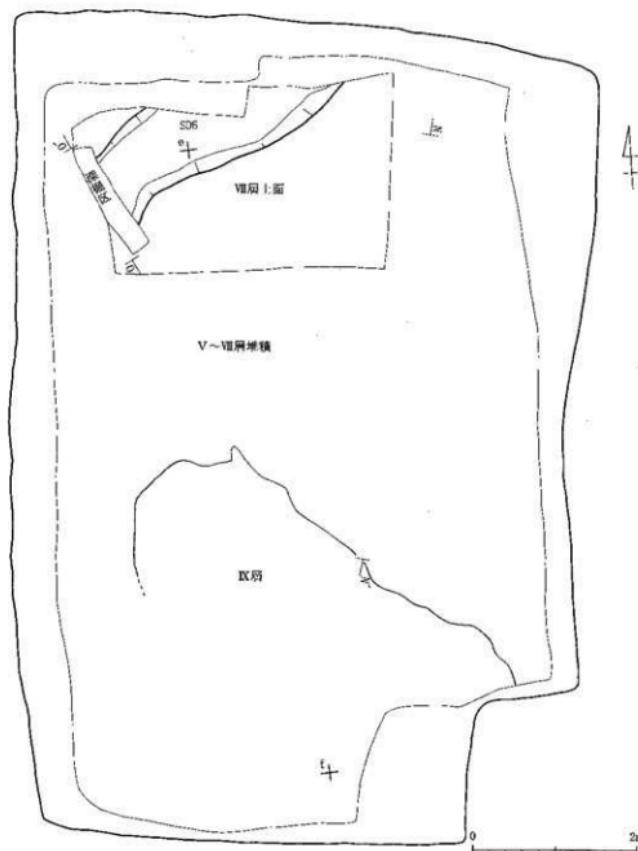
### 1) 溝跡

#### S D 1～4 小溝状遺構

Ⅲ層上面で調査区北側に検出された。S.D.1・S.D.2溝跡は南北に延び、S.D.3溝跡はほぼ直角に屈曲してP.2に切られている。S.D.4溝跡は拡張区北側に位置し、東西に延びる。上端の幅は約20cmで非常に浅く、検出面から2～3cmほどの深さである。底面は凹凸の激しい部分もあるが、性格は不明である。S.D.

1溝跡で鉄釘、S.D.2溝跡でかわらけ片が出土している。

S.D.5溝跡 VII層上面で調査区北西に検出された。上端幅100cm、下端幅75cmで北東方向に向かって伸びている。堆積土は単層で、深さは12cm程度である。灰白色火山灰層を掘り込み、堆積土中にも火山灰ブロックが多量に含まれることと、堆積土中からロクロ使用の土師器片が出土していることから平安時代の遺構であることが推定できる。他に馬の歯が出土している。



第45図 1トレンチ下層遺構平面図

## 2) 土坑

S K 1 土坑 調査区北西

隅に位置し、Ⅲ層上面で

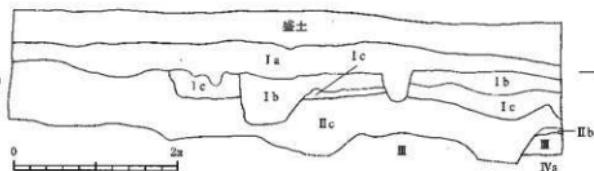
検出された。平面形は不

整梢円形を呈し、堆積土

は4層である。長軸148cm

×短軸78cmで、確認面か

らの深さは22cmである。



第46図 トレンチ西壁断面図

下層に薬灰状の白色繊維が堆積しており、

底面は被熱して硬化している。遺物は2層中

から5型式の常滑産鉢が堆積土中から不明

鉄製品、土師器・須恵器が出土している。

S K 2 土坑 調査区西端北側に位置し、Ⅲ

層上面で検出された。西側が調査区外のため全体形は不明であるが、不整梢円形

状を呈すると考えられる。長辺は250cm程である。堆積土は基本層 II c 層の単層で、深さは最大40cm程である。出土遺物は常滑産甕と土師器片がある。

S K 3 土坑 調査区西端南側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。西側が調査区外

のため全体形は不明である。検出長は95cmほどである。堆積土は西壁断面の II c

層の単層で、深さは35cm程である。遺物は胴部に押印が施された常滑産甕を示し、

土師器と常滑産鉢が出土している。

S K 4 土坑 拡張区

北東隅に位置し、Ⅲ

層上面で検出され

た。北側と東側が調

査区外のため全体形

は不明であるが、不

整な円形の可能性が

ある。堆積土は2層

で、深さは32cmであ

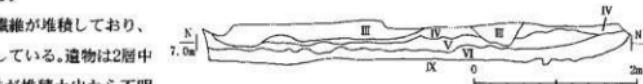
る。2層中から土師器

片が出土している。

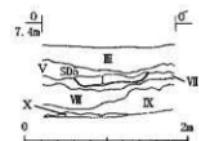
S K 5 土坑 拡張区

北側に位置し、Ⅲ層

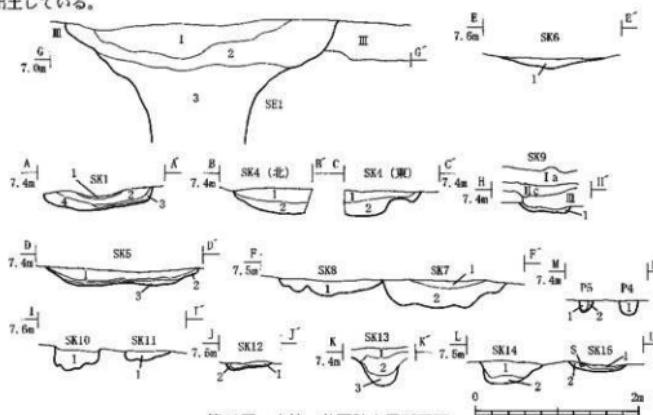
上面で検出された。



第47図 III層以下の土層断面図



第48図 SD 5 溝跡土層断面図



第49図 土坑・戸井跡土層断面図

S K 6 土坑と重複しており、本造構が古い。南北の長軸130cm×短軸70cmの梢円形を呈する。堆積土は3層で、深さは18cmである。1層中から常滑産甕・骨片が出土している。

S K 6 土坑 拡張区北側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。S K 5 土坑と重複しており、本造構が新しい。平面形は長軸170cm×短軸60cmの梢円形である。土坑内北西隅に小穴が二つ穿たれている。堆積土は単層で、深さ10cmほどである。炭化物と須恵器片が出土している。

S K 7 土坑 拡張区中央に位置し、Ⅲ層上面で検出された。S K 8 土坑と重複しており、本遺構が新しく、東側を搅乱によって一部切られている。平面形は長軸212cm×短軸137cmの楕円形を呈する。断面形は逆台形に近い形状となる。堆積土は2層で、深さは最大32cmである。遺物は須恵器壺と動物骨を図示し、土師器や常滑産甕がみられる。

S K 8 土坑 拡張区中央に位置し、Ⅲ層上面で検出された。S K 7 土坑と重複しており、本遺構が古い。平面形は径120cmほどの円形である。堆積土は単層で、深さは最大18cmである。東側底面に被熱して硬化している部分が見られる。出土遺物はない。

S K 9 土坑 拡張区東端に位置し、Ⅲ層上面で検出された。東側が調査区外に延びており、全体形は不明であるが、円形を基調としたものと考えられる。堆積土は単層で、深さは10cmほどである。青磁蓋と常滑産甕が出土している。

S K 10 土坑 拡張区南側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。平面形は径60cmほどの不整な円形を呈する。堆積土は単層で、深さは最大32cmである。常滑産甕が出土している。

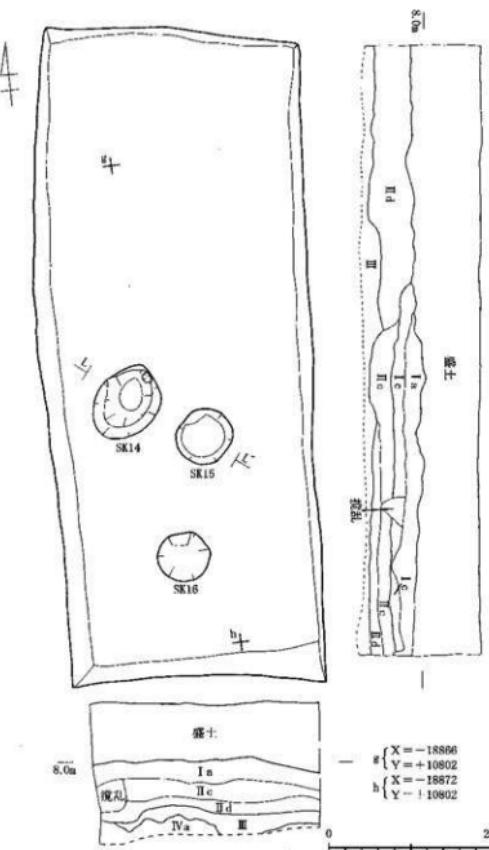
S K 11 土坑 拡張区南側に位置し、Ⅲ層上面で検出された。平面形は長軸60cm×短軸50cmの楕円形を呈する。堆積土は単層で、深さは最大10cmである。土師器壺を図示し、常滑産甕、鉄滓、骨片が出土している。

S K 12 土坑 調査区南端に位置し、Ⅲ層上面で検出された。南側が調査区外に延びており、全体形は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。堆積土は2層で、深さは8cm程度である。かわらけが出土している。

S K 13 土坑 調査区南端に位置し、Ⅲ層上面で検出された。南側が調査区外のため全体形は不明であるが、楕円形と考えられる。堆積土は2層で、深さは最大45cmである。遺物は出土していない。

S K 14 土坑 2トレンチⅢ層上面で調査区中央西側に検出された。平面形は長軸100cm×短軸80cmの楕円形を呈する。堆積土は2層で、深さは28cmである。須恵器片が出土している。

S K 15 土坑 2トレンチⅢ層上面で調査区中央に検出された。平面形は径68cmの円形を呈する。中層から焼上焼が出土している。堆積土は2層で、深さは8cmである。出土遺物は鉄釘、銅錢、砥石、骨片が出土している。



第50図 2トレンチ平面図・断面図

S K16土坑 2トレンチⅢ層上面で調査区南側に検出された。平面形は長軸62cm×短軸58cmの精円形を呈する。堆積土は1層で、深さは10cmほどであったと考えられる。遺物は出土していない。

### 3) 井戸跡

S E 1井戸跡 調査区南側に位置する。Ⅲ層上面で検出された。掘り方直径は約3.2m、井戸部直径は約1.7mである。湧水が激しく、検出面から1m程しか掘り下げられなかつたため、深さは不明である。2層中からかわらけ、常滑産甕・鉢・瓦、銅錢、鉄滓が出土している。3層中から木製品が出土している。土器・陶磁器は12世紀末から13世紀に収まる年代が与えられるが、棗瓦のみ江戸時代以降のものである。堆積土は3層である。井戸枠は確認できなかつたが、傾斜の緩い部分(3層中)に有機質の堆積が見られた。

### 4) ピット

P 1~17 Ⅲ層上面で17基のピットを検出しているが、断面形状や堆積土の観察の結果、柱穴と確認できるものは見出せなかつた。P 6で常滑産甕、土師器が、P 8で上師器、P 9で常滑産甕、土師器、P 10で炭化物、P 14で窯

地 面		
地 面	土 性	地 面
Ia	JYR33 黒褐色	砂質シルト 有機質土に黄褐色粘土・ブロックを多量に含む。
Ib	JYR34 黒褐色	砂質シルト 有機質土に少量化。
Ic	JYR35 黒褐色	砂質シルト 角礫岩・シート・ブロックを多量に含む。炭化物を少量化。
IIa	JYR36 黒褐色	砂質シルト 炭化物を少量化。
IIb	JYR37 黒褐色	砂質シルト 炭化物・黄褐色シート・ブロックを少量含む。北壁に落ち込みを形成。
IIc	JYR38 黒褐色	砂質シルト 灰白色・均一な粘土・シート・ブロックを多量含む。十数センチリング充満。
IID	JYR39 黒褐色	砂質シルト 有機質シート・ブロックを微量に含む。
IIe	JYR40 黒褐色	砂質シルト 有機質シート・ブロックを微量に含む。
IIf	JYR41 黒褐色	砂質シルト 有機質シート・ブロックを微量に含む。
IIIa	JYR42 黒褐色	砂質シルト 有機質シート・ブロックを微量に含む。
IIIb	JYR43 黒褐色	砂質シルト 有機質シート・ブロックを微量に含む。
IVa	JYR44 黒褐色	砂質シルト 有機質シート・ブロックを微量に含む。
IVb	JYR45 黒褐色	砂質シルト 有機質シート・ブロックを微量に含む。
IVc	JYR46 黑褐色	砂質シルト 有機質シート・ブロックを微量に含む。
V	JYR47 黑褐色	砂質シルト 有機質シート 南北に比較的埋め尽くす。有機質ゴミ・土塊を多量に含む。
VI	JYR48.71 黒色	粘土 南北に比較的埋め尽くす。有機質土塊を含む。下層にうすい状の本體があらわれる。
VII	火成岩	火成岩 国際標準土壌区分法分類。
VIII	ZST40 黒褐色	粘土 無機物粘土・無機物・炭化物を少量化。
IX	ZST50 黒褐色	シルト質粘土 無機物全体・無機物・炭化物を少量化。
X	JYR49 黑褐色	粘土 無機物全体・無機物・炭化物を少量化。
地 面		
地 面	土 性	地 面
1レンジ	土 色	地 面
SB1-1	JYR50 黒色	粘土質シルト 武田寺赤釉土被りを多量に含む。
2	JYR51 黒褐色	粘土質シルト 武田寺赤釉土被りを少量化。
3	JYR52 黑褐色	粘土質シルト トレンチをうすく覆する。表面部分が粘土被りを呈し、有機物の堆積が著しい。
SK1-1	JYR53.70 黑褐色	粘土質シルト 埋没状の白色繊維を多量に含む。
2	ZST54 黑褐色	砂質シルト 砂質シルト
3	ZST55 黑褐色	砂質シルト 砂質シルト
4	JYR56 黑褐色	粘土質シルト 上面に塵埃の白い苔被りを含む。
SK4-1	ZST57 黑褐色	砂質シルト 表面のブロックを多量に含む。
2	JYR58 黑褐色	シート状鉄滓 塵埃の白い苔被りを含む。
SK5-1	JYR59 黑褐色	砂質シルト 塵埃を多量に含む。
2	JYR60 黑褐色	砂質シルト 塵埃を多量に含む。
SK6-1	JYR61 黑褐色	粘土質シルト 塵埃を多量に含む。
2	JYR62 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
SK7-1	JYR63 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
2	JYR64 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
SK8-1	JYR65 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
2	JYR66 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
SK9-1	JYR67 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
2	JYR68 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
SK10-1	JYR69 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
2	JYR70 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
SK11-1	JYR71 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
SK12-1	JYR72 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
2	JYR73 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
SK13-1	JYR74 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
2	JYR75 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を多量に含む。
SK14-1	JYR76 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を少量化。
2	JYR77 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を少量化。
SK15-1	JYR78 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を少量化。
2	JYR79 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を少量化。
SK16-1	JYR80 黑褐色	粘土質シルト 尘埃を少量化。

第3表 土層観察表

地不明陶器が出上している。

## 5) 出土遺物

調査区全体で土師器196点、須恵器17点、かわらけ19点、古瀬戸陶器1点、東海系無釉陶器(源美・常滑窯産)344点、在地系無釉陶器1点、中国陶器8点、近世陶磁器14点、瓦7点を数える(全て接合前破片数)。その他、銅鏡、鉄釘・鉄滓、刀子、魚骨、動物骨・齒、木製品、砥石などが見られる。総量で平箱2箱分の遺物が出土している。

Ⅱ～Ⅲ層上面で出土する中世陶器(壺・甕・鉢)は、中野編年4～6型式(1190～1275)のものが主体的である。かわらけについても破片資料で全体を復元できるものが僅少であるが、佐藤洋の編年(佐藤2003)や中野高柳遺跡出土資料(村田ほか2006)と比較すると13世紀中葉から14世紀前半に収まるものであると判断できる。また白石窯など在地産と断定できる鉢・甕類は僅少で、無釉陶器の中で在地産陶器が半数を占める名取川流域の遺跡(工ノ堀遺跡、小川ほか2000)とは対照的な様相を示している。

鉄製品は刀子と釘以外原型を判別できないが、鉄滓も出土している。木製品は遺存状態が良好なものが少ないが、ヘラ状製品(鍔か)が出土している。銅鏡も遺存状態が悪く凶化できたのは5点に留まる。推定される初鋤年代は全て11世紀の北宋代である。

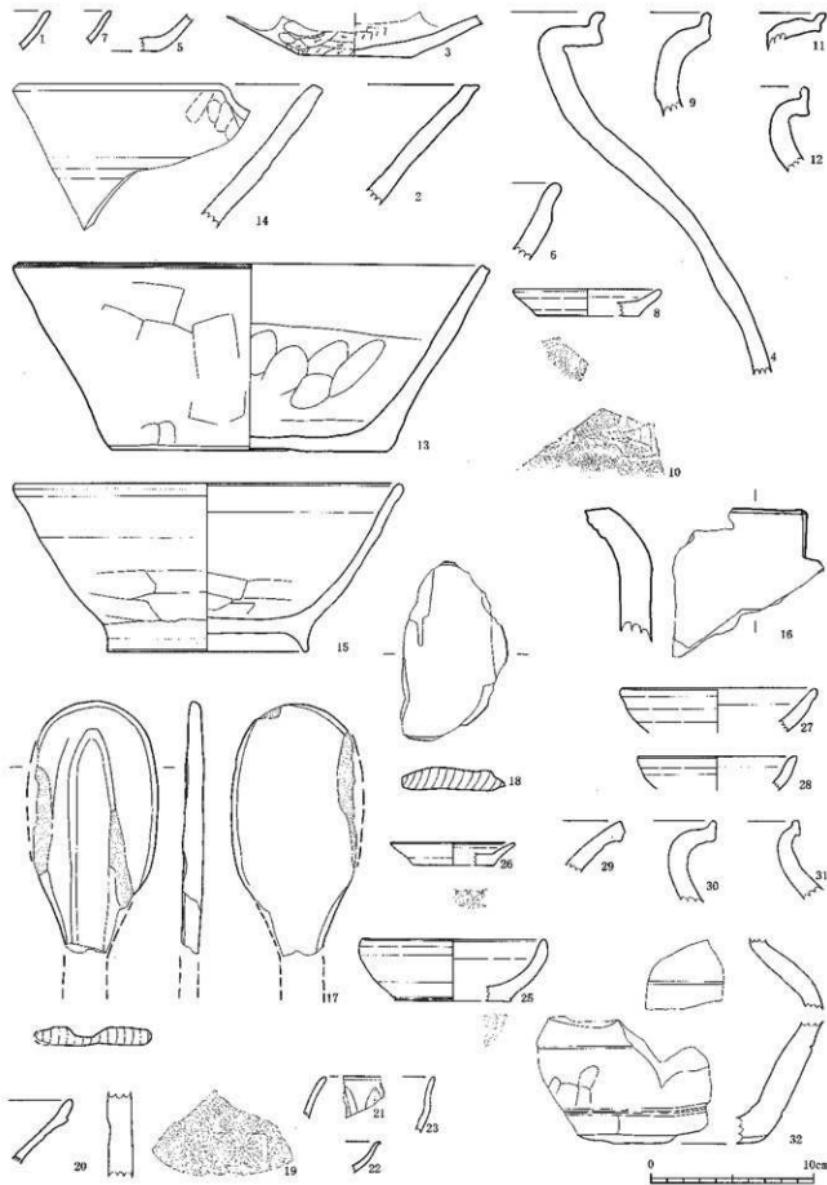
土師器・須恵器は山王遺跡出土例(菅原ほか1996)と比較すると第4群(10世紀前葉)に類似が認められる。

## 6まとめ

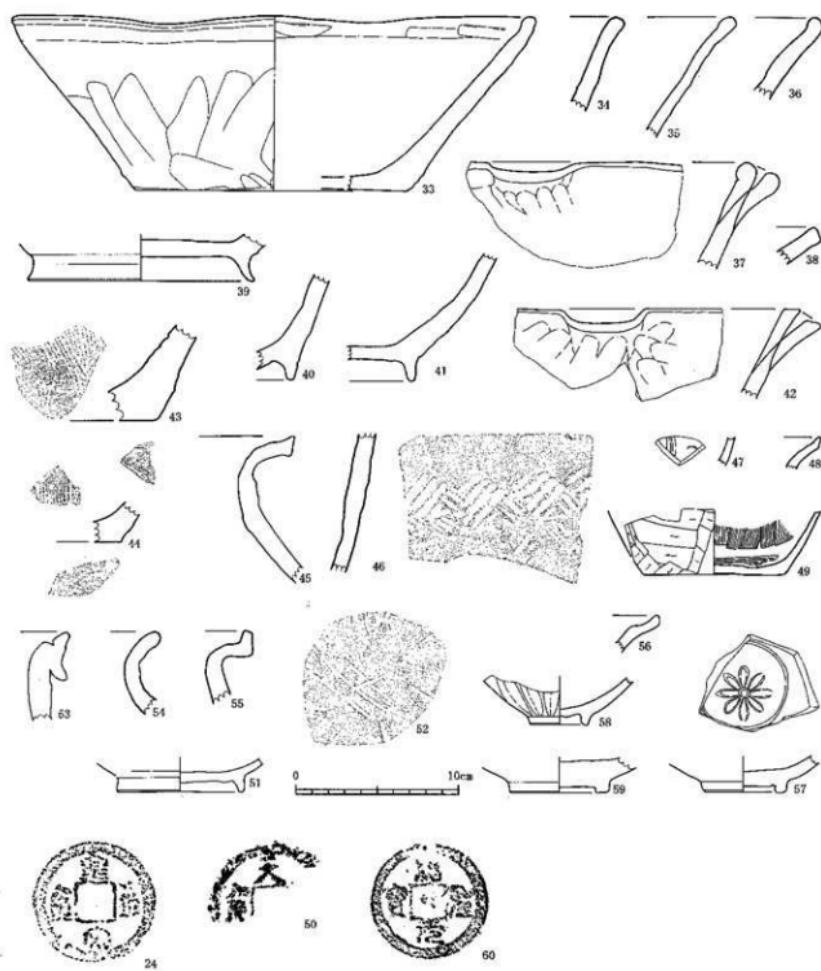
- ①今回調査地点は中世の館跡の南東に位置し、標高は約9mである。
  - ②Ⅲ層上面で井戸跡1基、土坑16基、溝跡4条、ピットが検出された。
  - ③Ⅶ層上面で溝跡1条が検出された。
  - ④各造構・基本層位出土遺物を検討した結果、Ⅲ層上面は13世紀後半、Ⅶ層上面は10世紀前半以降の年代が与えられる。
  - ⑤出土遺物(中世上器・陶磁器)全体をみると、源美・常滑系の陶器が大半を占め、かわらけや貿易陶磁は少ない。
- 註(1) 東北学院大学教授松本秀明氏に実見していただき、ご教授いただいた。

### 参考文献

- 浅野克樹 2006「洞ノロ遺跡第12次発掘調査報告」『前出館跡他』仙台市文化財調査報告書第301集  
 小川淳一・高橋綾子 2000『王ノ塚遺跡』仙台市文化財調査報告書第219集  
 菊地逸夫ほか 1996『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第172集  
 菊地逸夫 2003『II陶器2陸奥の陶器生産①一本杉窯跡』『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編 高志書院  
 佐藤洋 2003『I土器2陸奥のかわらけ②陸奥南部2・宮城県』『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会  
 編 高志書院  
 進藤秋輝ほか 1994『宮城県多賀城跡調査研究所年報』  
 菅原弘樹ほか 1996『山王遺跡IV・多賀前地区考察編一』宮城県文化財調査報告書第171集  
 中野晴久 2005『常滑・渥美』『中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~』発表要旨集  
 千葉孝介 1992『武士の館の発見』『よみがえる中世7みちのくの都 多賀城・松島』  
 平間亮輔 2005『洞ノロ遺跡第一回・第二回・第三回・第四回・第五回・第六回・第七回・第八回調査報告書』仙台市文化財調査報告書第326集  
 村田晃一ほか 2006『中野高柳遺跡IV』宮城県文化財調査報告書第204集



第51図 出土遺物 1



第52図 出土遺物2

番号	出土地点	分類	坑数 (cm, g)			特徴・備考 (窓地・施設・文様・時期・その他)			年代
			遺物名・基準編	種類	形態	器蓋・瓶	口徑・幅	底径・厚	
Q-1	NOS-1番	馬頭	一						22-1
1 C-1	SOK-1	土師器	灰	(2.4)					22-2
2 I-1	SK-1 2層	陶器	灰	(7.5)	Q20				22-3
N-9	SK-1	铁器	不明	(4.3)	(4.0)	13.8	直縁: 12g		22-4
I-41	SK-3	陶器	灰	—	—	—	神印 (窓地)	常備	22-5
3 C-2	SK-4 2層	上部器	灰	(2.3)	(2.1)	Q10	外縁に持ちヘラクリテリム面ヘラケズリ		22-5
4 I-2	SK-5 1m	陶器	灰	(2.1)	(2.0)	—		常備	4~5型式
E-1	SK-7	陶器	灰	(2.3)	—	—	50.0		22-7
Q-2	SK-7	動植物	一	(9.4)	(5.9)	(5.2)			22-8
J-9	SK-9	食器	灰	—	—	—			22-10
6 I-3	SK-10	陶器	灰	(4.8)	(2.8)	—		常備	22-11
7 D-6	SK-11	土師器	灰	(2.1)	(2.0)	—	レクハ窓地内面ラミガキ半身也處理		22-12
N-10	SK-15	铁器	紅	(5.7)	L5	1.9	重量: 30g 鍛錬鉢 (2.3) cm		22-15
N-4	SK-15	陶器	灰	—	—	—			22-14
8 I-4	SE-1	十四折十脚	灰	1.7	(8.7)	(6.0)	にクラシカウラカ 直縁罐身各内外面被施 直縁少量合		22-15
9 I-30	SK-1	陶器	灰	(6.9)	(30.0)	—		常備	4~5型式
10 I-38	SE-1	陶器	灰	—	—	—	中山 (窓地小柄)	常備	22-16
11 I-8	SE-1	陶器	灰	(4.4)	(34.0)	—		常備	4~5型式
12 I-9	SU-1	陶器	灰	(5.0)	—	—		常備	4~5型式
13 I-6	SE-1	陶器	灰	(1.5)	(29.0)	17.0	SK 3出の破片と接合	常備	22-19
14 I-7	SK-1	陶器	灰	(6.5)	(25.0)	—		山形式	22-20
15 I-3	SE-1 2層	陶器	灰	(10.4)	(23.5)	12.2		山形輪系	5型式
16 G-1	SE-1	丸	灰瓦	(9.2)	(9.2)	1.5	切端幅4.7cm	常備	22-22
N-1	SL-1	陶器	灰	—	—	—			22-23
Q-3	SE-1	陶器	灰	—	—	—			22-24
7 I-3	SE-1, 週	木製品	△状	(15.3)	(7.3)	1.2			22-25
18 L-4	SE-1, 3層	木製品	不明	(0.5)	(6.3)	1.3			22-26
19 I-20	1層	陶器	灰	(5.7)	—	—	神印 (角付菊花)		22-28
20 I-48	1層	陶器	灰	(4.9)	(34.0)	—		近世	22-29
21 J-5	1層	陶器	灰	(2.6)	(5.7)	—	細縞弁文鏡	輪系	22-30
22 J-6	1層	陶器	灰	(1.9)	(12.0)	—		近世	22-31
23 J-7	1層	陶器	灰	(3.5)	(4.0)	—		近世	22-32
N-7	1層	陶器	灰	—	—	—	豊樂井寶 (前略)		22-33
N-1	1層	鐵器	刀子	12.3	1.8	0.5	直縁: 短		22-34
25 J-31	直縁	十脚灰十脚	灰	3.8	(1.0)	(7.0)	ロクラシカウラ 直縁罐身勿持庄底	13.0cm~14.0cm 高さ 14cm~15cm	22-35
26 J-22	直縁	上部器	灰	1.4	(2.6)	(4.8)	ロクラシカウラ 墨行多量に含む	14cm~15cm	22-36
27 J-23	直縁	上部器	灰	(2.8)	(11.8)	—	ロクラシカウラ 墨行多量に含む	14cm~15cm	22-37
28 J-26	直縁	上部器	灰	(2.1)	(6.6)	—	ロクラシカウラ 墨行多量に含む	14cm~15cm	22-38
29 J-13	直縁	陶器	灰	(4.2)	(2.0)	—		直地不規	22-39
30 J-28	直縁	陶器	灰	(5.1)	(46.0)	—		常備	4~5型式
31 J-30	直縁	陶器	灰	(4.9)	(27.0)	—		常備	4~5型式
I-2	直縁	陶器	灰	(2.2)	—	—			23-41
32 I-16, 21	直縁	陶器	三筋垂	(7.6)	—	(15.0)		常備	23-41
33 I-25	直縁	陶器	律	20.4	(0.7)	(16.3)		常備	34-46
34 I-49	直縁	陶器	律	(5.8)	(36.0)	—	墨手・黑色點子多量に含む	山形輪系	24-50
35 J-35	直縁	陶器	律	(7.4)	(27.0)	—		山形輪系	5型式
36 J-60	直縁	陶器	律	(5.0)	(34.0)	—		山形輪系	5型式
37 I-36	直縁	陶器	片口律	(6.5)	(48.0)	—		山形輪系	5型式
I-57	直縁	陶器	片口律	(2.3)	(28.0)	—	直縁多量に含む	常備	24-51
39 J-26	直縁	陶器	律	(3.4)	—	(13.8)		常備	3~4型式
40 I-61	直縁	陶器	律	(6.3)	—	(18.0)		山形輪系	5型式
41 I-34	直縁	陶器	律	(7.0)	(12.0)	—		山形輪系	5型式
42 I-29	直縁	陶器	片口律	(5.5)	(30.0)	—		山形輪系	5型式
43 J-7	直縁	陶器	片口律	(5.9)	(2.0)	(12.0)	内面直縁 斜腹直縁	斜腹直縁 内面直縁	24-54
44 I-56	直縁	陶器	律	(2.5)	—		内面直縁 斜腹直縁	斜腹直縁	24-55
N-2	直縁	陶器	刀子	(11.1)	1.9	—	重量: 18g		24-56
N-13	直縁	陶器	不明	3.4	4.7	(2.6)	直縁: 18g		24-57
N-16	直縁	陶器	不明	(5.4)	(6.9)	0.9	直縁: 1.2g		24-58
Y-15	直縁	陶器	不明	(3.9)	1.2	—	1. 直縁: 3.5g 2. 頭部: 1.5g		24-59
45 I-40	直縁	陶器	律	(9.2)	(28.0)	—		常備	24-60
46 I-19	直縁	陶器	律	(8.6)	—	—		常備	25-61
47 J-8	直縁	青磁	碗	(1.8)	—	—	内面直縁化	誤良窓	25-62
48 D-3	IV層	十脚律	碗	(2.0)	—	—	口縁部空口状 ロクラシカウラ	誤良窓	25-63
49 D-4	IV層	上部器	碗	(4.0)	—	—	外縁多量にヘラクリテリム面ヘラナデ		25-64
N-8	IV層	制器	律	(5.4)	(5.1)	—	口口口 (大型直縁・初期10235)		25-65
51 D-5	V層	土師器	灰	(2.0)	—	—	ロクラシカウラ 内面黑色處理		25-66
G-2	V層	瓦	平瓦	(5.4)	(1.1)	2.5	被取のタガ半瓦		25-67
52 T-18	古鏡	肉桂	不明	—	—	—	ヘラ青背景あり 本丸蓋		25-68
53 I-14	古鏡	陶器	灰	(5.4)	—	—		常備	25-69
54 I-31	古鏡	陶器	灰	(5.1)	(46.0)	—		腰突	25-70
55 I-46	古鏡	陶器	灰	(4.5)	(34.0)	—		常備	25-71
J-1	古鏡	青磁	碗	(2.1)	(28.0)	—		常備	25-72
57 J-2	表鏡	青磁	碗	(2.3)	—	—	内底面直縁化	前良窓	25-73
58 J-3	表鏡	青磁	碗	(2.0)	—	—	(3.5) 青磁弁文鏡	権良窓	13.0cm~14.0cm
59 J-4	表鏡	青磁	碗	(2.2)	—	—	外縁多量にヘラクリテリム面ヘラナデ	奥良窓	25-74
N-5	表鏡	青磁	碗	—	—	—	口口口 (直縁六實・初期10235)		25-75
60 N-5	表鏡	青磁	碗	—	—	—	ロクラシカウラ (直縁六實)		25-76

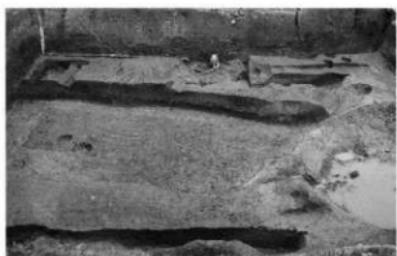
第4表 遺物観察表



1 トレンチII層上面検出（北から）



2 1トレンチIII層完掘全景（北から）



3 1トレンチIV層上面検出（西から）



4 2トレンチ完掘状況（東から）



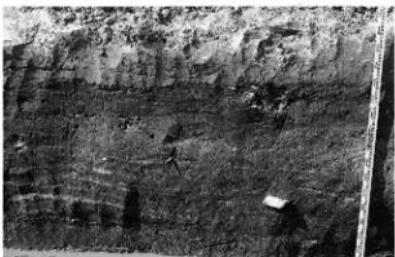
5 1トレンチ西壁北2（東から）



6 1トレンチ西壁北1（東から）



7 1トレンチ西壁南2（東から）



8 1トレンチ西壁南1（東から）

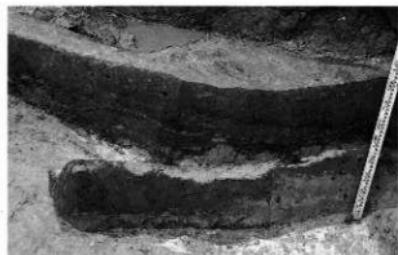
図版20 遺構検出・完掘状況・西壁断面



1 1トレンチ北壁東半（南から）



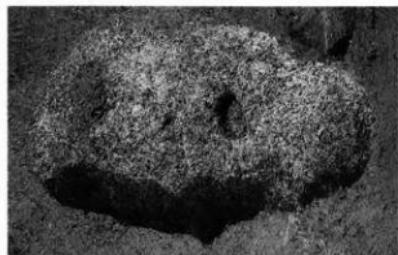
2 1トレンチ下層断面（西から）



3 SD5溝跡断面（北東から）



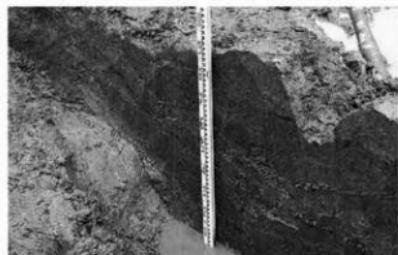
4 SK1土坑藁灰出土状況（東から）



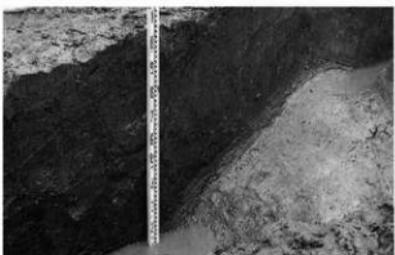
5 SK5土坑藁灰出土状況（南西から）



6 SE1井戸跡（南から）

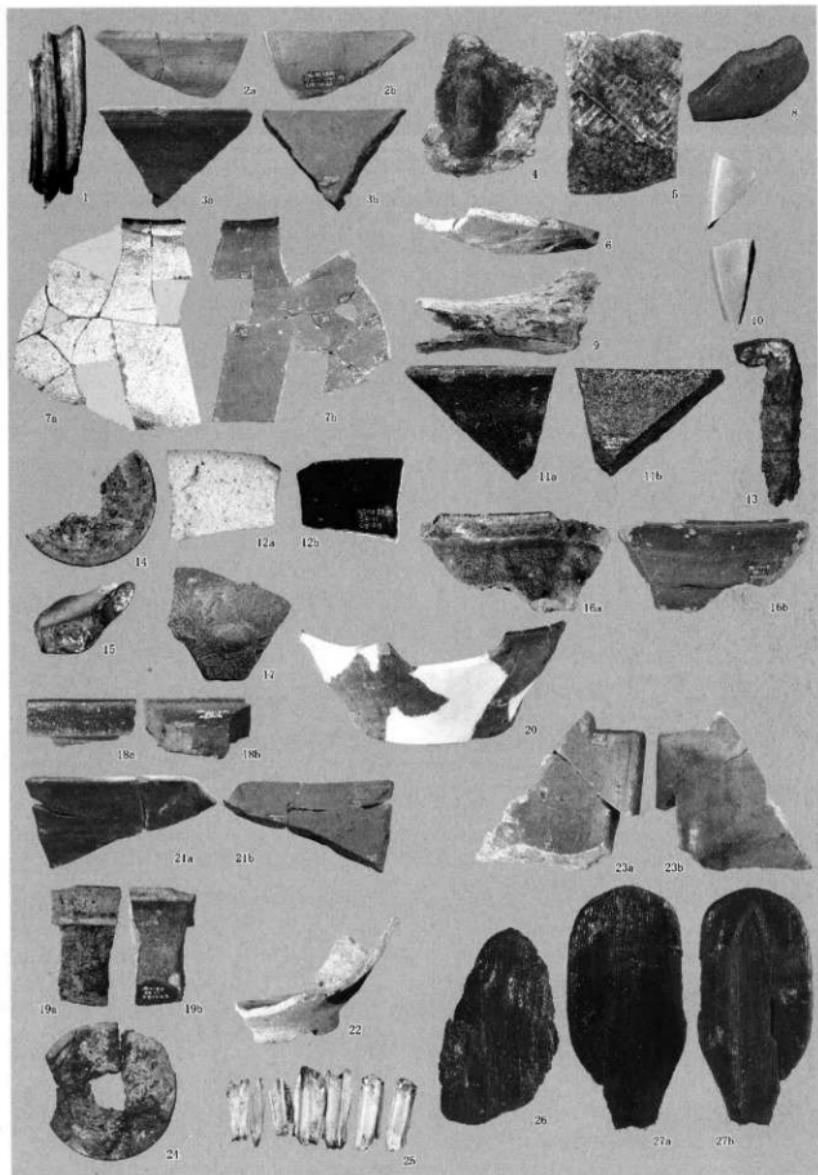


7 SE1井戸跡断面北半（西から）

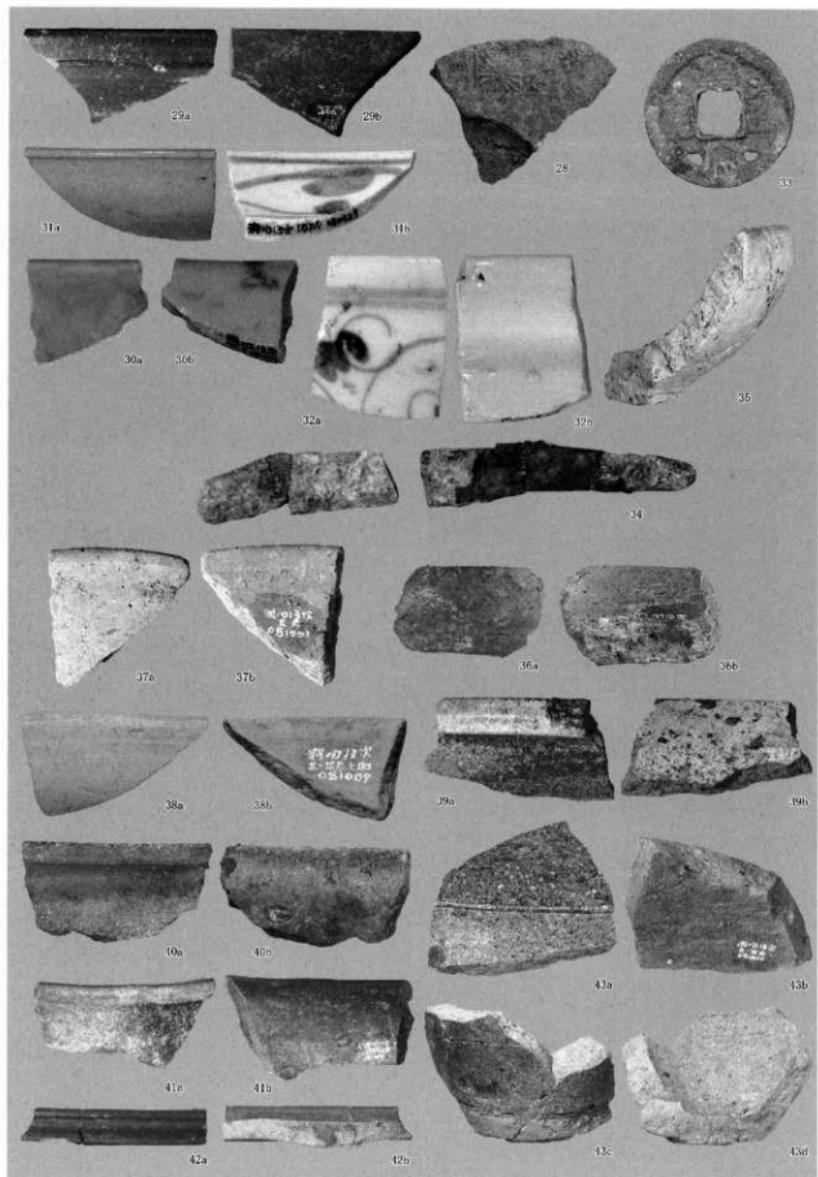


8 SE1井戸跡断面南半（西から）

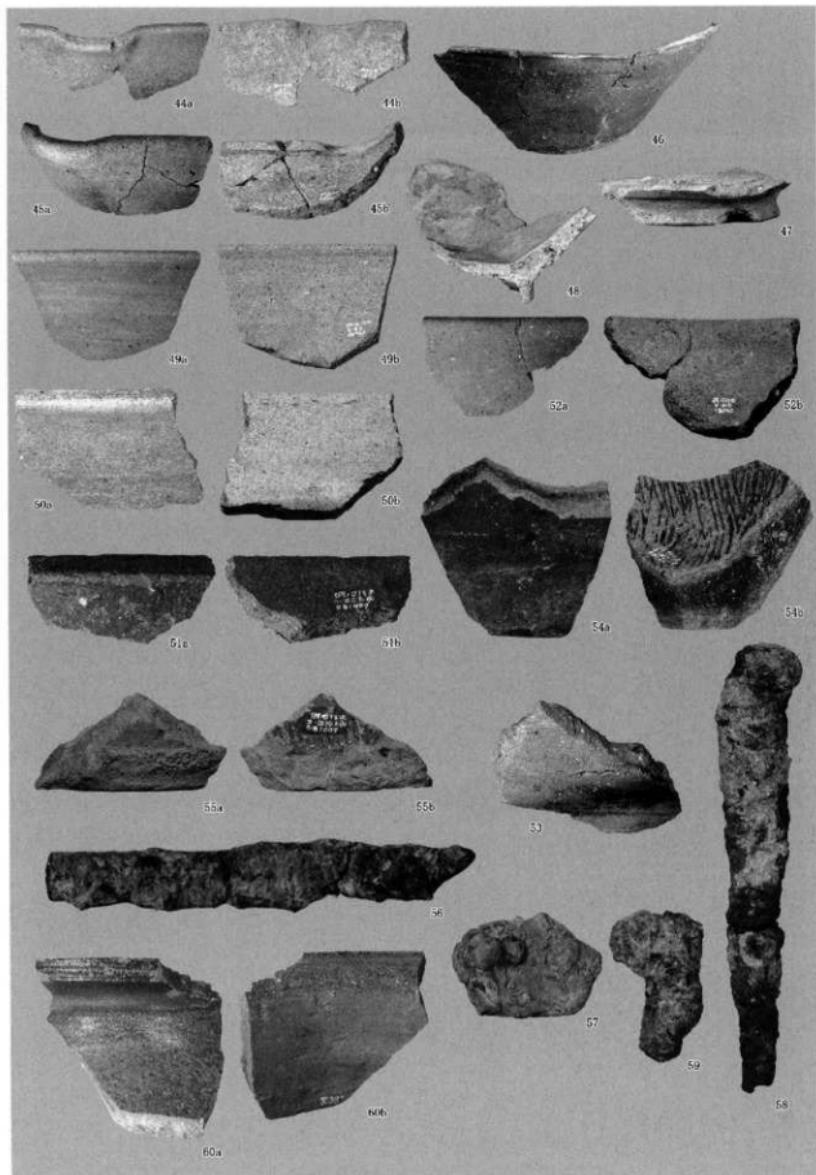
図版21 調査区断面・土坑・井戸跡



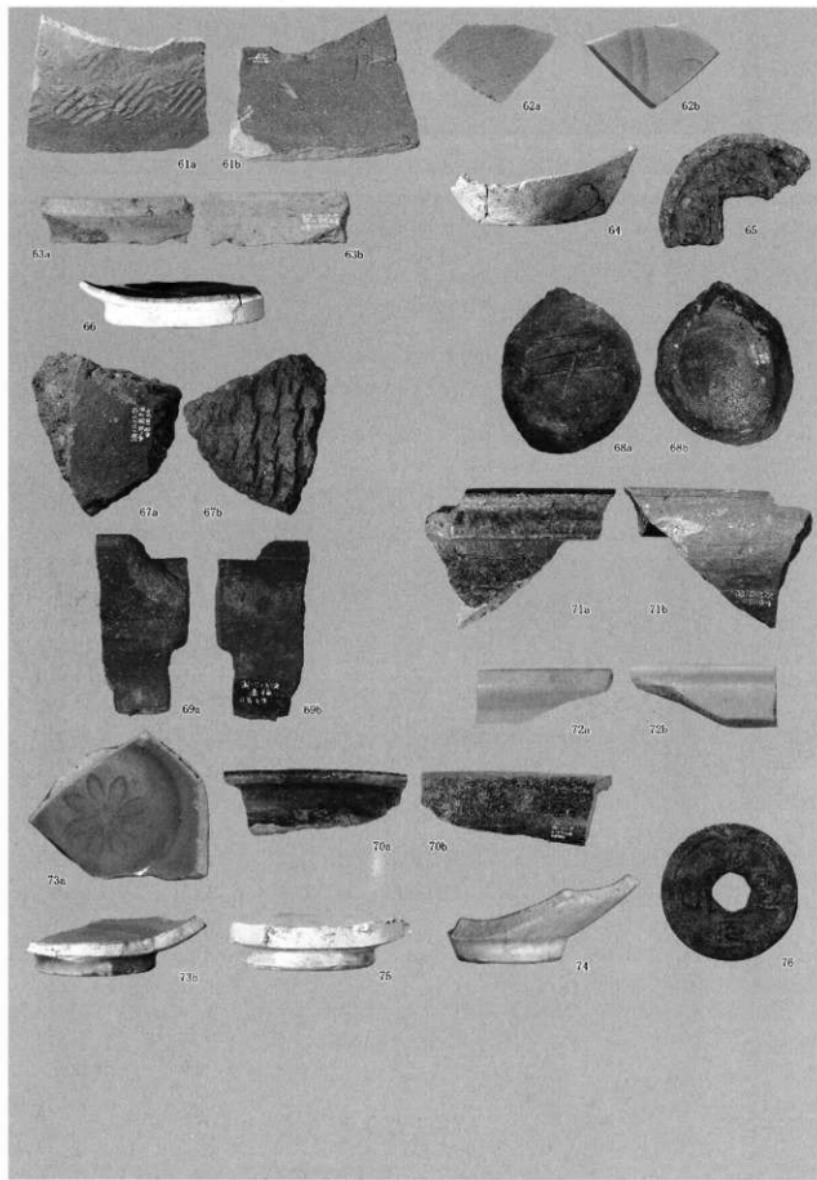
図版22 遺構出土遺物



图版23 基本层出土遗物 1



図版24 基本層出土遺物 2



图版25 基本层出土·表探遗物

# IX 養種園遺跡第7次発掘調査報告書

## 1 調査要項

遺跡名 養種園遺跡（宮城県遺跡番号01346）  
 調査地点 仙台市若林区南小泉一丁目6番28  
 調査期間 平成20年11月17日～11月20日  
 調査対象面積 53.81m<sup>2</sup>  
 調査面積 21.78m<sup>2</sup>  
 調査原因 個人住宅建設工事  
 調査主体 仙台市教育委員会  
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係  
 担当職員 主事 加藤 隆則 文化財教諭 猪谷 敏哉

## 2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年9月25日付けで、地権者より提出された建築に係る発掘届（II20教生文184-182）に基づき実施した。確認調査は、平成20年11月17日に着手し、構造が検出されたため、引き続き本調査を実施した。調査区は排水溝の制約により、はじめ建築範囲東側に1トレンチ（東西3.5m×南北3m）を設定し、I-a・I-b



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	養種園遺跡	生活、墓葬、包含地	自然埋蔵	旧石、古墳、古代、中世、近世	9	砂押工遺跡	散在地	自然埋蔵	古墳、奈良、平安
2	道遺跡	前方後円墳	自然埋蔵	古墳	10	砂押工遺跡	散在地	自然埋蔵	古墳、奈良、平安
3	古墳城跡	円墳、墓塚、城跡	自然埋蔵	古墳、平安、中世、近世	11	神璽遺跡	古跡	自然埋蔵	奈良、平安
4	南小泉遺跡	集落、墓塚	自然埋蔵	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	12	中堀西遺跡	散在地	自然埋蔵	新石、古墳、奈良、平安
5	保原殿跡	集落	自然埋蔵	古代、中世、近世	13	神璽遺跡	城跡	自然埋蔵	中世
6	赤瀬古墳	円墳	自然埋蔵	古墳	14	能登美濃鬼城跡	墓塚	後古代期	奈良、平安
7	鶴塚古墳	円墳	自然埋蔵	古墳	15	牛生家遺跡	包含地	自然埋蔵	平安
8	猪母古墳	円墳	自然埋蔵	古墳	16	中在家遺跡	墓塚、墓地	自然埋蔵、後晉	新石、古墳、平安、中世、近世

第53図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第54図 調査地点の位置



第55図 調査区配置図

層を重機で除去した。II層上面で人力による遺構検出作業を実施し、ピット9基を検出した。同時に写真を撮影しながら平面図・断面図により記録した。その後同トレンチを埋め戻し、建築範囲西側に2トレンチ（東西4.6m×南北4.8m）を設定し、I層を重機掘削し、II層上面で堅穴住居跡1軒、ピット30基を検出した。

### 3 遺跡の位置と環境

義種園遺跡はJR仙台駅の南東約2.5kmに位置し、約300m四方で約9haの規模をもつ。宮城野海岸平野の奥部に位置し、後背湿地南側の自然堤防を占地している。遺跡内では北側と東側へ低くなる特徴があり、特に北側は埋没谷のような地形と予想され、黒色粘土や疊混じりの黒色シルト層が分布している。一方、遺跡南西部は高所となって黄褐色の粘土層・砂層が堆積し、更に下層では砂礫層が認められる。この砂礫層は氾濫原の堆積物と考えられる。

本遺跡は縄文時代から江戸時代の複合遺跡であり、周辺にも今泉遺跡・高田B遺跡・南小泉遺跡で縄文・弥生時代の遺構が検出されている。古墳時代には、南小泉遺跡の集落跡があり、古墳では遠見塚古墳（前期）・猫塚古墳（本遺跡内）・法領塚古墳（後期、本遺跡の北側）などがある。奈良時代には、本遺跡の北側に陸奥国分寺・同尼寺が造営される。隣接する南小泉遺跡では、9世紀代を主体とする集落跡が発見されている。中世には、南小泉遺跡内の城館跡・今泉城跡（今泉遺跡内）・南目城跡などがあり、このうち南小泉遺跡では12世紀後半に屋敷が成立し、14世紀後半には新たに城館が出現し、15世紀前半頃まで存続した。その後、16世紀後半再び屋敷が出現している。伊達政宗の晩年には若林城とその城下町が形成された。その時期は、寛永4年から同14~15年頃までである。本遺跡や南小泉遺跡の西半部はこの町域に含まれると考えられる。城下町期の遺構は本遺跡では少ないが、南小泉遺跡では5ヶ所で武家屋敷跡が検出されている。今泉城跡では、江戸時代以降屋敷地として再利用されている。陸奥国分寺跡では、寺域内に伊達政宗により薬師堂（慶長12年）が建設され、門前に子院群が形成されている。

## 4 基本層序

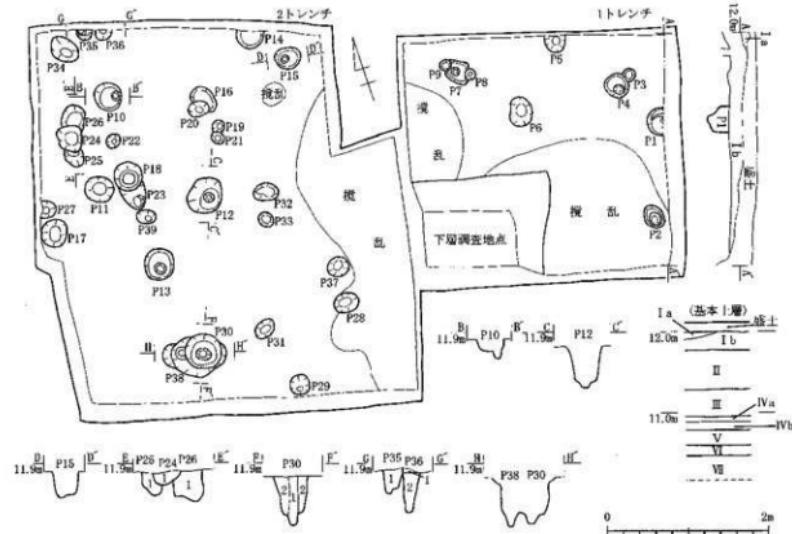
調査地点は約10~25cm程度の盛土があり、基本層は盛土下に人別7層、細別9層を確認した。I a・I b層は褐色砂質シルトで層厚約20cm、II層は褐色シルト質砂で造構検出面である。III層以下は1トレンチ南西部を深掘りして土層堆積状況を確認した。III~IV b層は黄褐色細粒砂、V~VII層は褐色細粒砂である。

## 5 発見遺構と出土遺物

1トレンチでピット9基、2トレンチで堅穴住居跡1軒、ピット29基を検出した。遺構検出面はII層上面である。

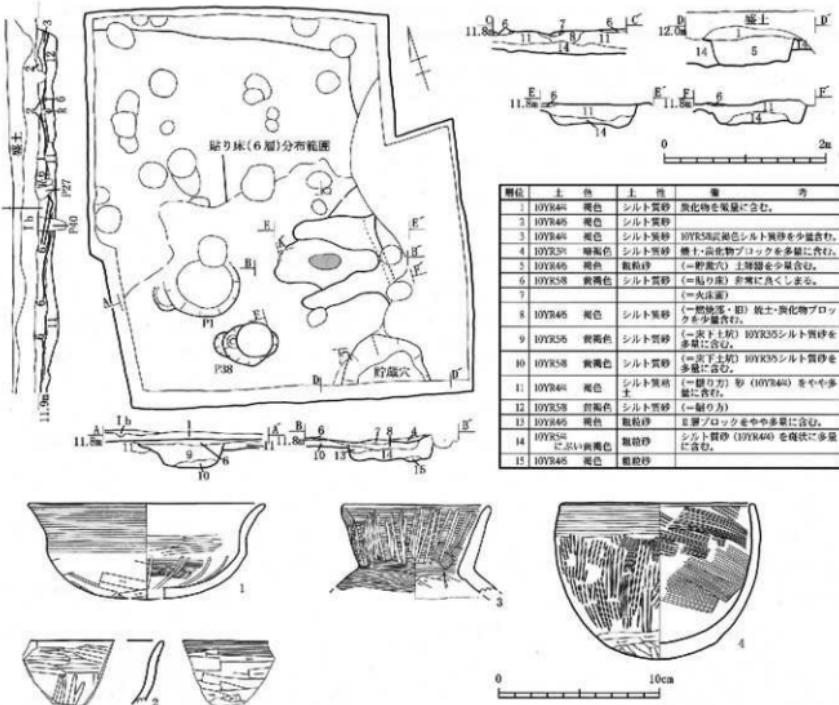
### 1) 穫穴住居跡

S I I 穫穴住居跡 2トレンチのII層上面で検出した。北壁および東壁の一部を検出したが、南壁および西壁は調査区域外である。また東壁は大部分を壊によって壊されているが、東壁掘り方を検出した。平面形は不明であるが、検出した規模は北壁3.7m、東壁1.6mである。掘り方理上上面を床面としており、カマド前面から住居中央付近にかけて貼り床（6層）を敷設する。厚いところでは6~8cm程度確認できる。床面までの堆積層は住居跡中央部分で1層、北側で2層残っている。確認面から床面までの深さは、もっとも残っているところで10cmである。カマドは東壁に位置する。遺存状態は極めて悪く、検出したのは燃焼部と火床面のみである。両袖はほとんど残っていない。



層番号	土色	土性	層名	層厚	土色	土性	層名
I a	褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。II層ブロックを少量含む。	P24-1 10Y24B5	褐色	シルト質砂	II層ブロックを極少量に含む。
I b	褐色	砂質シルト	炭化物を少々。II層ブロックをやや多量に含む。	P24-1 10Y24B5	褐色	シルト質砂	炭化物を少量含む。II層ブロックを少量含む。
II	褐色	シルト質砂		P26 1' 10Y24B5	褐色	シルト質砂	II層ブロックを極少量に含む。
III	黄褐色	細粒砂		P30-1 10Y23J3	褐色	砂質シルト	II層ブロックを多量に含む。
IV a	黄褐色	細粒砂		P30-2 10Y24D5	褐色	細粒砂	II層ブロックを多量に含む。
IV b	褐色	細粒砂	炭化物を少量に含む。	P35-1 10Y24H	褐色	シルト質砂	
V	褐色	細粒砂	炭化物を微量に含む。	P36-1 10Y24D5	褐色	シルト質砂	
VI	褐色	細粒砂		P36-2 10Y24E5	褐色	シルト質砂	
VII	褐色	細粒砂					

第56図 遺構平・断面図



第57図 SI1窯穴住居跡

状況であったが、炭化物や灰等の分布から袖の輪郭が明らかになった。東壁からの袖の長さは左袖で約100cm、右袖で約115cmである。火床面は燃焼部中央にあり、その中心は東壁から65cmに位置する。

カマド以外の施設では、貯蔵穴と床下土坑 (P1) を検出した。この他、P38は柱穴の可能性がある。貯蔵穴はカマド右側に位置し、南側は調査区域外に延びている。平面形は横円形で、規模はD-D'で104cm、床面からの深さは30~35cmである。堆積土は1層で、第57図3の土師器壙が出土した。P38はP30により削平されているが、本住跡の柱穴の可能性がある。正確な規模は不明であるが、床面から底面までの深さは43cmで、底面には径16cm、深さ14cmのピットが見られる。床下土坑は住居跡中央に位置し、貼り床の下から掘り込まれている。北側一部を失ってしまったが、平面形は横円形で西側に小円形の段がつく。規模はA-A'で107cm、掘り込み面から底面までの深さは25~30cmである。底面には貼り床類似の黄褐色シルト質砂 (10層) が堆積する。

遺物は、カマドや貯蔵穴のほか、堆積土や掘り方埋土から、土師器片約100点 (灰約20点、甕70点、壺1点、鉢1点) が出土した。このうち図示した遺物は4点である。1は口縁部と体部の境に稜をもち口縁部が外反する土師器片

である。口縁部内面は横方向のミガキで、体部内面はナデの後、放射状のミガキが施される。2の土師器壺は口縁部と体部の境がなく、体部内面には放射状のミガキが施される。P38出土である。3は土師器壺で口縁部の外外面は横ナデ後、縱方向に磨かれる。4は土師器鉢で外面は口縁部が横ナデ、体部はハケメで底部付近のみヘラケズリである。

## 2) ピット

1トレンチII層上面で9基、2トレンチで29基を検出した。P2・4・7・10・12・13・15・30・35・36では底面に柱痕跡が確認される。このうちP12、P30は比較的深い掘り方を持っている。それらの規模（長軸×短軸×深さ）はP12が45×40×44cm、柱痕径約12cm、P30が45×42×47cm、柱痕径約12cmである。ともにS11竪穴住居跡の堆積土中で検出しており、住居跡には伴わない。また2トレンチで検出したその他のピットも、S11竪穴住居跡の堆積土中で検出していることから、住居跡には伴わないものと思われる。遺物は、以下のピットから出土した。P10で土師器片5点、P13で土師器片2点、P16で土師器片1点、P17で須恵器壺片1点、土師器片7点、P25で土師器壺3点、P26で土師器5点、P30で土師器7点である。いずれも小片で図示し得るものはない。

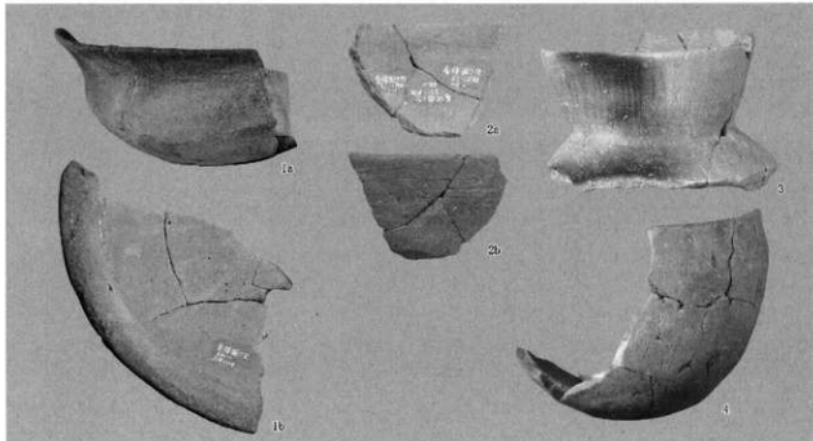
## 6まとめ

II層上面で竪穴住居跡1軒、ピット38基を検出した。S11竪穴住居跡はカマドを持った住居跡である。出土遺物の土師器壺（第57図1）の特徴から、時期は古墳時代後期であろう。

### （参考文献）

佐藤洋 1997「養種園遺跡 発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－」仙台市文化財調査報告書第214集

渡辺弘美・木幡賀一 2008「南小泉遺跡第28次発掘調査報告書－都市計画道路「南小泉茂庭線」－関連遺跡調査報告書Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第325集



図版26 S11竪穴住居跡出土遺物



1 II層上面完掘状況全景(西から)



2 東壁断面



3 検出状況(西から)

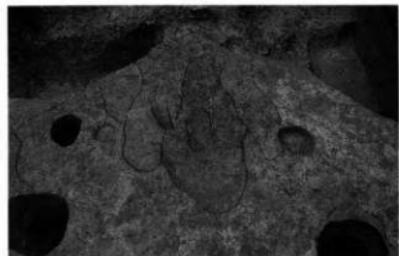
図版27 1 トレンチ・SI2 竪穴住居跡



1 南北断面（西壁）



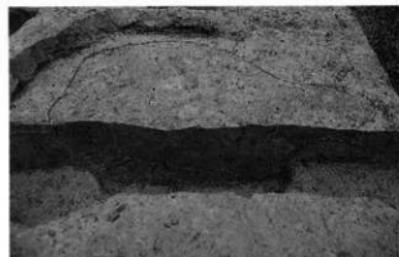
2 東西断面（A-A'）



3 カマド検出状況（西から）



4 貯蔵穴発掘状況（D-D'）



5 P1断面（北から）



6 P1発掘状況（北から）



7 2トレンチピット検出状況（西から）



8 1トレンチ南西下層調査地点（南から）

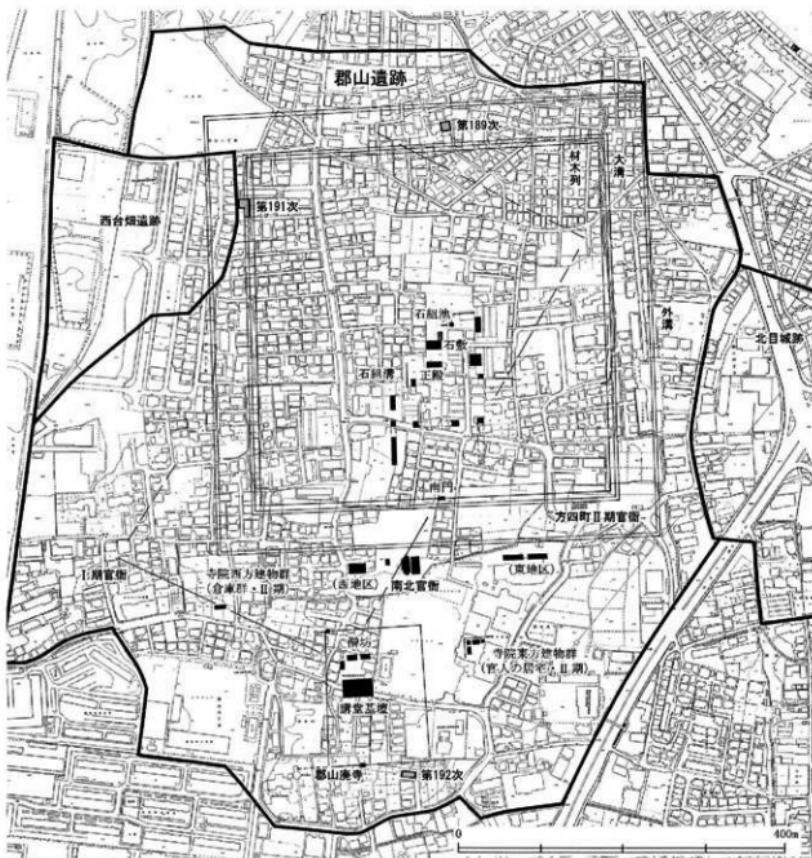
図版28 SI 1 積穴住居跡

## X 郡山遺跡

平成20年度に実施した個人住宅建設に伴う発掘調査は、第5表第57図の通りである。なお、調査の結果および抄録は仙台市文化財調査報告書第348集『郡山遺跡29』に所収している。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因
郡山遺跡第189次	庄内駅北郊	30ha	7月27・28日	個人住宅建設
郡山遺跡第191次	方西町口駅南側西道	11ha	7月22日	個人住宅建設
郡山遺跡第192次	郡山聖寺南邊付近	3ha	11月25日	個人住宅建設

第5表 調査実績



第58図 調査地点の位置

## XI 砂押古墳

### 1. 遺跡の位置と環境

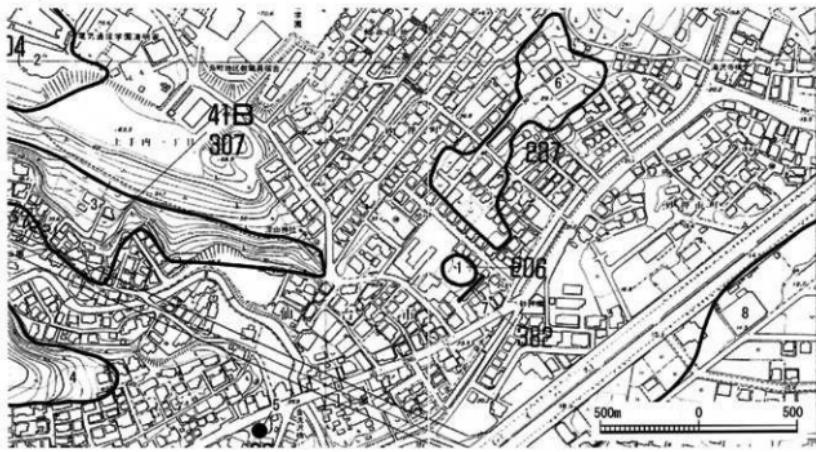
砂押古墳は仙台駅から南西約4km、太白区砂押町の住宅地に位置する(図58)。青葉山丘陵から派生する段丘の南東斜面にあたり、その南東側には広瀬川、名取川によって形成された沖積地が広がる。周辺の丘陵側には砂押古墳のほか、裏町古墳、一塚古墳、二塚古墳など主要な前方後円墳、円墳が分布している。

### 2. 調査概要

平成19年6月に個人住宅建築と擁壁工事の「埋蔵文化財の取り扱いについて(協議)」が提出された。その後、同工事に伴う発掘届が提出されたため、確認調査を実施した上で必要な保存協議を行うこととした。これを受けて平成19年7月9日から8月30日まで確認調査を行った。古墳の規模が把握されたほか、墳頂部から埋葬施設2基が発見された。埋葬施設から副葬品などは発見されなかったが、石棺内からは赤彩の痕跡が認められた。

その後の協議の結果、個人住宅建築に伴い墳丘を削平することとなり、今回の本調査に到った次第である。本調査は平成20年5月14日から8月8日にかけて行われ、調査面積は約600m<sup>2</sup>である。墳丘頂部の埋葬施設を追加調査し、主体部の構造が判明したほか、墳丘の構築状況を把握した。また、墳丘下からは竪穴住居跡などの遺構が重複した状態で検出された。

調査結果の詳細および抄録は仙台市文化財調査報告書第348集『郡山遺跡』29に所収している。そちらを参照していただきたい。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	砂押古墳	円墳	丘陵地	古墳	5	会沢沢古墳	円墳	丘陵地	古墳
2	土手内裏跡	断落	丘陵	平安	6	砂押原野跡	遺跡	丘陵地	平安
3	土手内裏六草墓群	横穴墓／圓錐	丘陵斜面	古墳末／古墳後、平安	7	杉上平(鶴見上平)	上平	丘陵	近世
4	三神塚古墳	集落	丘陵	平安	8	喜沢遺跡	包含地	水田	後奈良時代、平安、中世、近世

第59図 遺跡の位置と周辺の遺跡

## 報告書抄録

ふりがな 書 剖 卷 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所 在 地 發行年月日 ふりがな 所取遺跡名	せんたいへいやのいせきぐん 仙台平野の遺跡群 平成20年度発掘調査報告書 南小泉遺跡他 XIX 仙台市文化財調査報告書 第346集 王道光朗、鈴木謙、加藤隆則、森田義史、大久保伸生、佐藤正弥、熊谷敏哉 仙台市教育委員会 〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7-1 電話 022-214-8894 平成21年3月31日 せんたいへいやのいせきぐん 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
南 小 泉 遺 跡 (第58次)	せんたいへいやのいせきぐん 仙台市若林区南小泉二丁目105-29	04100 01021	38°14'54''N 27°24'21''E	2008.5.12 2008.5.16	48m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
南 小 泉 遺 跡 (第59次)	せんたいへいやのいせきぐん 仙台市若林区達見塚一丁目35-10の一部	04100 01021	38°14'54''N 27°10'40''E	2008.7.22 2008.8.6	55m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
南 小 泉 遺 跡 (第60次)	せんたいへいやのいせきぐん 仙台市若林区達見塚二丁目292-2	04100 01021	38°14'54''N 27°23'50''E	2008.9.24 2008.9.26	10m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
鴻 ノ 巣 遺 跡 (第11次)	せんたいへいやのいせきぐん 仙台市宮城野区岩切字三所北124-5	04100 01034	38°18'56''N 142°3'53''E	2008.5.19. 21	15m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
今 泉 遺 跡 (第7次)	せんたいへいやのいせきぐん 仙台市若林区今泉二丁目85-10	04100 01235	38°12'55''N 142°37'39''E	2008.6.2.4	15m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
沖 野 城 跡 (第3次)	せんたいへいやのいせきぐん 仙台市若林区沖野七丁目40-70	04100 01234	38°13'55''N 142°42'13''E	2008.8.4 2008.8.7	20m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
洞 ノ 口 遺 跡 (第13次)	せんたいへいやのいせきぐん 仙台市宮城野区岩切字洞ノ口100-1, 188-6	04100 01372	38°18'57''N 142°08'12''E	2008.9.29 2008.10.30	86m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
美 義 種 園 遺 跡 (第7次)	せんたいへいやのいせきぐん 仙台市若林区南小泉一丁目16-28	04100 01349	38°14'54''N 142°33'2''E	2008.11.17 2008.11.20	21.78m <sup>2</sup>	個人住宅 建築
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
南 小 泉 遺 跡 (第58次)	集落跡・屋敷跡	弥生～近世	溝跡・土坑・ ビット	土師器・須恵器・瓦		
南 小 泉 遺 跡 (第59次)	集落跡・屋敷跡	弥生～近世	壁穴・居跡・ 溝跡・土坑・ 小溝状遺構群	土師器・須恵器・陶器・ 鐵製品・石器		
南 小 泉 遺 跡 (第60次)	集落跡・屋敷跡	弥生～近世	溝跡・土坑・ ビット	土師器・弥生土器		
鴻 ノ 巣 遺 跡 (第11次)	集落跡・岸敷跡・水田跡	弥生～中世	溝跡	土師器・陶器		
今 泉 遺 跡 (第7次)	集落跡・城館跡・包含地	魏文～近世	溝跡	陶磁器		
沖 野 城 跡 (第3次)	城館跡	中世	溝跡・土坑・ 性格不明遺構	陶磁器		
洞 ノ 口 遺 跡 (第13次)	集落跡・城館跡・屋敷跡・ 水出跡	古墳～近世	井戸跡・土坑・ ビット	陶磁器		
美 義 種 園 遺 跡 (第7次)	集落跡・屋敷跡・包含地	魏文・古墳・平安 ～中・近世	堅穴住居跡・ 土師器			

宗山遺跡・砂押古墳の抄録については、仙台市文化財調査報告書第346集『郡山遺跡29』に所取している。

## 仙台市文化財調査報告書第346集 仙台平野の遺跡群XIX 発掘調査報告書

2009年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町7-1

文化財課 TEL 022(214) 8894

印刷 株式会社 建設プレス

仙台市青葉区新立7丁目2-10

TEL 022(214) 0177

